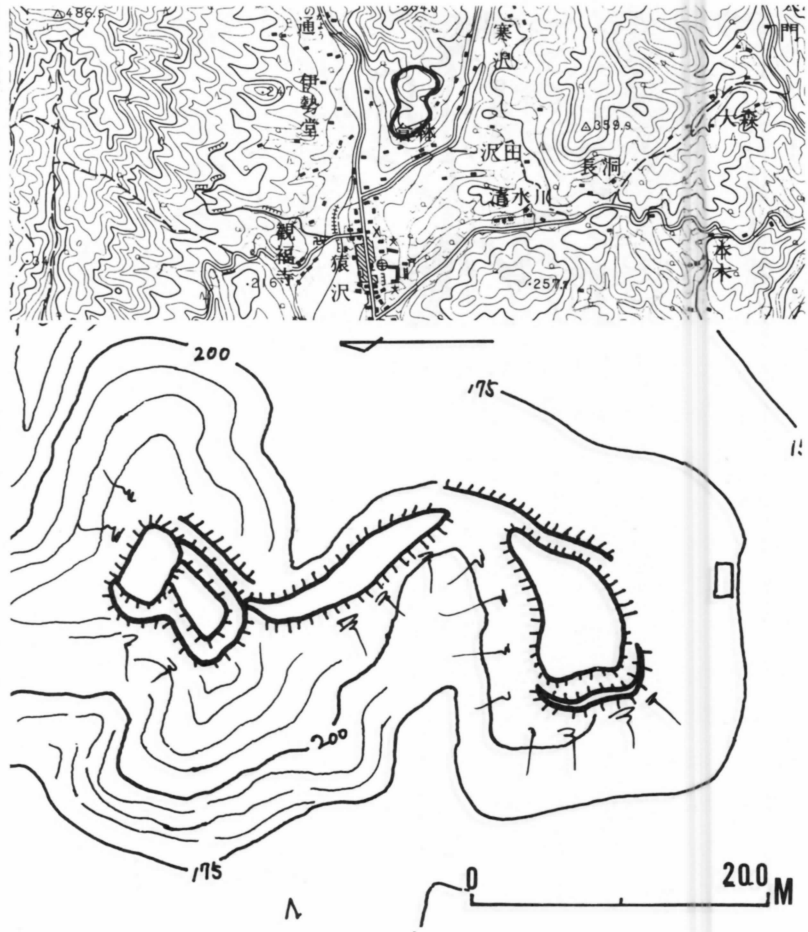
**柴山館**（諏訪館、柴山城、猿沢城）

大東町猿沢字倉林

猿沢の町の中心から北へ約１kmの山頂にある。主要地方道、江刺千厩東和線の東側にあり、標高200m ～247m で、推進城域東西120～150m 。南北360～70m 。北に位置する館を柴山館、山陵端部南に位置する館を諏訪館と呼ぶが、全体を通して柴山館と呼称する事が多い。北館は、本郭は北側に２～４ｍの土壇あり、50m ×30m 。南に近接して２ノ郭（34m ×30ｍ）がある。これらの下位に幅12m 程の土壇がある。更に本郭２ノ郭を廻る土壇（幅５ｍ）がある。南の館は、現在牧草地となっている。造成されずに残った部分から本郭、２ノ郭の存在を窺わせる。牧草地の下位を深さ５～６ｍ幅10m 程の空堀がとりまいている。二つの館の間の尾根は、幅30m 長さ130m 程の平場である。『仙台領古城書上』は城主を中津山三郎右エ門としているが『大東町史（上）』は先住城主として、及川掃部信次居館とし、中津山氏は後住の城主であるとしている。




**中　館**（古館、曽慶館、岩渕館、曽慶城）

大東町曽慶字佐之平

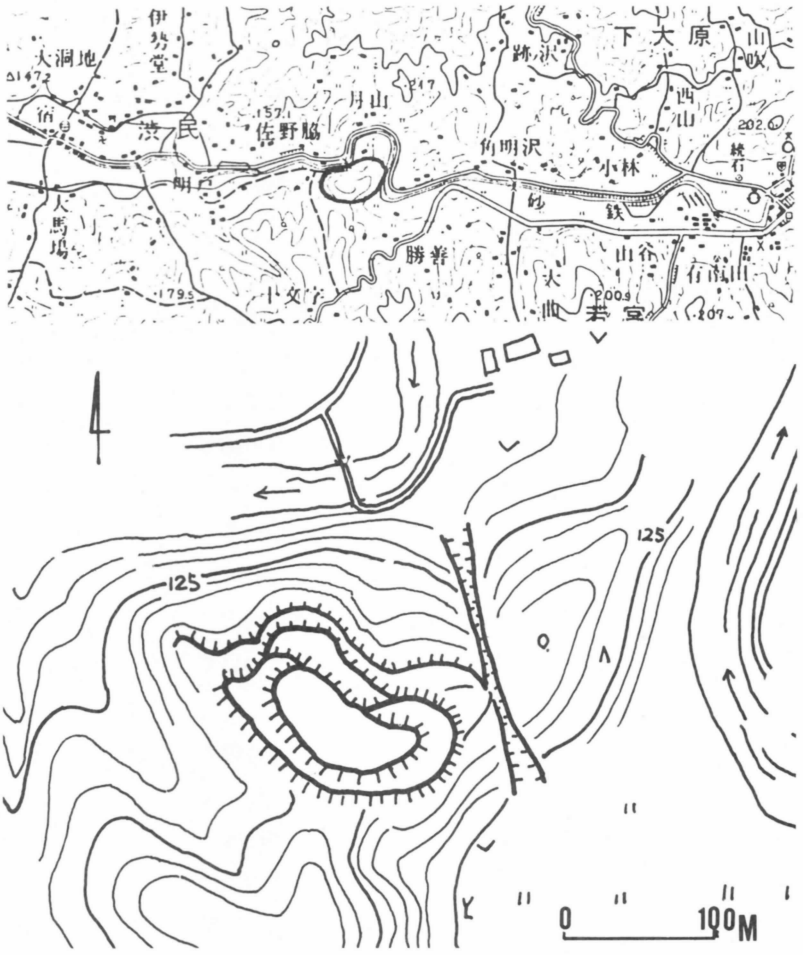
大東町立曽慶小学校の北東約400m の丘陵頂部に位置する。北に安全寺があり、周囲は急峻な崖である。標高145m ～181m 程、推定城域250m ×170m 。東端は、幅50～40m 、深さ10m ～20m の凹地となっている。北側は、ゆるい沢状の畑で北東で尾根を切る如く伸びている。

本郭（70m ×30m ）の東端に「的場」と称する高さ２ｍ、幅10m 程の土壇がある。本郭は北寄りにあり、南に空堀が３条横に入っている。本郭寄りから１号堀（幅８ｍ、深さ３ｍ）２号堀（深さ７～８ｍ幅10m ）３号堀（幅３ｍ高さ２ｍ）となっている。南面は畑となり遺構不明瞭である。『仙台領内古城書上』によれば「山曽慶城東西24間南北25間二ノ丸東西24間南北24間城主岩渕兵庫」とある。『大東町史（上）』『風土記御用書出』『日本城郭大系』『史料仙台領内古城・館』『渋民村誌』等の文献がある。

**根城館**　（根城）　大東町渋民字館下

大東町立渋民小学校の東約1.7kmの丘陵にある。砂鉄川が大きくΩ状に蛇行する根元にあり河川が天然の要害となる。推定城域東西250m南北220mである。標高115m～155mの丘陵で、東側の丘陵を切る空堀り（幅8m深さ3～5m）がある。本郭（100m×35m）の下位に幅20m程の平場（2ノ郭）がとりまく。北、西側にも2～3段の平場を持つ。尾根を切る空堀りは3ノ郭と連結し北～西を廻る。空堀りの両端は、北と南へ落ちている。

『仙台領古城書上』には「山根城東西22間南北18間二ノ丸東西21間南北9間城主千葉安房」とある。『大東町史（上）』では、「館主及川遠江守」としている。的場、御殿山の地名残る。『史料仙台領内古城・館』『風土記御用書出』等の文献がある。『磐井郡東山之内旧城43館』によれば「一山根城（22間、18間）及川遠江守居住、其ノ後天正ノ頃ハ千葉安房居住ナリ」とある。




**藤沢城**（館山、亀井ケ城、亀ケ城、柳ケ館）
藤沢町藤沢字西風

藤沢の町並の北に聳える標高218.9mの山頂にあり、眺望が利く。城域は東西250m、南北230mにも及び山頂部全体を利用している。東側で一部公園化され、駐車場・広場に造成され旧形状を失っているが、全体的に遺存状況の良好な城館である。

本郭（100m×59m）を中心におき、西に物見台（42m×27m）の機能を窺わせる郭がある。主郭の周囲には、幅5～7mの帯郭が廻っている。本郭の東端から堀切りをもって郭を離し、3段の平場が南へ突き出ている。この周囲もまた小規模な帯郭が廻っている。

『仙台領古城書上』によれば、「山藤沢城、東西100間、南北60間、二ノ丸、東西90間、南北40間、城主岩渕近江、葛西没落之時退散ス。曽孫清左門末孫。（以下細）」とある。大東町金一弥氏所蔵文書中に

「狩野新五郎同姓宮内丞居城」とあり

岩渕氏以前の居住者のあった事が窺われる。

**伊勢館**　大東町鳥海字清水

遺跡の位置

国鉄大船渡線摺沢駅の北北東約８㎞、車で約15分の興田地区に位置する。砂鉄川の支流、興田川が流れ、これに注ぐ小河川は、丘陵を開析し葉脈状に伸び小谷地を形成している。伊勢館は興田川によって形成された谷底平野を一望する丘陵部に位置する。眠下には、八日町の市街地があり、公民館、開発センター等の公共施設が集中し当地区の行政・商業の中心地となっている。

伊勢館は、『史料・仙台領内古城館』によれば、本丸、二ノ丸、三ノ丸を記し、「枡型」を組み入れた独特の構えであるとしている。二ノ丸は「枡型」部分をさしている。三ノ丸には伊勢社が祀られ地区民の信仰をあつめている。

歴史的環境

大東町内には47の城館が報告されているが、興田地区には、11の城館がある。城主の変遷、築城、廃城、については不明な点が多い。

文治５年（1189年）奥州藤原氏の滅亡により、鎌倉御家人の来住が始まる。当地方は、葛西清重の所領する所となり、天正18年（1589年）の葛西氏滅亡までの四百年間は、葛西治下となった。磐井郡東山は、奥田保、黄海保の二保に分けられ、東山の地は、葛西氏の家臣で、千葉系大原飛弾守頼胤が寛喜２年（1230）に奥州探題として下向し、その子宗胤が大原に居を構えたことにより沖田をはじめ多くの城館主達は千葉氏の統轄下に入ることになった。山吹城の築城時期築城主について、加藤進一氏は諸説ありと報告している。

沖田地区の城館は伊勢館のほか、柏木館、川島館、美女森館、祖母館、若宮館、構館、花崎館、要害館、古谷館、室石館がある。城主については、祖母館、若宮館を除く他の城館主は、及川氏を名乗っている。柴山館、根城も城主及川氏の名が見える。伊勢館の城主については、佐島直三郎氏が、大東町文化財調査報告書第８章『昭和59年度伊勢館遺跡発掘調査報告書』の中で詳細に論考しているので参照されたい。

発掘された遺構・遺物

１遺　構

(1)平場と空堀

伊勢館は丘陵先端部に位置し周囲は急峻な崖となっており、丘陵の削平と土盛によって縄張りを行っている。後背部の斜面には、縦横に空堀が走っている。

本郭をはじめとして、23区の平場を確認している。この平場に付随して、空堀が造られている。Ⅰ区（本郭）が最も広い面積を持ち4,750㎡をはかる。空堀は、自然の小沢を利用、若しくは人工的に造成したもので23条確認されている

(2)　建物跡

柱穴は2915を数える。56棟の建物跡が確認され、Ⅰ区（本郭）51棟、２区３棟、９区１棟、10区１棟となる。このうち、３間×１間が15棟、４間×１間が７棟ある。

(3)その他の遺構

竪穴住居跡が２棟確認されている。柱列141、土拡50、焼土跡19、溝状遺構37、柵列10、集石５、土墨６、石列３、石積１、等である。

２遺物

(1)　陶磁器

赤絵磁器３点、青磁21点、白磁37点、染付磁器43点、灰釉陶器25点、鉄釉陶器14点、白釉陶器５点、瓦質陶器１点、国産陶器69点である。何れもⅠ区（本郭）から集中して出土している。青磁では、酒海壺の破片が三点出土している。これらの陶磁器は一部除き15～16世紀の生産品と推定される。

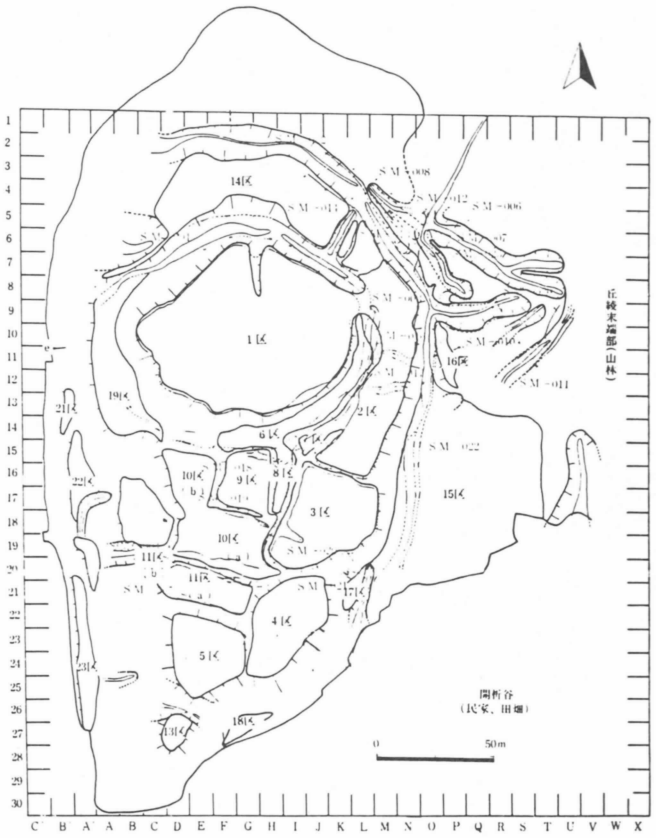
(2)その他の遺物

古銭はすべて渡来銭である。唐の開元通宝及び、北宋銭（皇宋通宝、熙寧元宝、元豊通宝、紹聖通宝）明銭（洪武通宝、宣徳通宝）である。判読不明２点を含めて13点出土している。

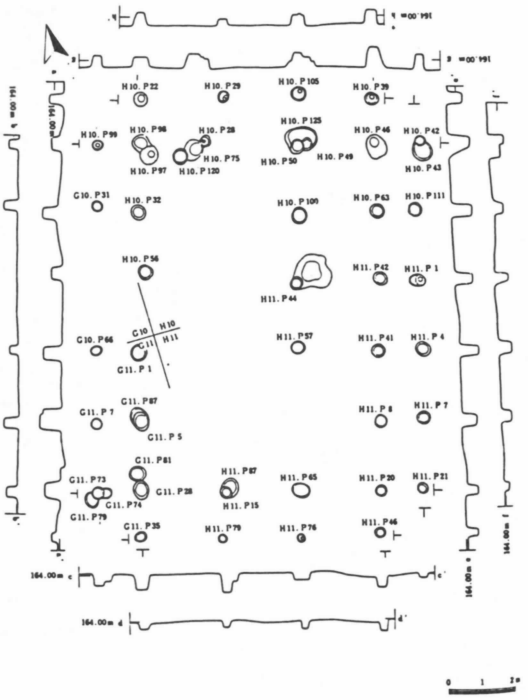
鉄製品には、総数115点である。釘、鋳物、刀子、鉄鉢、鎌、鍋の耳、燧金、羽子板、鉄輪、小札等である。

木製品では、クヌギ材のへらが出土している。空堀（SW003）の底から出土し、全長104.0㎝である。

Ⅰ区の四つの土拡から稲藁が出土した。籾が付着していたが発芽実験では発芽しなかった。本文に引用した遺構遺遺物の数は、『昭和57年伊勢館遺跡発掘調査報告書』によったものである。

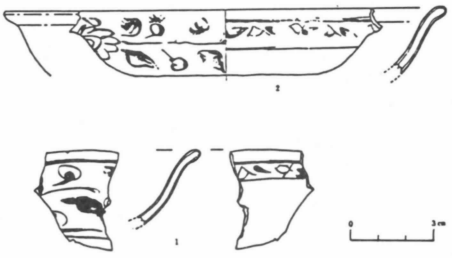



平場位置図



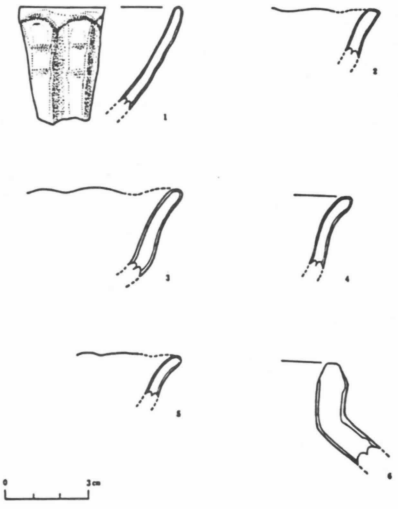
SB-012平面図及び高低図

掘立柱建物跡



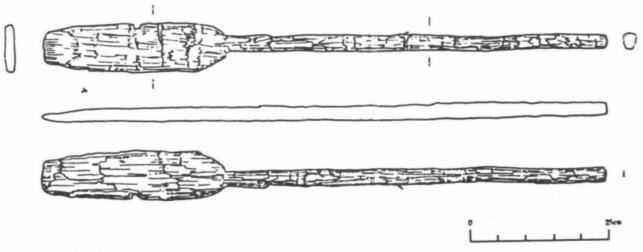
赤　絵

出土陶磁器



青　磁

2、3は酒海壺片



木製品(箸)

SW003　空堀出土

**砂子田館**　（砂子田城、御貝館、揚貝館）

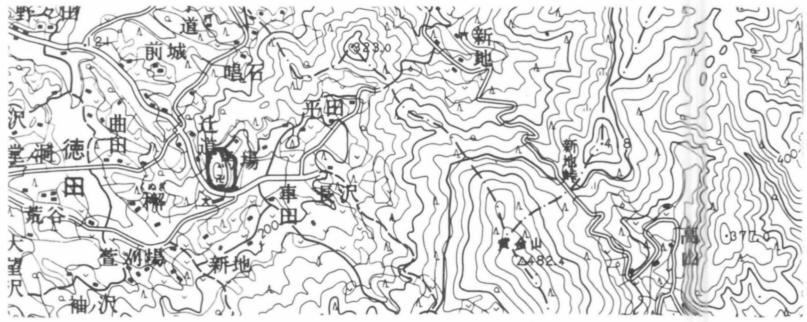
藤沢町砂子田字野々田

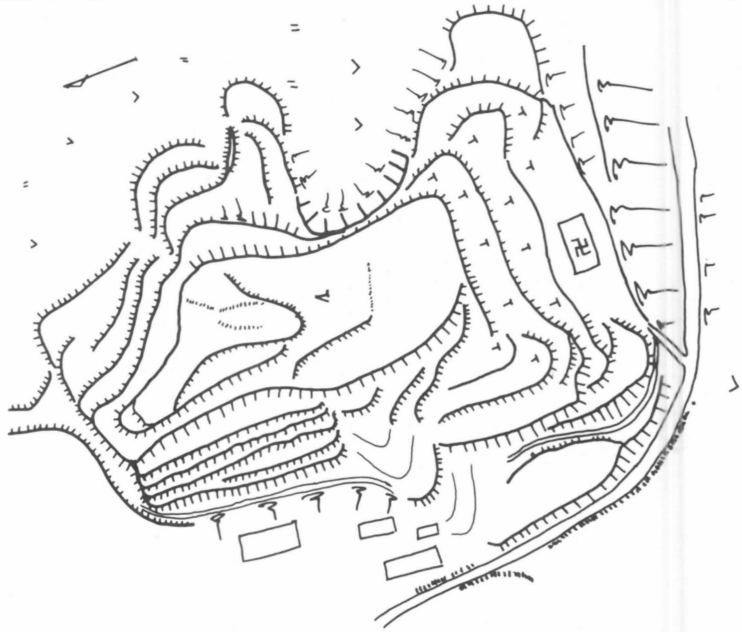
県道江刺千厩東和線の野々田橋北側の丘陵にある。砂子田川が直下を流れている。頂部は標高約130ｍである。城域は東西200ｍ、南北150ｍで、北～南にかけて急峻な崖である。主郭（84ｍ×57ｍ）、二ノ郭（64ｍ×27ｍ）がある。東側にある二ノ郭は畑地造成により腰郭の一部をつぶして拡張されている本郭を取り囲む様に北～東へかけて空堀（幅16～10ｍ）が廻っている。この空堀が尾根より城館を独立させている。主郭南側は腰郭が２～３段残されている。主郭北側にも55ｍ×６ｍ、50ｍ×４ｍの腰郭が２段ある。

『仙台領内古城書上』によれば、「山砂子田城、東西33間、南北14間、二ノ丸東西23間、南北108間城主千葉宮内左衛門」とあり、安永４年の『風土記御用書出』には、「御貝館」の名が見られ城主についても同じ記載がある。（東西・南北の数字が取り違っている）要害的場、風呂の沢の屋敷名が残っている。

**馬場館**　（徳田城）　藤沢町徳田字馬場

藤沢町立徳田小学校の北側の丘陵先端部にある。標高223.2ｍ、推定城域東西200ｍ、南北250ｍである。西光寺が裾部にある。腰郭の一部は墓地。堀切りをもって、尾根より独立。主郭は緩傾斜で北から南に伸びる。頂部に愛宕社の小祠が鎮座している。本郭の北側西斜面には、堀切りより伸びた堀底を下位として６～７段の帯郭がある。周囲は急峻な崖である。帯郭の発達は西北部において顕著である。馬場、前城の地名残る。当館について、『仙台領古城書上』『徳田村風土記御用書出』には記録されていない。地方における口伝、『藤沢町の城館』『仙台領内古城・館』に記載されている。館主については、星美濃、三浦杢之助、風呂木工の名があり詳細不明。

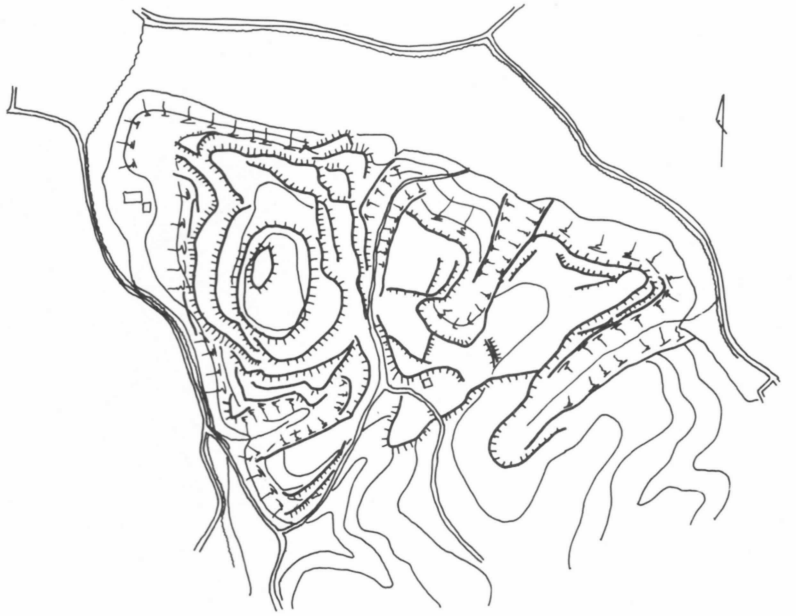


**深堀館**（黄海城、深堀城）藤沢町黄海字深堀

二日町の真南、直線で600ｍにある。標高99ｍの丘陵である。城域は、東西750ｍ、南北600ｍ。昔は、黄海川が、北側城館直下を流れていたと伝えられ、「本町」の地名もある。本丸、二の丸、物見台、搦沢、刑場の地名が残る。４本の大きな沢が丘陵に入り込み、天然の空堀りを呈している。この空堀りにより、丘陵を三つの大きな郭に独立させているが基部においてそれぞれ連絡し合っている。本郭には、物見台と思われる小高い場所があり、周囲を２段の帯郭が取り巻いている。二ノ郭三ノ郭とも比較的広い緩傾斜の郭である。遺存状況良好。

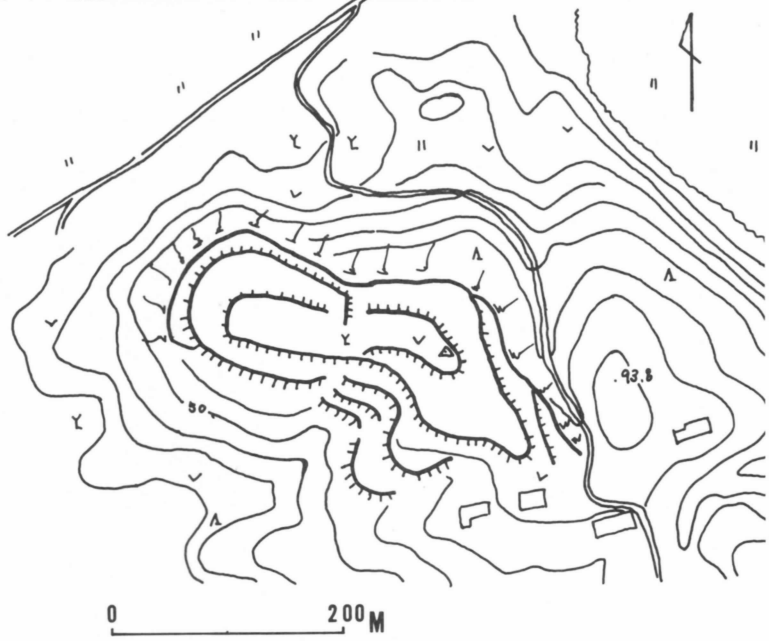
『仙台領古城書上』によれば、「山黄海城東西25間、南北48間、二の丸東西29間、南北54間城主千葉新右衛門」とある。『風土記御用書出』には「深堀館南北30間東西15間、右ハ葛西御家臣深堀新右衛門様御住居之由申伝候處右年号相知不申候事」とあり、規模の記載に違いが見られる。



**熊館**（楓樹ケ城）　藤沢町黄海字熊館

町立黄海小学校の南東約１kmに位置し、標高101.２ｍの山頂である。黄海川によって形成された沖積平野を眼下におき要衝の地である。城域東西450ｍ、南北350ｍ。

輪郭式の山城で、南から北へ張り出した山陵を空堀をもって尾根を切っている。大きな沢が東に２つ西に１つあり要害の地を思わせる。本郭（80ｍ×30ｍ）、二ノ郭（100ｍ×50ｍ）が東西に並んで、これを取り囲む様に三ノ郭、四ノ郭がある。各郭とも本郭、二ノ郭の連絡部と同一地点でそれぞれ登口を持つ。帯郭は西端に一段、南側に２～３段、東側に１段ある。沢を隔てて東に物見台と伝わる郭（標高93.８ｍ）がある。50ｍ×90ｍ程である。遺構の残存状況全体に良い。「藤沢町史（上）」によれば、『仙台領古城書上』に「熊館館山東西33間、南北25間二ノ丸東西47間、南北19間、比城安部貞任楯籠候城也」とある。「黄海村史」にも同様の記載がある。しかし、『仙台叢書第四巻』の「仙台領古城書上」には記載がない。

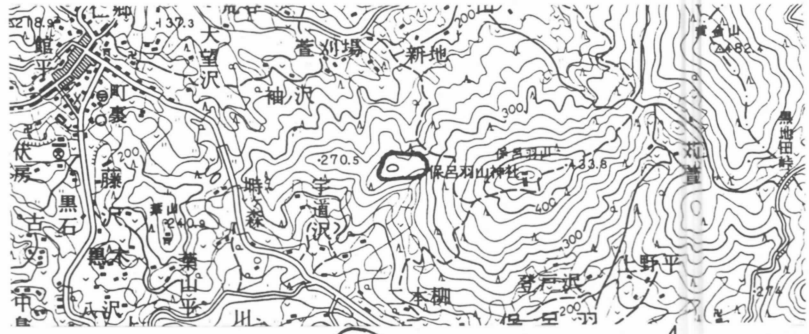


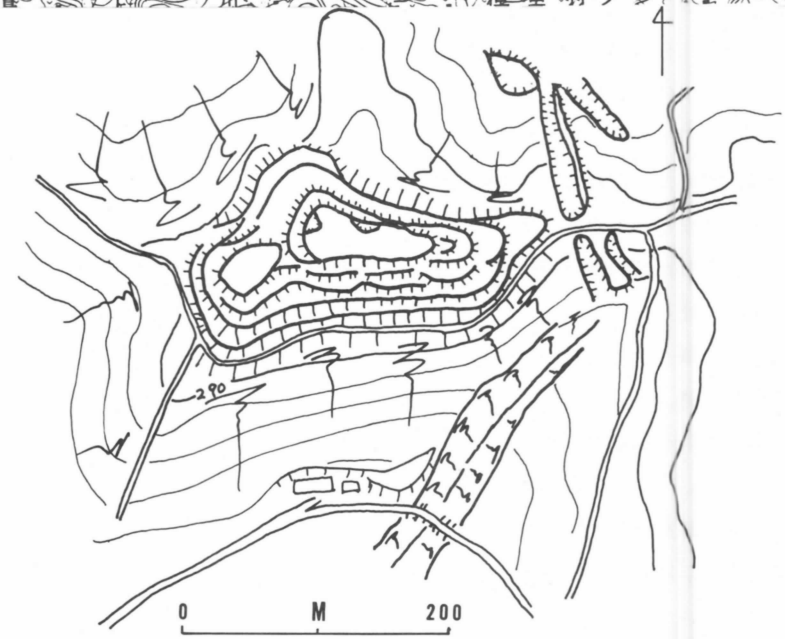
**陣ケ森館**　藤沢町保呂羽字宇道沢

保呂羽山（標高433.8ｍ）から西へ伸びる山陵にあり、本郭で標高303.9ｍ。東端は、陣ケ森峠と呼ばれ徳田と保呂羽を結ぶ旧道が通る。城域は東西約350ｍ、南北約200～220ｍ。遺構は全体に良好である。主郭、帯郭、空堀により構成。

空堀りは東方陣ケ森峠付近に認められる。主郭（100ｍ×30ｍ）は頂部にあり比較的平坦である。西側において幅の広い郭となっている。南面と北面に帯郭が２～３段発達している。南面において郭の下を山道が通っておりこれより下位には平場等の遺構は認められない。主郭の東方には三段の郭があり、北面、南面の帯郭と連絡している。

文明年間、佐藤豊後守信重居住と伝わる。また、天正16年、岩渕氏と大原千葉氏争乱の時、太守晴信が仲裁の労をとった陣所と伝わるが詳細不明。



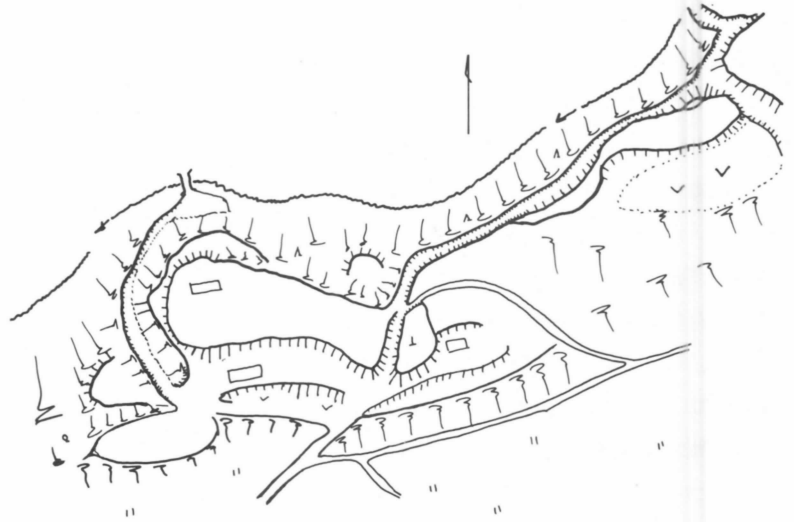

**新城館**　藤沢町砂子田字新城

県道江刺千厩東和線の関田橋から北東へ約400ｍ程に位置する丘陵。北側を大平川が流れる。この太平川が流れを北へ変えるカーブの南側の丘陵で急峻である。

東西に細長い丘陵を東西両側で空堀により尾根を切っている。南面は、小規模な土壇を伴っているが、基盤整備により旧地形を失っている。遺構は、北面の帯郭が僅かに残る。推定規模、主郭東西40ｍ×南北45ｍ、二ノ郭東西100ｍ×南北20ｍ程である。

『風土記御用書出』(安永四年）によれば「一新城館、南北46間、東西46間、右御城主弁年月共相知不申候事」とある。

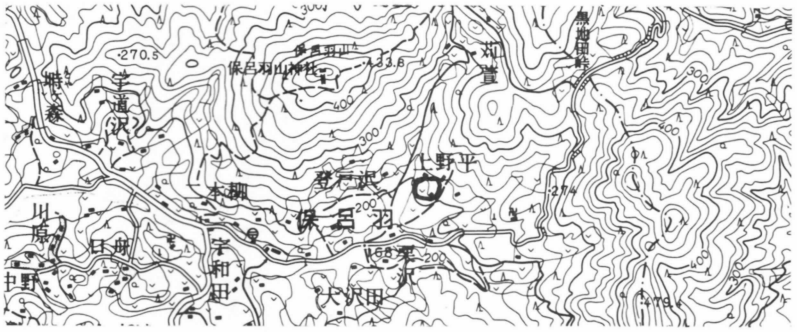
『藤沢町史』によれば、「『岩手叢書』東山に「新城館、城主不詳、東西50間、南北80間」とあり、大正元年刊『八沢村誌』にも同様のことが記してある」とある。

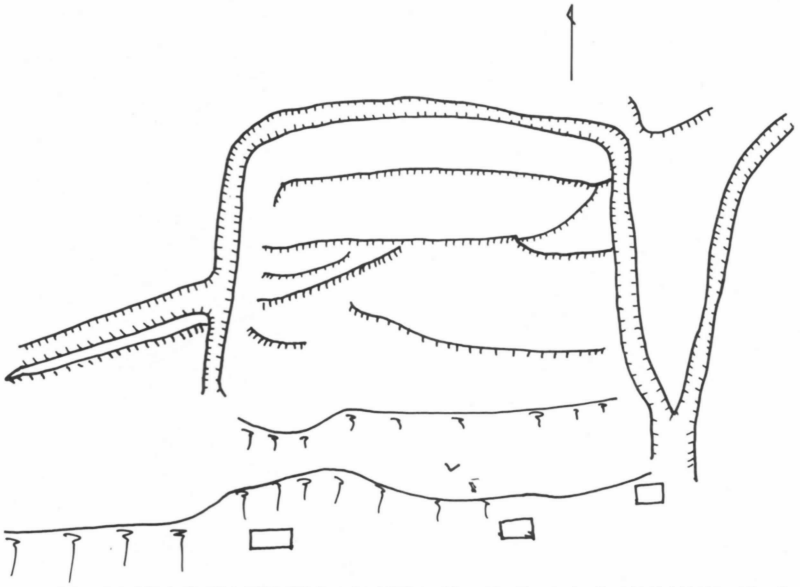


**要害館**　藤沢町保呂羽字上野平

大津保郵便局の北東約1.2kmにある。標高220～230mの丘陵南斜面にあり城域約110m×90m程である。南側を除く周囲に空堀りを廻す。南側は畑となり急な斜面である。上部の郭は20m×70m程で北側背後に空堀りがある。次の郭は、幅13mである。順次段々に下方に降る。

地元には上要害の地名残る。伝えによれば小野寺主計頭の居館と伝えられるが詳細不明。『藤沢町史（上）』によれば、千葉真一氏の調査により「小野寺主計頭」の居館に間違いないとしている。『風土記御用書出』『仙台領古城書上』には記載がない。

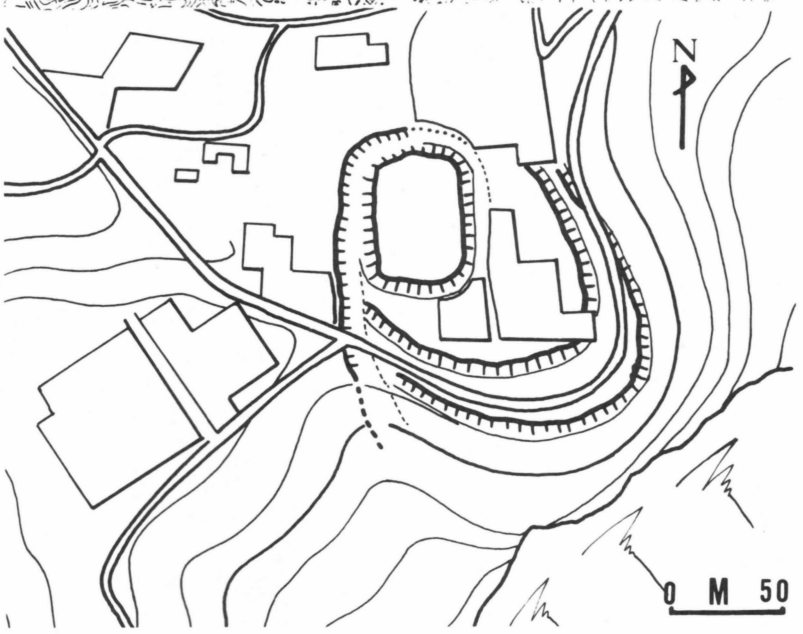


**搔引城**　東磐井郡東山町長坂字山谷

猊鼻渓を流れ出た砂鉄川は、猿沢川と合流し、長坂の町で大きく蛇行する。搔引城は、この蛇行地点の北西側標高78mの丘陵上にある。砂鉄川に面する東南部は急であるが、西側は緩かな傾斜が続く。現在、館跡北側は学校敷地となる。主郭は、東西37m、南北45m、北西部から西にかけ空堀がまわり、そのまま南面の谷へと続いている。主郭東南側には腰郭状の張り出しが二段あるが、上段は町営住宅、下段は長坂一田河津線の道路として改変されている。

城主は、唐梅館と同一の千葉刑部少輔（千葉頼胤）といわれる。しかし、『御出馬東山御通筋案内手控』(文政5（1822）には、「…千葉介頼胤奥州へ被相下候節、長坂村搔引城ニ住居ノ由右唐梅館ハ要害ノ館ニテ、常ニ住居ノ地ニハ無之由申伝候。」とある。そのため、その後の記録類には唐梅館と混同して記載しているものもある。

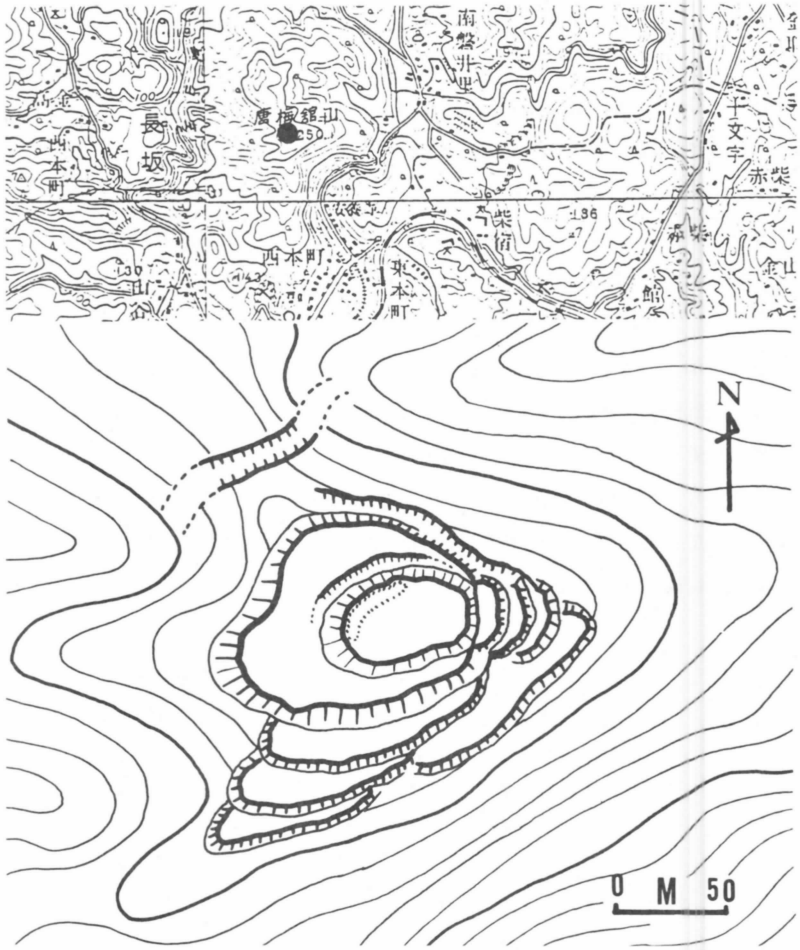


**唐梅館**　東磐井郡東山町長坂字西本町

長坂の町の北方、猿沢川・山谷川に挟まれた唐梅館山(標高250.3m)の山頂に位置する。東南斜面下部は、猿沢川の侵食した石灰岩の断崖が広がる。南側尾根はこれに比べ緩かでかっては登攀路であったが、現在は北側からの林道が通じる。

主郭（東西53m南北27m）は山頂部で、北から西端にかけ高さ約1mの土塁がある。主郭から5m下がり、西北部に二の郭が付く。井戸跡もみられ、北面には空堀もある。東と南に腰郭が多いところで7段付く。これらには的場・馬留場の伝承もある。北には尾根筋を切る空堀がある。

城主は千葉刑部少輔と「古城書上・風土記書出」に記す。刑部は千葉常胤の子頼胤といわれ主郭西方土塁上にその供養碑が立つ。この碑は文政5（1822）年の「御出馬東山通御案内手控」中に「子孫ノ者相建候由申伝候、聢ト年月等ノ義ハ相知不申候」と記されているものである。




**東館・西館**　東磐井郡東山町長坂字館合

両館は、立地等から同一城館と思われるので一括して記述する。東館・西館は、猊鼻渓上流の砂鉄川の北岸、標高約100mの丘陵上に位置する。丘陵南側を大船渡線が走る。館はこの大船渡線の北方約200m、東西並列する。丘陵東西の深い沢は、館の背後で空堀となり尾根を断ち、館を独立させている。

東館の主郭は南北約60m東西約50m、南面を中心に腰郭がまわる。北面は幅5mの空堀で切り、緩かな斜面を経て前述の空堀へと達する。西館との距離は約200m、間には凹地が横たわる。

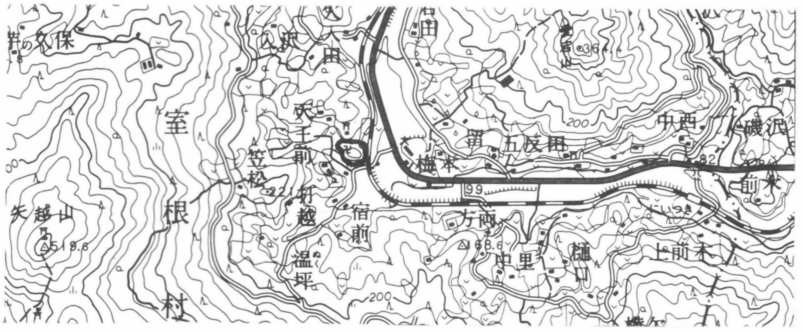
西館は、主郭が南北約55m東西約50mの平場で、北に土塁がある。主郭を中心に段差約3mの腰郭が2～3段まわる。北に空堀を隔て二の郭があり、空堀西側には井戸跡と思われる湧水地もある。

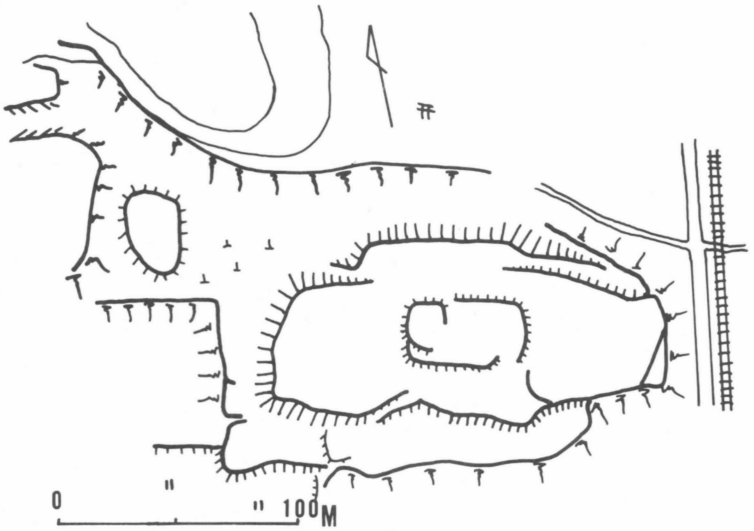
館主名は、古記録類には記載されず、また伝承等も残っていない。

**浜横沢城**　室根村折壁字天王前

室根村立浜横沢小学校の西300ｍに位置する。城の東端を国鉄大船渡線が通る。西から東へ張り出した丘陵で、標高128ｍ程である。城域は東西250ｍ、南北180ｍで西端は、松山寺の西側と推定される。一部郭を巡る空堀は墓地となっている。主郭を中心に置き周囲に腰郭状に配置している。本郭の東は緩傾斜で大きな段差はない。南と西に位置する一段低い郭は平坦である。その下に全体を取り巻く様に平場が廻っている。同城の南側には、館前屋敷の屋号を持つ家がある。

「仙台領古城書上」には、『山浜横沢城東西22間、南北26間、二ノ丸東西60間、南北85間、城主伊勢ト斗申候伊勢三郎末カ』とある。城主については諸説ある。当城の南には向館、北には北館、東の浜横沢小学校隣には梅木城と口伝の城館があるが、遺構が不明瞭である。

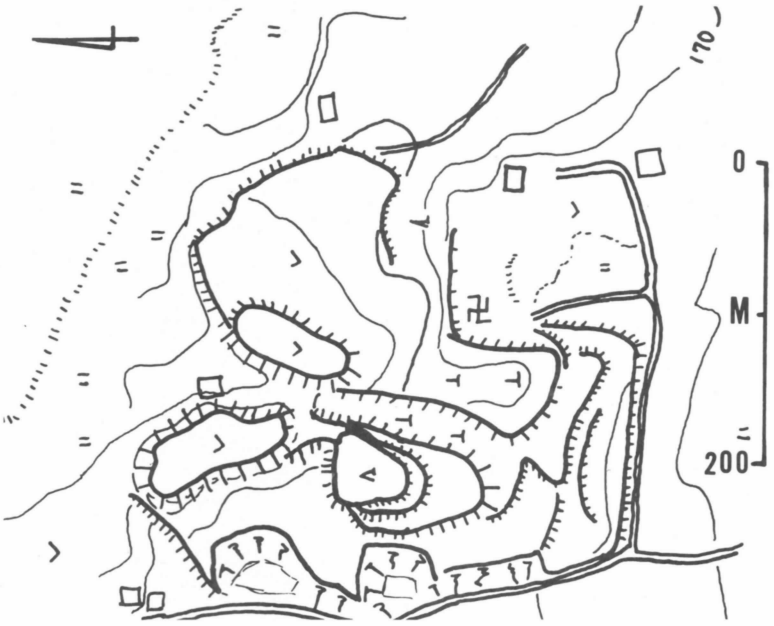



**金鶏城**（曲館、西城、下折壁城）室根村折壁字聖沢

室根村役場の西北550ｍの丘陵上に位置する。城域は東西300ｍ、南北330ｍにも及ぶ。城内は山林、畑、墓地等である。北端に本郭（30ｍ×100ｍ）があり、標高199.8ｍを数える。本郭の直下に丘陵の尾根を切る堀切りが見られる。南の二ノ郭に接続する部分は西側から入る小谷によってやや狭くなり土橋状を呈している。二ノ郭は、本郭より６～７ｍ程低く、40ｍ×60ｍの平場で、東～南にかけて小規模な腰郭が巡る。両郭の東側を南北に空堀りが走っている。南側で幅30ｍ程。本郭と二ノ郭の接続地点の空堀を挟んだ東側にある小高い丘は、従来当城の施設として報告されていないが、付属する郭として、また二の郭の東に伸びる広場（畑）は、丘陵全体の構成から見て、前述の郭と同様当城の付属施設と推測するものである。

「仙台領古城書上」によれば、『西城、東西12間、南北42間、城主千葉遠江』の記載がある。



**内館**　東磐井郡東山町松川学館

松川の町並みの西南、地蔵平からの丘陵が砂鉄川の東岸に接する場所に位置する。標高は主郭頂部で約57m、館の南部を県道猿沢花泉線が走り、現在では丘陵と切断されている。西北部は砂鉄川に面し、侵食を受け断崖となる。館跡全体の規模は、南北約350m、東西230mに達する。

主郭は、館の北部に位置し、西北部は砂鉄川に面す。南北約100m、東西60mで、中央に古館明神社が鎮座する。この主郭には、東西に各二段ずつの腰郭が付く。東側上段の腰郭は、そのまま主郭南で空堀となる。この空堀東側には、墓石が分布する部分があり、大手口の枡形状にくびれを持つ通路がある。空堀内には地蔵尊が祀られ、近世以降の宝剣が多数奉納され、また天保10（1839）年銘の灯籠二基も建っている。

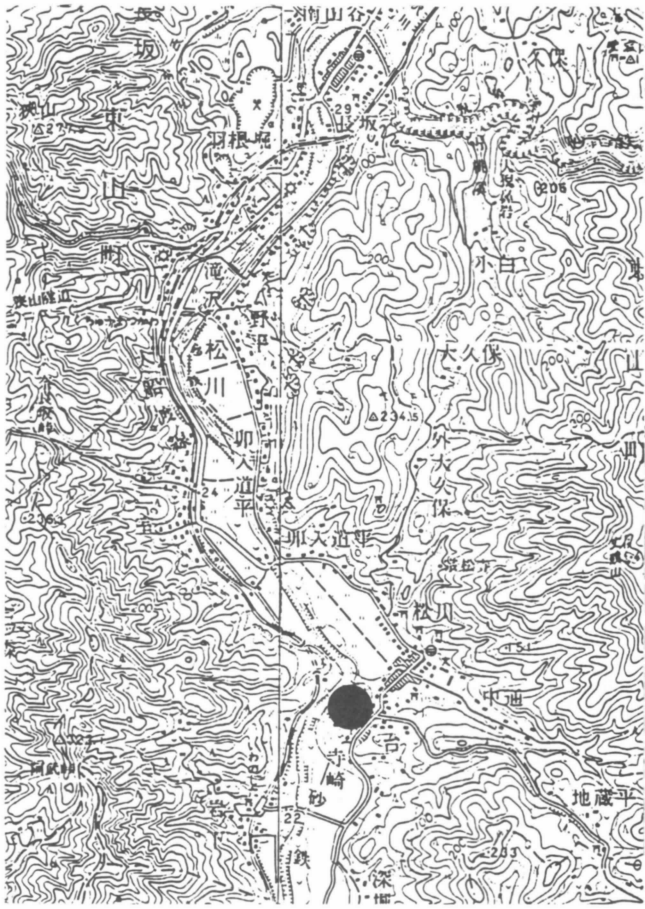
主郭と空堀を隔てて二の郭（南北約70m東西約40m）が築かれる。東西に広い腰郭が付く。東面は2～3段で井戸跡と思われる湧水地もある。西側は、砂鉄川へ注ぐ沢が入り、急峻な崖となる。この腰郭が南面に張り出し、二の郭と空堀を隔てて、三の郭となる。三の郭先端は南西側にくびれ、これに沿うように空堀が切られ、その西端は前述二の郭西側の沢へと取り込まれる。さらにその外側南東部には二段の低い段差を持つ出郭（南北50m、東西60m）が付き、その先端にも、数条の帯郭が配されている。

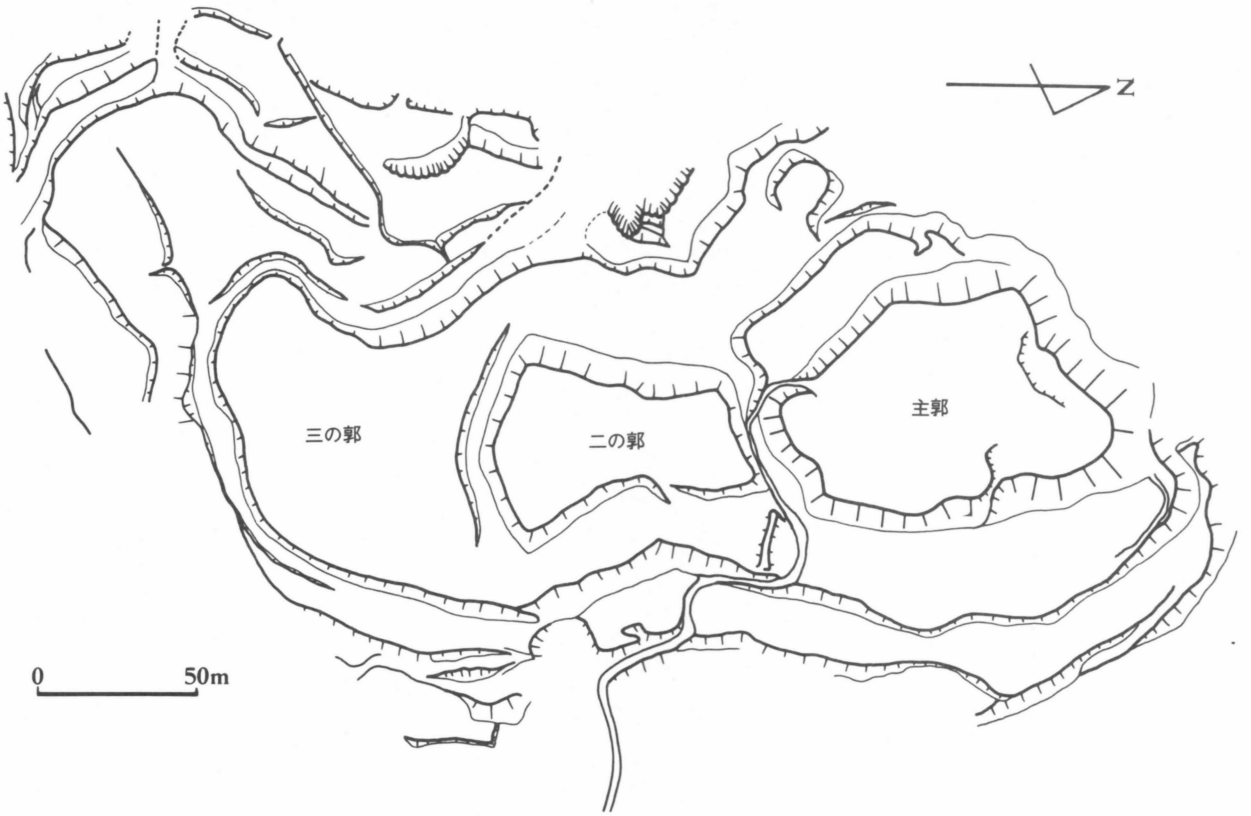
この城館の県道に沿う南側の坂を家老坂と呼び、また東方丘陵上の台地区も、比較的平担な面がみられることからこの城館以外にも、何かの遺構が存在する可能性が高い。

昭和60年度から東山町総合運動公園用地として記録保存のための発掘調査が実施されている。発掘調査が継続中であり、遺構・遺物に関しては現在整理・検討中であるが、三の郭一帯に掘立柱の建物群が多数確認され、立替えを行っているものもみられた。

『古城書上』・『風土記書上』等の内館城主はいずれも千葉民部とある。民部は松川千葉氏系図（岩手県史第2巻）によれば信胤で慶長12（1607）年、53歳で卒とある。その祖は薄衣城主千葉清堅（純）の四男正村で、以下信胤弟胤好まで11代を数える。正村の内館居住は興国4（1343）年といわれ、以降天正19年までの館主が追える東山町内では唯一の館でもある。

本城館は位置的にも、長坂と薄衣の中間にあり、砂鉄川下流域の支配を考える上でも重要な拠点であったことが推定できる。

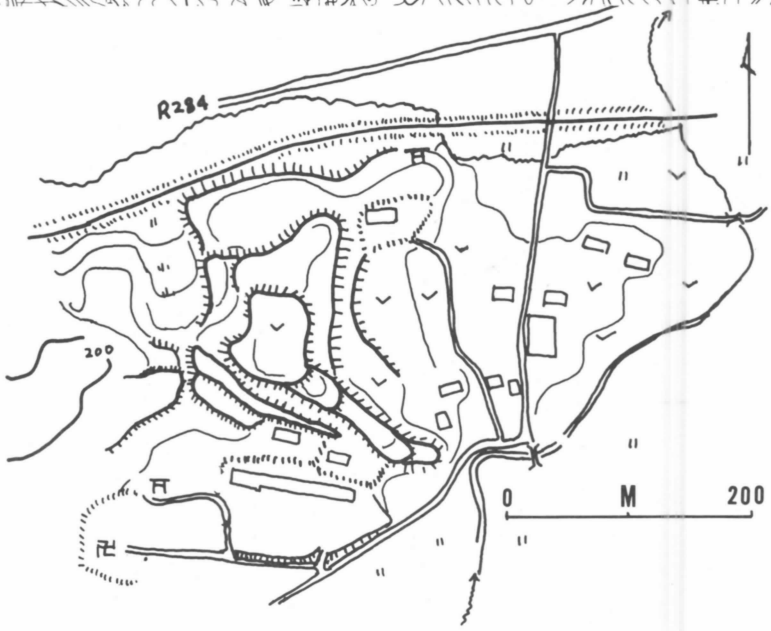



N
三の郭
二の郭
主郭
0
50m

**上折壁城**（山吹城、旭館、造日館、蓮日館柏館）室根村矢越字千刈田

国鉄大船渡線矢越駅の西南西約0.5km、室根村立上折壁小学校の真北に位置する。本郭の最高所は、標高199mを数える。城域は東西約230m、南北約250mである。本郭の西には、尾根を切る堀切りがあり、北側よりこの堀り切りまで小谷が入っている。北端は、国鉄大船渡線までである。北面にも50m×80m程の平場がある。前述の堀り切りの内側には、深さ4～5mの空堀りが東へ走っている。本郭の北西部分は、畑の造成により段の一部が削平されて傾斜になっている。本郭から東へ伸びる郭は、約120mにも及び当城を特徴づけている。本郭から北へ伸びる2の郭は本郭を取りまいている。当城本郭の東真下には、約100m×約90m程の平な畑があるが、日常の居館、家臣達の屋敷地ではないかと推測される。現在の県道をはさんだ集落一帯は中世～近世初期の頃まで町場として栄えた地であろうか。

「仙台領古城書上」によれば『山上折壁城、東西22間、南北29間、二ノ丸、東西28間、南北20間、城主千葉右京亮』とある。「風土記御用書出」(安永四年）によれば、『一山吹城南北25間、東西20間、右ハ葛西家臣千葉右馬之丞様御居城ニ御座候處當郡釘子村清水馬場村浜横沢村下折壁村迄五ケ村之旗頭と申伝候事』とある。山吹城の山吹の名の起りは、当城の南西にある建高寺の小名が、安永風土記によれば山吹とあるので、この土地の地名より付けられたものと推される。

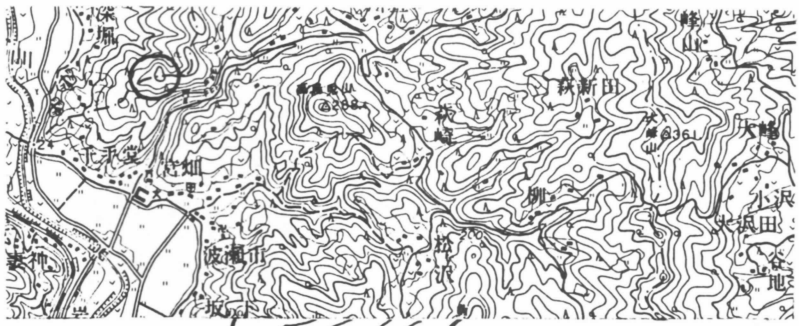


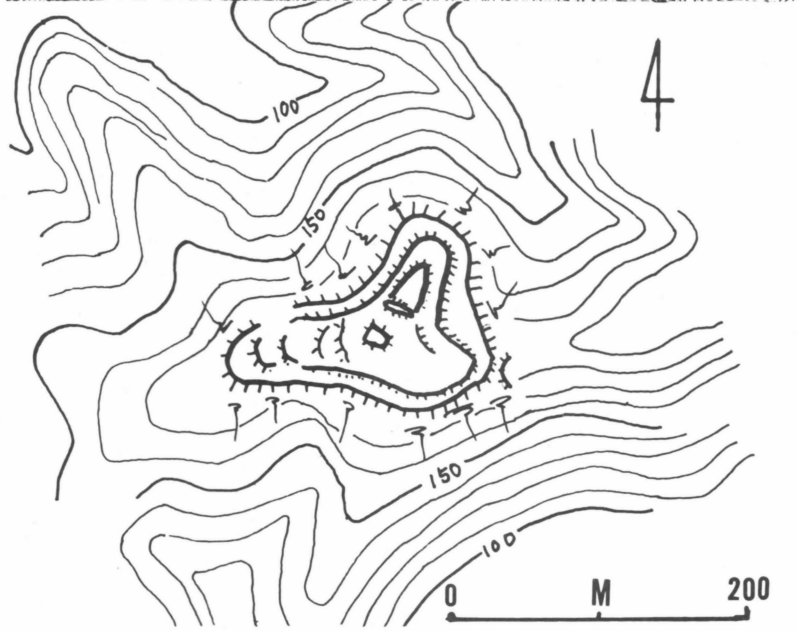
**大河戸館**（大川人館）川崎村門崎字千手堂

国鉄大船渡線陸中門崎駅の北約2.5kmの山陵頂部に所在する。頂部は標高204mである。南側は所萱の部落から門崎小学校の北側に抜ける村道が小河川沿いに通り小谷を形成している。城域は、東西200m×南北150m余りである。昭和58年、送電線工事に係る事前調査を行った。

東端において、尾根を切る堀切りがあり、南面を幅の狭い平場が西へと、とりまいている。西側にも2～3段の小平場が存在する。北側から東へ廻る腰郭状平場は、発堀調査の結果人為的に造成されたものであることがわかった。北東平場と呼ぶ郭には、土塁状遺構が伴い、先端に小平場を形成する。中央部はゆるい傾斜地である。全体として物見の機能を持つ城館と考えられる。同館からは、門崎城、松川城を一望することが出来る。

歴史的記述の文献はなく、口伝として、永禄年中秋山左京太夫頼重の居館とするもの、また、天喜年中安倍貞任の陣跡とする伝えもあり詳細は不明である。



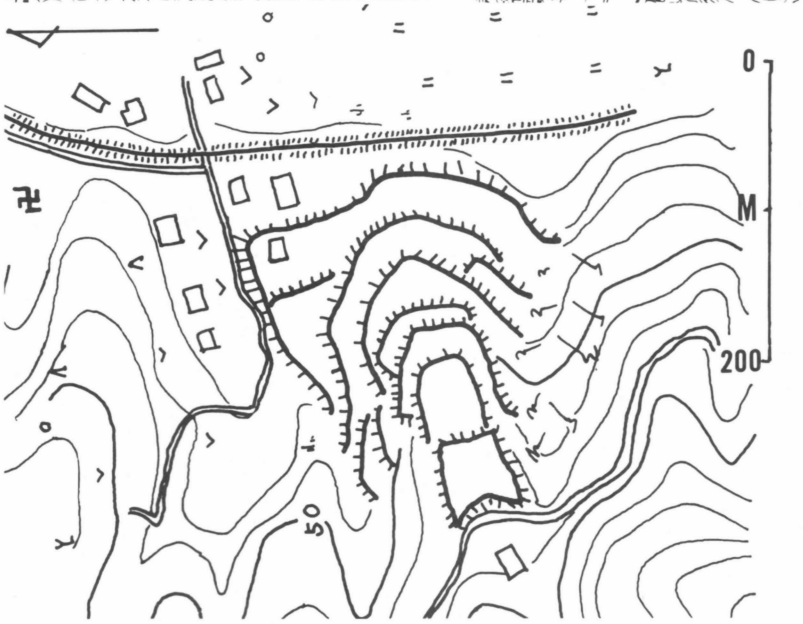




**布佐館**　川崎村門崎字布佐

大船渡線岩ノ下駅の南約1.3kmの丘陵に位置し、館下を大船渡線が通る。北約250mには、県内最古の板碑「建長の碑」の所在する石蔵山最明寺がある。標高36m～93mの丘陵である。推定城域は東西260m南北180mである。砂鉄川によって形成された沖積地を眼下に臨み、南東正面に門崎城を眺めることが出来る。

本郭は、鶏舎の建設工事により破壊されているが、口伝によると造成地より堀立柱跡が見られたと云われる。直下に50m×40m程の緩傾斜の畑があり2の郭であろうか。帯郭状の土段が4段～5段見られる。北側は、石蔵山から流れる沢によって天然の要害を呈し、南側も大船渡線の真上は急峻な崖である。

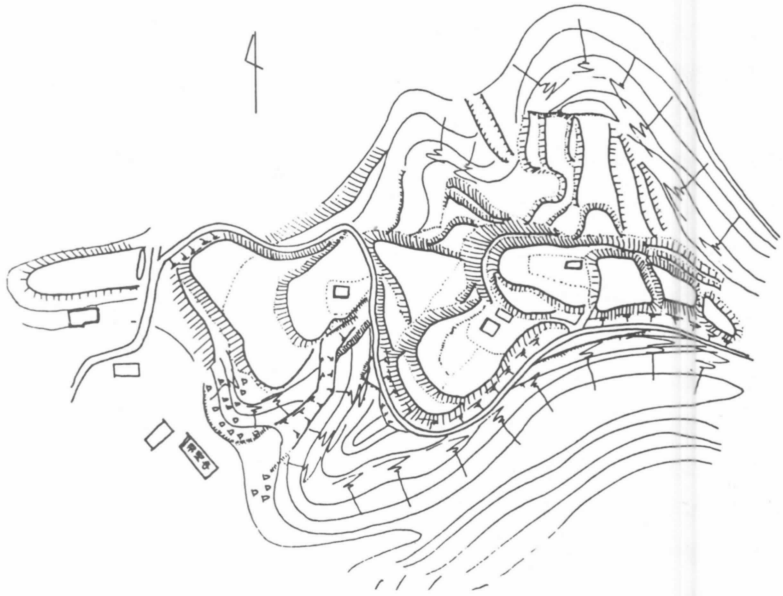
『仙台領古城書上』は「山布作城東西18間南北12間二ノ丸東西20間南北20間城主布作伊豫守」としている。布作は布佐であろう。『風土記御用書出』『門崎村史』『日本城郭大系』『史料仙台領内古城・館』等がある。



**古　館**　川崎村門崎字館畑

国鉄大船渡線陸中門崎駅の北東約２kmの丘陵上にある。丘陵の裾に曹洞宗長松山常堅寺がある。標高は50m ～130m 、推定城域東西350m 、南北310m 、尾根頂部を空堀りにより区切られた３つの郭があり西に村道が通る郭（30m ×60m ）があり帯郭が１条とりまいている。更に南西方向に３つの郭があり１つは村道により隔てられている。北面と西面には、自然斜面を利用した土壇、郭が認められる。

城主は伝えによると、門崎城が完成するまで居館としたものとも言われている。門崎安芸盛常の元居館であろうか。詳細不明。

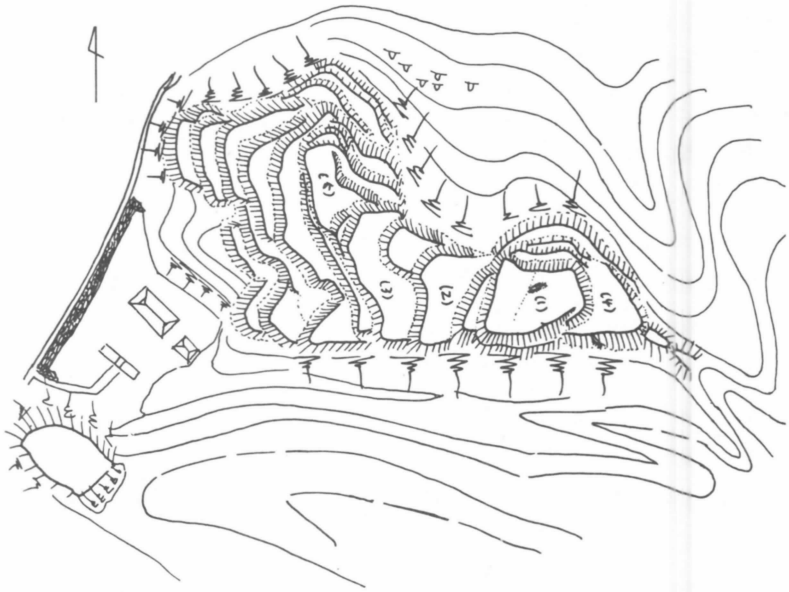


**門崎城**　川崎村門崎字館畑

大船渡線陸中門崎駅の北東1.7km の丘陵にあり、砂鉄川によって形成された沖積地を眼下に臨む。北250m には古館がある。西北丘陵の麓には、曹洞宗長松山常堅寺がある。標高は、35m ～105.5m 推定城域は東西350m ×南北200m 。

東から西へ伸びる丘陵を巧みに利用して郭を構成している。尾根筋は堀切りにより丘陵を独立させている。最高所に本郭を設け、小規模な平場を伴わせて西へ段々に張出し５つの郭を持つ。北西面は墓地に利用されている。南は急峻で沢が堀切りの基部まで立上る。

『仙台領古城書出』によれば「山門崎城東西18間南北30間二ノ丸東西15間南北12間城主門崎安芸。末孫御家中ニ在。門崎長之助カ」とある。砂鉄川流域の中で本城は山吹城、松川城と並び最大級の城館である。中世東山地方の勢力分布を考える時、本城の盛衰を抜きには考えられず、中世豪族の動向を窮い知る貴重な城館である。



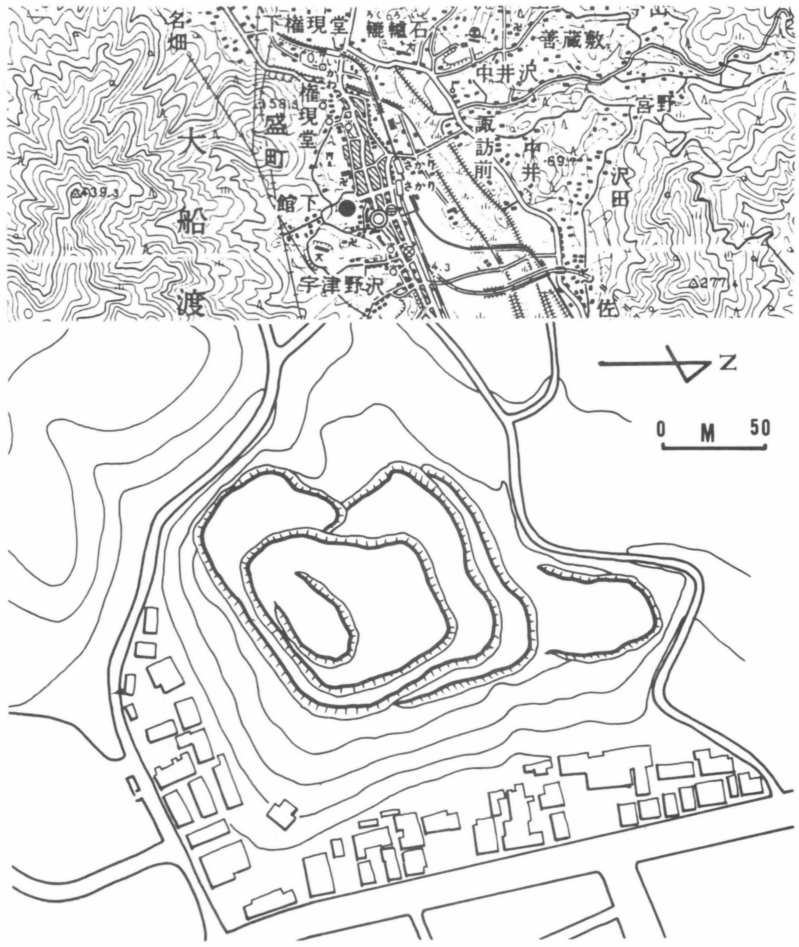
**根ノ城**　大船渡市盛町字津野沢

大船渡市役所の北方、国道45号線に東面する丘陵先端の山城。南の沢の上流は、館の西側にまわり背後を区画する。北にも沢が走り空堀状を呈する。東面は急峻な崖が続く。館域は南北250m、東西230mである。

主郭を丘陵頂部の平場に設ける。標高約55m、南北・東西共約70mの方形を呈する。主郭南側に八幡神社の社殿跡があり若干高まる。

主郭をとりまく腰郭が西南部で広がる。ここが二の郭と考えられる。主郭との段差は4～8m、幅は最大20m。二の郭より約3m下がり、主郭北面に幅5～10mの腰郭が2段付く。館の北東端が張り出し、愛宕神社が鎮座する。境内には、王子陵碑、等の石碑六基が建つ。

「古城書上」等には、城主千田九兵衛とあり、「気仙風土草」は猪川備前の名も掲げている。




**猪川城**　大船渡市猪川町前田

大船渡線盛駅の北方約1.5km、盛川と立根川に挟まれた丘陵先端に位置する。東麓から主郭に鎮座する天照御祖神社への石段が始まる。

主郭の平場は南北約90m、東西約80mで、南斜面に下位に2段、中程に東面へ続く3段の腰郭があり、西側には沢が入り、奥から南東に張り出す腰郭が2段築かれる。主郭背後には、南北約30m、東西20mの二の郭の平場があり、幅約5mの空堀がまわる。二の郭の背後に沢があるが明確な遺構は確認できない。

なお、二の郭北西約30mの尾根の西斜面に、南北に幅約8mの堀と、そこから西斜面へ7～8本の堀がある。中には法面に石組もみられる。これらは金山関係の遺構と思われ、館とは関係しないであろう。

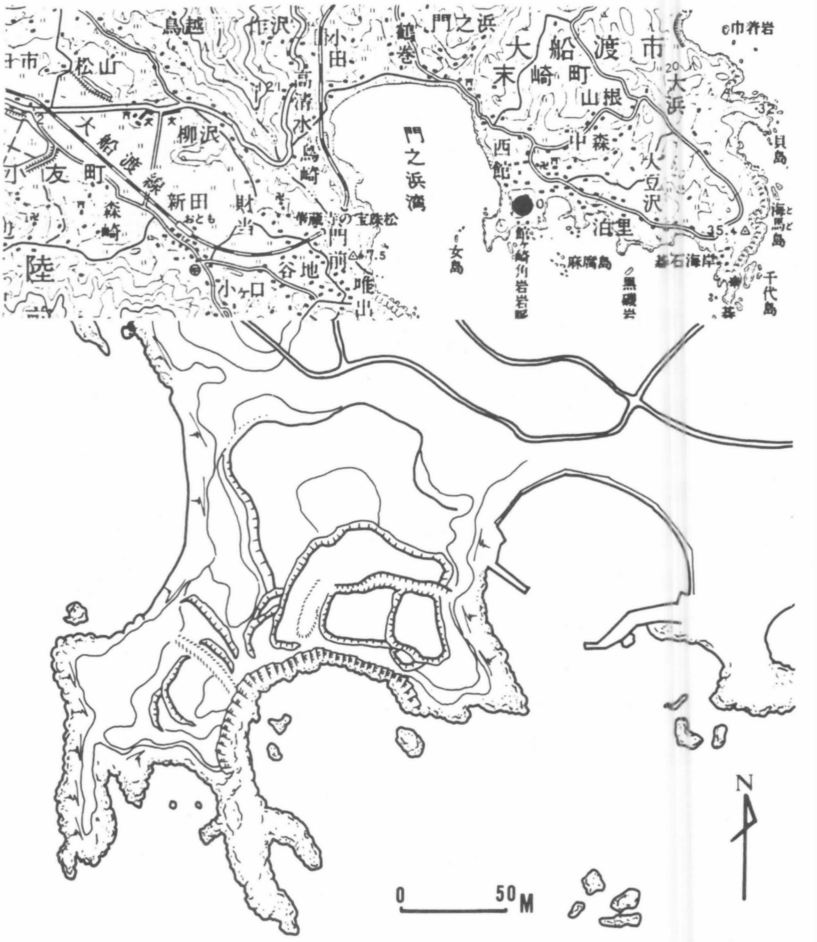
城主は「古城書上」等に新沼長門、同左京とある。『気仙風土草』にはその系譜を継ぐ者としていわゆる気仙三十六騎の一人である臼井三右衛門の名を記す。

**末崎城**　大船渡市末崎町西館

大船渡市の南部、門之浜湾に突き出た館ヶ崎の岬に位置する。 西に門之浜湾をはさみ蛇ヶ崎城を遠望する。東・西・南は海で、海岸線は約20ｍの断崖となる。

主郭は岬奥の東側、標高約37ｍで、南北60ｍ、東北110ｍの平場。北側には深さ３～６ｍ、上幅約15ｍの空堀が走り、その東端は泊里漁港に面する崖へ落ち、西は主郭を巻いて南に折れ二の郭へ連なる。二の郭は主郭の北・西面。特に西面は土塁、２段の腰郭も付く。二の郭北側にも広く緩い傾斜があり、ここも館内であろう。二の郭西南に、窪地を挟み出郭がある。小規模な三段の土壇がまわり、北端には、窪地に平行して、幅２ｍ高さ１ｍの土塁が約50ｍ続く。土塁北側にも、壇が付く。

「気仙郡古記」には、城主武田丹後、其子式部、「古城書上」にも前者が記載される。また「葛西真記録」中には及川伊賀守の名もある。




**川原城**　大船渡市立根町字川原

大船渡線盛駅から国道45号線を北上し、大船渡工業高校の東方対岸、今出山からの丘陵が、西へ張り出す先端に位置する。館の範囲は南北270ｍ、東西約280ｍで、標高85ｍの頂部が主郭となる。

南東からの尾根を深さ約５ｍの３本の堀で切断し、その西に主郭が築かれる。主郭の南と北東に深い沢が入る、主郭南面には腰郭が５段、北面には７段まわる。その中には堀を伴うものもある。北西部の最下段に幅50ｍほどの出郭が付く。出郭の下は崖で、冲積面との比高は約15ｍに達する。

川原城の位置については、本地点以外に、北方約300ｍほどの丘陵先端部との説もある

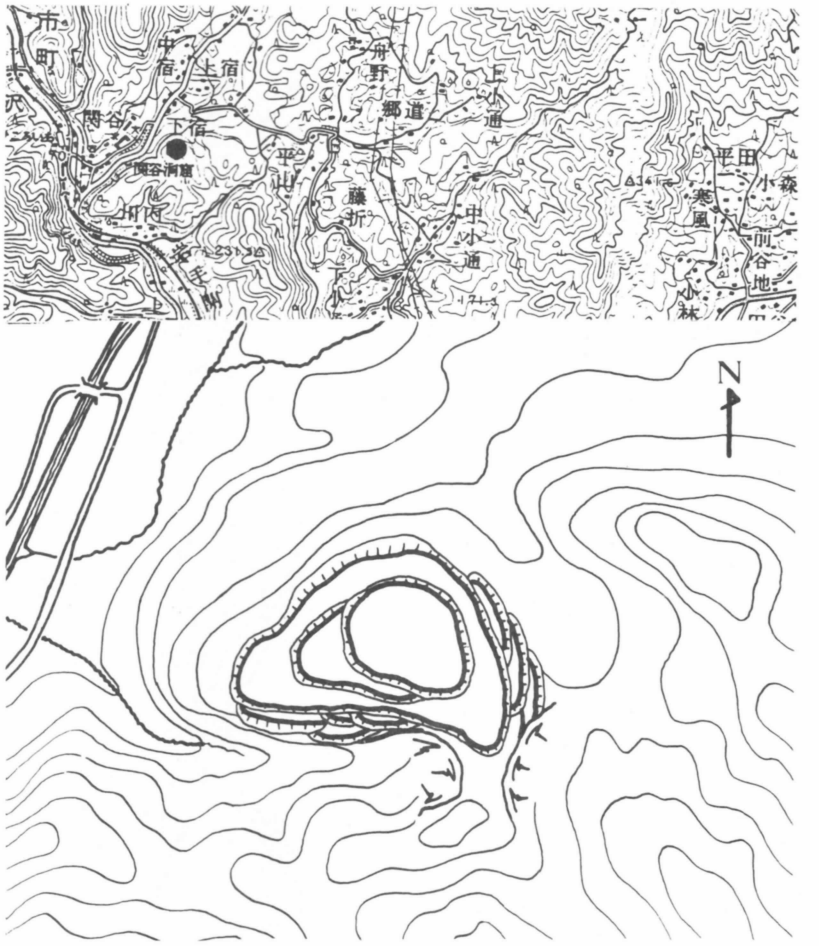
この川原城は、「気仙風土草」、「封内風土記」中にも、城主の記載はなく、古城書上にも漏れている。「岩手県史」には、立根館として、文明３（1471）、金野時弘が居住とあるが、上記の古記録類にそのような記載はない。

**松館**　大船渡市日頃市町字関谷

大船渡線盛駅から国道107号線を約6km北上し、日頃市町関谷で北東に折れ鷹生川沿いに500m進む。日頃市中学校対岸の標高約156mの丘陵上に位置する。この丘陵は三方は沢に囲まれ、北面は鷹生川に面し急崖となる。

主郭は山頂部の平場(南北70m東西70m)。八幡神社が鎮座する。西側に最大30m幅の腰郭が付きその下にも郭がある。この郭の西と東が広くなり、二の郭・三の郭と思われる。その下の東と南に小規模な腰郭が付く。八幡神社への参道は三の郭で屈曲し、枡形状を呈す。また沢を隔て東に相対する丘陵にも狭い平場があり、館跡となる可能性が高い。

「古城書上」には、城主新沼安芸綱清、同内膳とある。「岩手県史」所載の新沼氏系図には、新沼内膳綱定討死の後、弟綱重が家督を継ぎその子綱広（天正18卒）まで松館に住したとある。館跡南端の尾根沿い、参道際に「お墓」と呼ぶ石塚があるが、被葬者等の伝承はない。



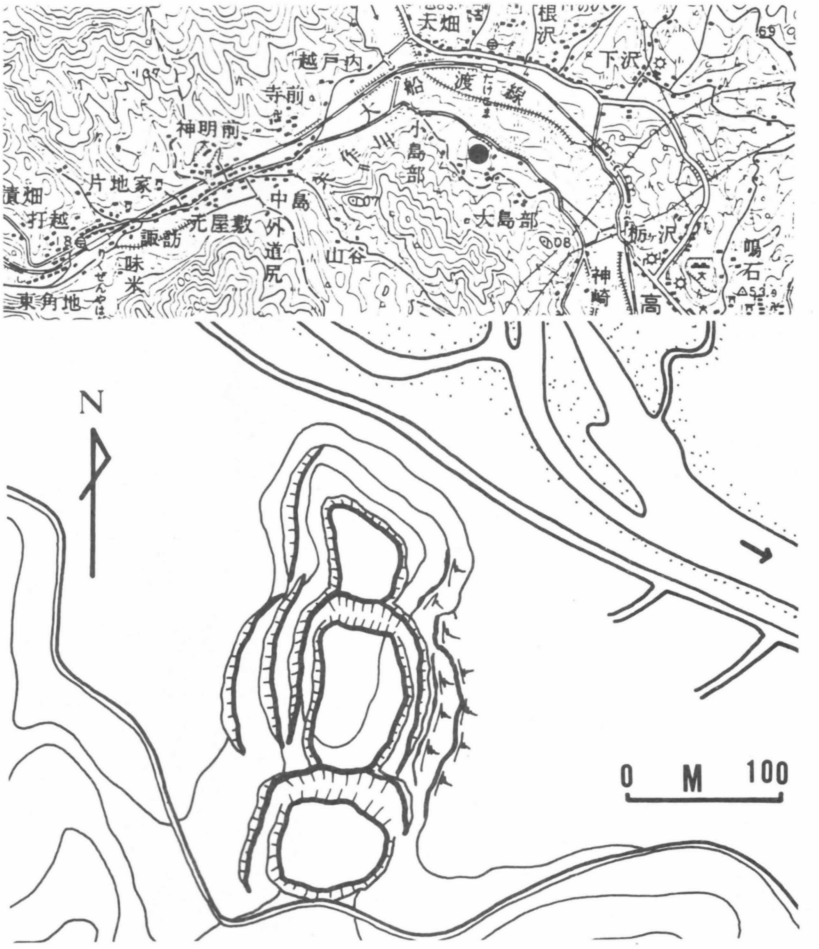

**内館**　陸前高田市矢作町大島辺

大船渡線竹駒駅南方、気仙川の対岸に位置する。西方約500mに矢作川との合流点があり、北面は今泉下矢作線を経て気仙川に臨む。背後は道路で切断され、東西に沢が入り、舌状の丘陵となる。

主郭は、丘陵の北端に位置し南北約40m、北面は崖となる。八幡神社が鎮座し、東面下位に井戸跡もある。南には空堀をはさみ二の郭が南北200m、東西80m程に広がる。その西・東には腰郭がまわる。さらに空堀をおいて南に三の郭も築かれる。

城主は、「古城書上」に千葉玄蕃、「気仙風土草」には、正和年間に千葉広胤とする。

「封内風土記」によると玄蕃は広胤の後裔で、玄蕃の子因幡の名も記され、続いて矢作久右衛門も後裔として掲げる。久右衛門は、「岩手県史」所載の矢作系図によれば、外館城主の系統を引く者である。



**古館**　陸前高田市竹駒町館

大船渡線竹駒駅の北西方向、氷上山から続く尾根が南西へ大きく延び、南下してきた気仙川が東へ流れを変える部分の丘陵上に立地する。館跡からは矢作川の合流部、そして気仙川の対岸に矢作の内館が遠望できる。

館の南方、西方は気仙川が流れ、東と北には大きな沢が入り込む。主郭は、丘陵を切断する空堀を背後に持ち、西側へ張り出す。東西約100m、東にやや傾斜し、頂部には八幡社が鎮座する。主郭東南部へも丘陵がのび、ゆるやかな斜面を持つ、おそらく二の郭に相当すると考えられる。また、主郭東側の清水洞屋敷の背後にも、北、沢のめぐる平場があり館域に含まれると考える。主郭を中心に、小規模な腰郭もみられる。

「古城書上」等にも記載されないが、立地からして重要な拠点と思われ、また、南麓の軍見洞からは、青銅（佐波埋か？）製の鋺も出土している（陸前高田市博蔵）。

**壺館**　陸前高田市竹駒町下壺

住田町への県道の東側、旧竹駒村と横田村との境界付近、気仙川へ張り出す丘陵の先端に位置する。館は、県道を挟み気仙川へ直面し、崖となる。南に壺川の沢、北にも沢が入り、舌状の丘陵となる。

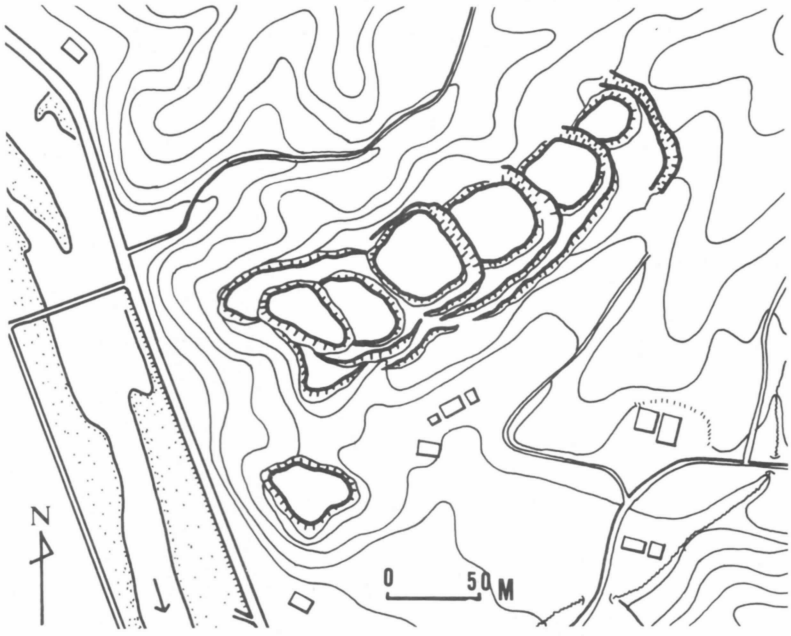
主郭はこの丘陵西端、標高約48m小規模な平場である。東南は段差を以って、二の郭に続く。その先端には空堀があり、さらに先にも平場がある。これらの南側に小規模な腰郭が付く。背後の山道際に南北朝期の供養碑が建つが、これは南側から移したものという。背後には遺構は確認できない。

「古城書上」には、城主佐々木安芸、其子蔵人、子助次郎とある。

**三日市館**　陸前高田市横田町三日市

雷神山の西南西に延びる丘陵の先端、気仙川の東方に位置する。北には銭洞の沢が、南は三日市の沢が入る。三日市の沢に面する長徳寺北側の丘陵から館が始まる。沢を利用した空堀が南北に入り、丘陵を切断する。その尾根筋にそれぞれ空堀をおき、西から主郭、二の郭、三の郭と続く。空堀は西へ走り、腰郭にとり込まれる。主郭西端は高く、街道から主郭を遮ぎる。その西南に腰郭、その先端にも狭い平場が付く。気仙川に面す西側は、急な崖となる、

「古城書上」には、東西80間、南北70間と大きな数字の記載があるが、西の洞から西端までを館域とすれば充分な数値であろう。城主は同書に本宿館主日野右馬允の子、日野遠江守、孫大学とあり、南方約1.5kmの本宿館と密接に関係する城館であることがわかる。

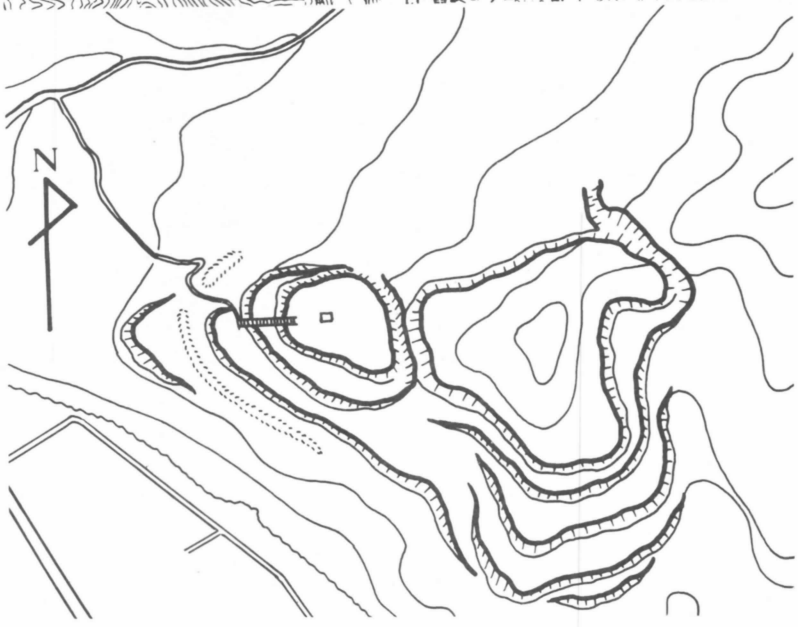



**本宿館**　陸前高田市横田町本宿

雷神山の尾根が南西の気仙川に面する丘陵へと延びる。本宿館は、この丘陵の先端部、北に本宿の沢、南は堂ノ沢にはさまれる。

丘陵の西端には一宮大明神・熊野神社が鎮座し、古くから信仰されてきた。この境内が二の郭で、その参道下には畑地が広がるが、土塁状の高まりも確認できる。神社裏手には、大きな空堀が切られ、その先が主郭となる。主郭の二の郭側、南側には僅かながら一段高い壇が付く。主郭北面は、本宿の沢に向い急に傾斜するのに対し、南面は３～４段の腰郭状の壇がある。

「古城書上」には城主日野右馬允とあるが、「封内風土記」には紺野とあり、また昆野との説もある。さらに「気仙郡古記」には「金野大学葛西没落之砌南部へ牢人仕候由」とある。おそらく、気仙金野氏の一系統に属す人々であったと思われる。

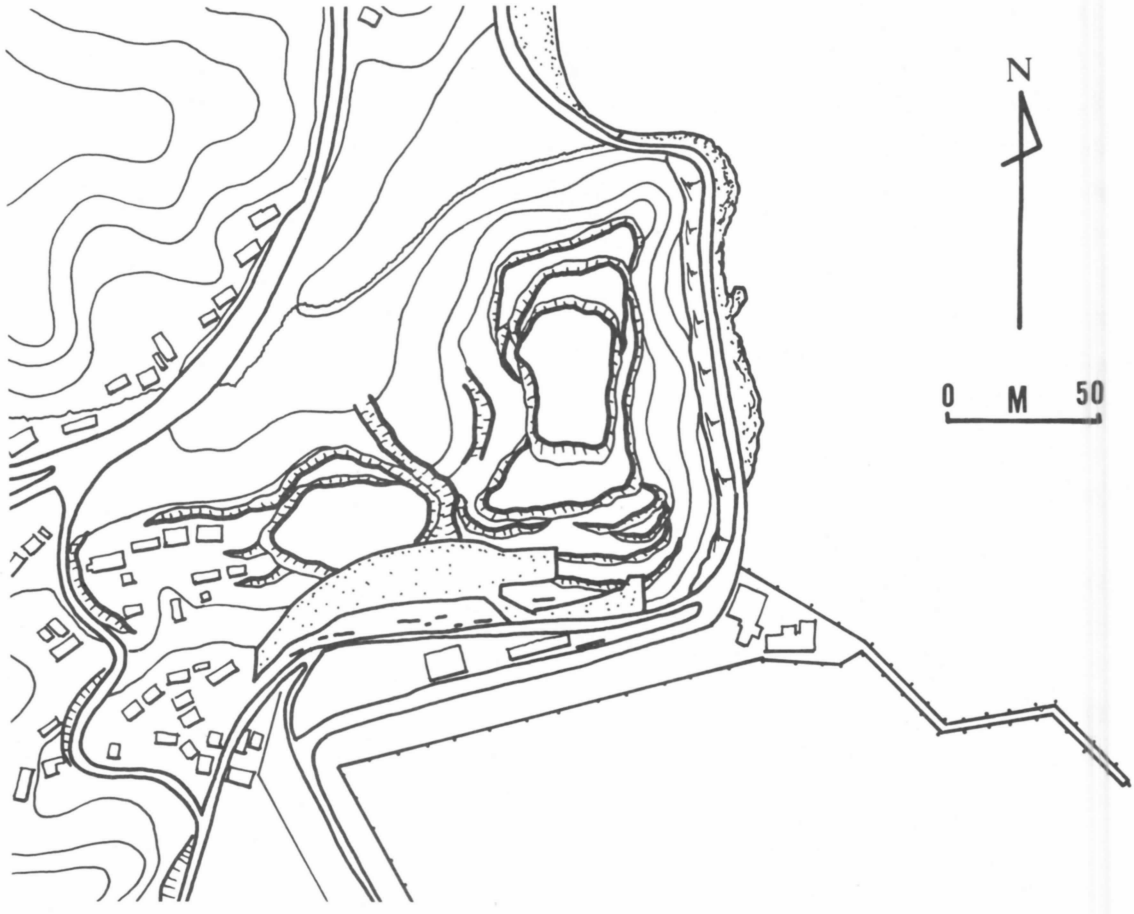


**二日市館**　陸前高田気仙町二日市

広田湾西岸、長部漁港の北、恵比寿鼻の付け根の丘陵に位置する。東方、南方は海に面し、北にも沖積面が入り、三方が崖となる。西限は国道45号線から漁港に下る道路付近になると思われる。

主郭は丘陵東端、標高約50m、南北80m東西50mの平場。東側崖下には県道が走り館の南を巡って、漁港へと続く。東西部の腰郭が南へ張り出し二の郭となる。南面は近年の港湾道路改修により変更されるが、主郭、二の郭と空堀を隔て三の郭が付く。さらに西も腰郭状に段が付くが、宅地化し判然としない。主郭南東部は、かって恵比寿鼻の岬が突き出し、出郭があった。現在は港湾改修により消滅した。

「古城書上」による城主は今野助九郎、同内膳。また長部氏は、高田城主千葉重慶の二男慶宗（応永20卒）から、天正年中の長門守まで辿れるという。この今野氏と、長部氏との関係は不詳である。さらに、白石陣の際の気仙三十六騎の統将の一人鈴木和泉も、関係している。



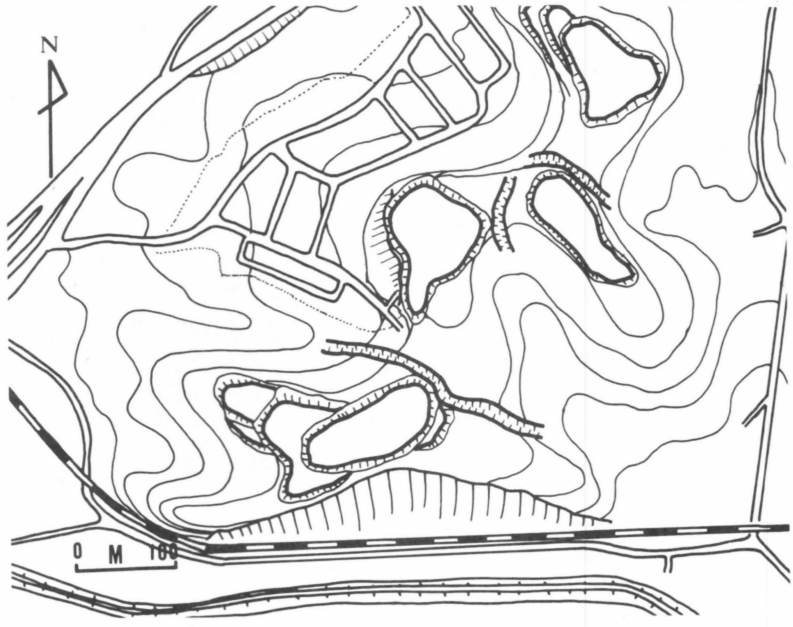
**浜田城**　陸前高田市米崎町松峯

大船渡線脇ノ沢駅の西北部、脇の沢漁港に張り出す丘陵の先端部に位置する。南は、海に面し、崖となる。北から西にかけては、浜田川の冲積部に囲まれる。南西にのびる丘陵を空堀で切り、郭が配置される。北西側は松峰団地造成で破壊される。

松峯神社境内が主郭に相当する。主郭の東側に空堀状の窪地が走り、その先に平場が付く。南にも空堀が東西に走る。その先に月館と呼ばれる平場があり、その西に腰郭状の段が付く。

浜田城の位置は、浜田川を隔てた北方、野沢地区の秋葉神社境内の丘陵との説もある。浜田城の記録は、「安永風土記書上」に南北350間程東西200間程と記載される。この数値を見る限り、野沢地区のそれは規模が小さい。

城主は、同書に大和田掃部とある。大和田掃部は、広田高館の城主（古城書上）であり、米ヶ崎城にも関係している。

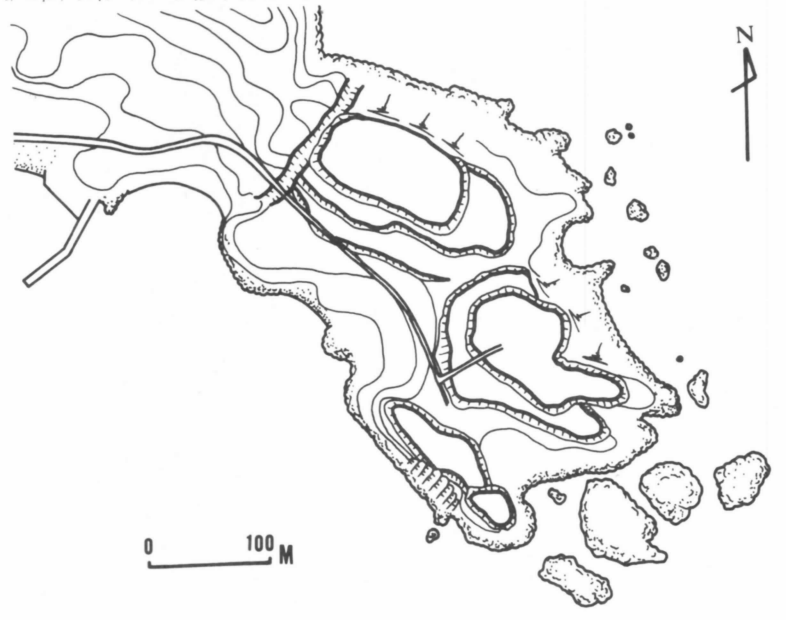



**蛇ヶ崎城**　陸前高田市小友町谷地館

広田半島の付け根、門之浜湾と大野湾に突出した小半島に位置する。三方は海に面し、背後の谷地館から続く丘陵を、空堀で切断し、館城を独立させる。

主郭はこの空堀に接し、長軸約60mの楕円形の平場である。東南部と南西部にはなだらかな段があり、腰郭と推定できる。主郭から、窪地を置いて、二の郭が広がる。八幡神社が鎮座し、東面は断崖となり海に落ちる。西面には腰郭が付く。半島先端部にも狭い平場がある。主郭、二の郭間の西側には、井戸もある。

城主は「古城書上」に及川掃部重綱、天正年中没落と記すが、「気仙郡誌」には、至徳年間の及川掃部、天正年間の重綱と、別人に記載する。



**米ケ崎城**　陸前高田市米崎町館

広田半島の基部にそびえる箱根山の尾根が西南に延び、広田湾に突出し、米ケ崎の小半島となる。館は、この米ケ崎の半島全域を館域としており、その規模あるいは保存状態からしても、気仙地方を代表する城館といえよう。

脇の沢漁港の東側から半島を横断する幅30m程の大空堀が走る。その南に三の郭の平場があり、再び空堀で区切る。この空堀は東側で、前記の大空堀に合流する。その地点には木戸脇の地名も残る。そこからまた平場があり、二の郭になる。二の郭とその南の主郭の間、西側の浜（蛎ノ浜）にも、空堀状の窪地が入り、それに沿って主郭の腰部に土塁が続く。主郭は径約100m、東面は断崖となって海に面し、西南には腰郭状の段が付く。北端に千葉安房守、老臣大和田掃部他二人の墓碑が建つ。施主は大和田孫作とあるが建立年代は比較的新しく（幕末～明治か？）、古記録に記載はない。主郭の南に続く丘陵上には、千葉安房守鎮守と伝える（気仙郡誌（明治43））八幡社が鎮座し、その西南が半島先端となり、物見として利用されたという伝承がある。半島全体は、一部砂浜を除けば、数m以上の断崖に囲まれ、要塞としての機能を充分に果している。それに比べ、半島基部、つまり城館の北側は判然としない。

前記の大空堀の東側にも大きな平場がみられ、その北側にかけ、窪地が縦横に走る。県道大船渡陸前高田線に面する場所には、土手、土手脇という地名が残り、さらにその東、堂の前の沢に面する部分まで丘陵が続く。この周辺は宅地化が進み、保存状態はあまり良くない。

米ケ崎城の周辺には、北の丘陵上に脇の沢館、東に両替館、西に浜田城が取り囲み、さらにその外側に中山館、中陣、一起館等が分布する。その点で北面の守備は充分であったといえよう。

城主は「古城書上」中には安房守居住としか記載されないが、「気仙風土草」にはやや詳述される。それによれば、天正年中に千葉安房守広綱が高田村東館より移ったと記され、その子信綱は深谷の役（天正19）で死亡とある。

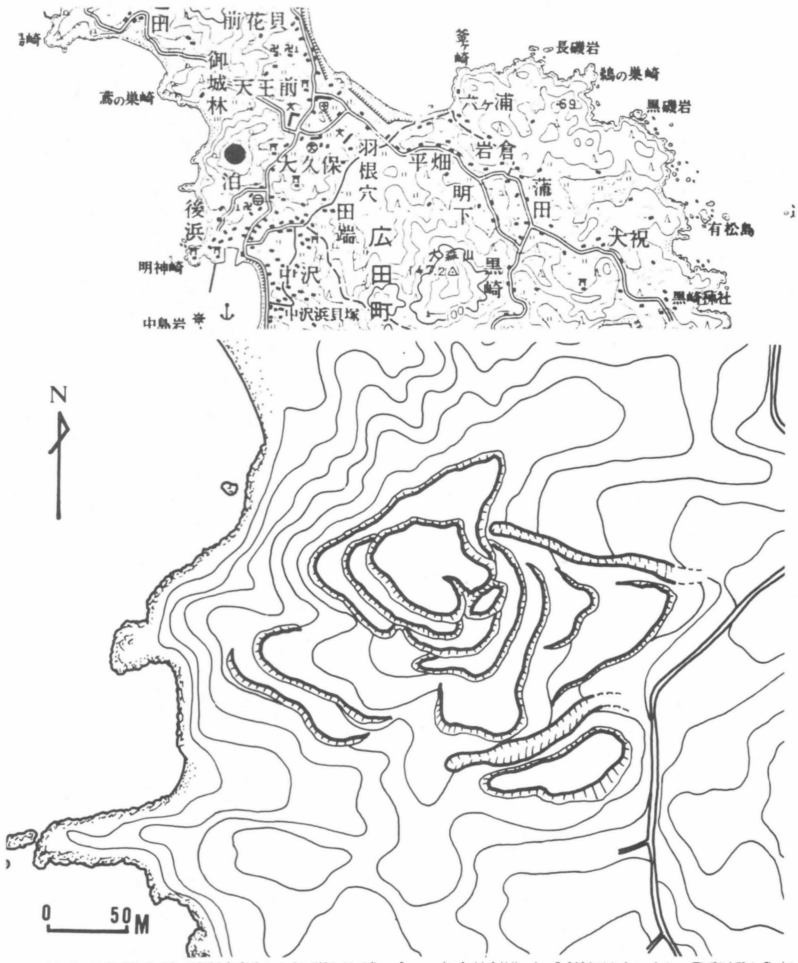
**高館**　陸前高田市広田町大久保

広田半島の西部、泊漁港の北に位置する高館山（標高94m）の山全体が館域となる。

主郭は山頂部の東西約50mの小規模な平場。主郭を中心に、多くの腰郭状の段がまわる。南側に、空堀状の谷が入り、その南に小平場が取り付く。同様な谷が、東側にもある。西面は、急傾斜を以って海へ落ち込む。

県道をへだて、東方に花館、南方、泊の集落北側に八幡館・小館を配する。

「古城書上」による城主は、大和田掃部と記される。「封内風土記」中には、広田黒崎神社に奉納されている明応5（1496）年銘の木造十一面観音座像懸仏の願主源綱継を広田城主とする記述がみられる。また「岩手県史」では、米崎普門寺釈迦如来座像台座の墨書銘（永禄2（1559）年）中の大和田安芸守も広田城主の可能性があると指摘している。しかし、「古城書上」を除いては、広田城と大和田氏とを直接関係付ける記録はない。




**八幡館**　陸前高田市高田町本丸

高田町の市街地の背後の丘陵(標高約40m)に位置する。南面は、市街地に向い崖となる。東には貴船神社に向う沢が入り、西にも大きな沢が入る。

主郭は東側の沢に面し、南北にやや長い平場となる。小規模な腰郭がまわり、西方はそれが張り出し、二の郭となる。主郭の北部は自然地形を利用した空堀が東西に走り、この空堀を隔てて八幡神社が鎮座する。この境内の平場も館城に含まれると思われる。さらにその西北部愛宕神社の背後にもゆるやかな傾斜の丘陵がある。

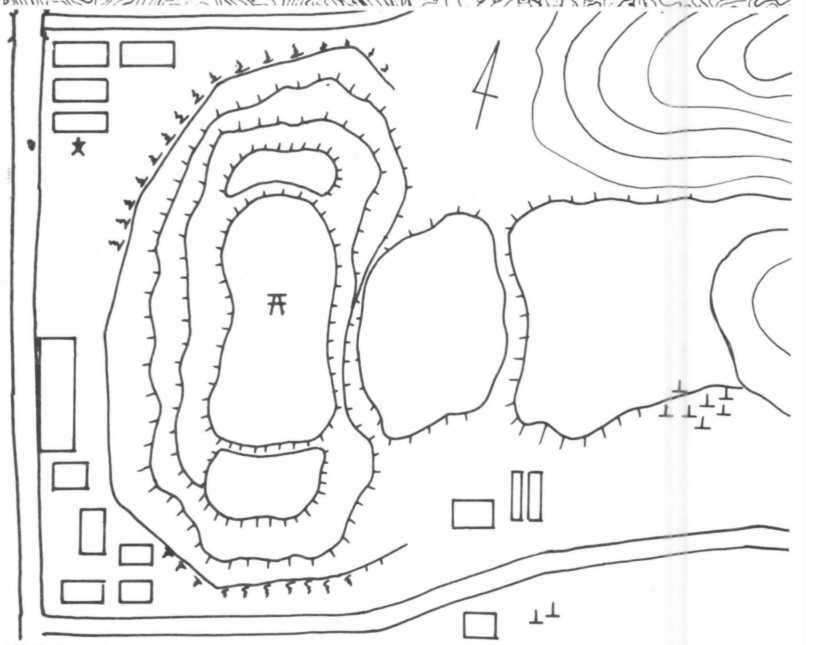
「古城書上」には、城主千葉安房守広綱とある。この広綱は、米ヶ崎城主安房守で、「気仙風土草」では、広綱移城後高田壱岐が居住したと記している。広綱以前は、矢作内館の千葉重慶その子胤慶から8代を経て広綱に至る。なお、同書には「近年土中よりならべすへたる石。其外具足の金具等をほり出せり」との記録がみられる。

**世田米城**（世田米下館）気仙郡住田町世田米字火石

世田米地区の中心部に所在し、標高120 m前後の丘陵上に所在する。本丸と二の丸とされる部分からなる。前者は丘陵西端部の南北に長い平場と、南北両側の腰部と西側の帯部からなる。東端は空堀りで区切られる。

後者は、現状はほぼ平垣な畑地であり、とくに遺構は認められない。東端に凹部がありそこが一応の東限か。

この城は室町時代初期に、葛西晴信が遠野領からの侵入に備えて阿曽沼氏を配したことに始まるとされる。慶長5年（1600）遠野城主阿曽沼広長は南部信直とともに和賀郡岩崎に出陣していたが、その留守中に家臣上野氏が叛乱を起こし、広長の妻子はその実家にあたる世田米城主阿曽沼広久を頼り、また広長も同様の羽目に陥った。当時世田米は伊達政宗領であったが、広久は政宗に遠野奪回の援助を求めたが、遂に果たさず、以後広長は伊達の家臣となったといわれる。

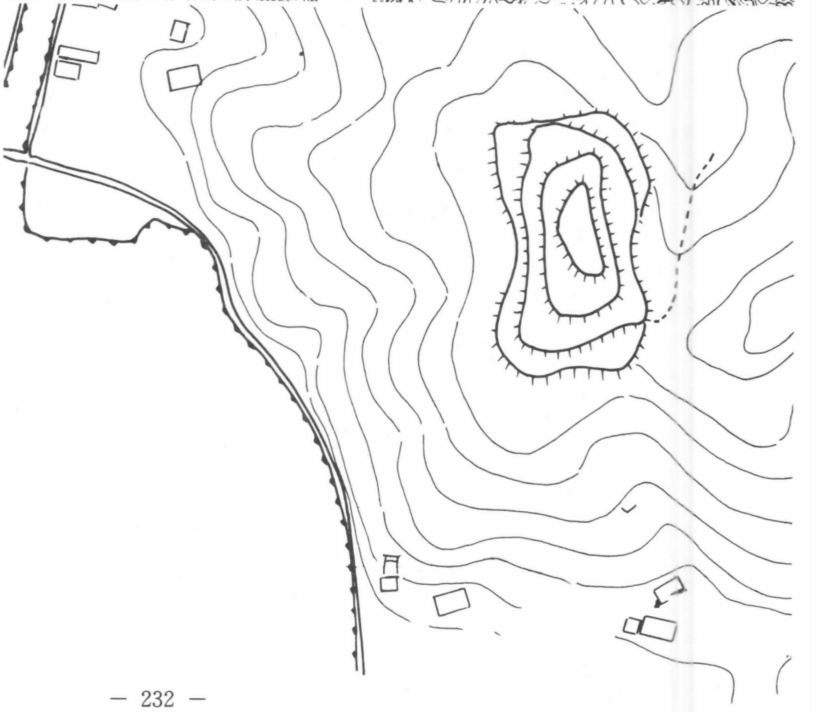


**高館城**（館）　気仙郡三陸町綾里館

綾里地区の中心部に所在する標高100～80 mの丘陵に立地する。綾里湾を眼下に望みうる地である。本丸とされる平場は丘陵頂部に占地し、100×25mの規模である。そこから一段下位に70×25mの平場があり、さらにその下位に 50×200mの平場がある。これが二の丸とされており、居館が造られていたと推定されている。

城主は葛西氏の家臣千田大学とされるが、築城年代は不明である。千田大学は、葛西氏が滅亡した桃生郡深谷の戦いに参陣し討死したと伝えられている。

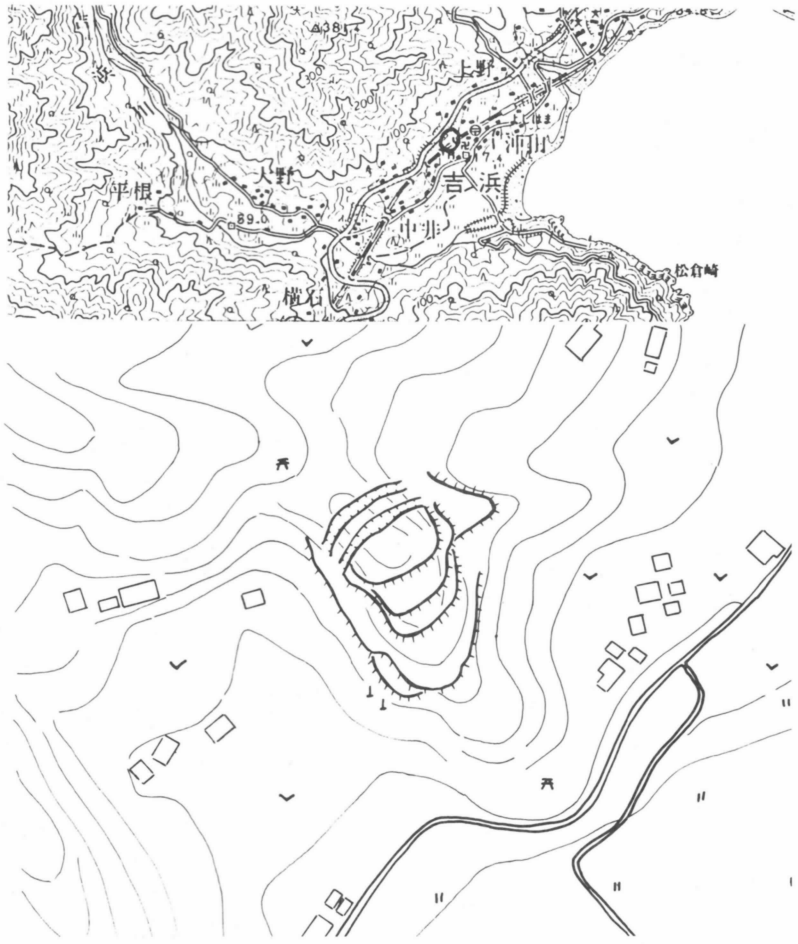
口碑によると、城の守護神の天照御祖神社は、文明3年（1471）大和国吉野郷立石村出身の僧宥善が綾里村字崎山の摩伽陀ケ原に天照御祖神社を勧請したものを、延徳年間（1489～92）に領主千田大学（千葉大学とも）の命によって同村字館の地に遷したものといわれている。



**吉浜城**　気仙郡三陸町吉浜

吉浜上野地区を望むことができる丘陵頂部に立地し、標高60m である。国鉄大船渡線工事などにより、旧状が改変されているため構造の詳細は不明であるが、本丸・二の丸などと思われる平坦部が残存する。本丸跡とされる部分は50×30m 前後の規模の平場である。また二の丸は、新沼氏宅の所在するところといわれている。また現在愛宕神社の所在する最高位は「高館」と呼称されたと伝えられており、あるいは物見あるいは烽火などの役割も果たしていたとも考えられる。

この城は葛西氏の家臣新沼薩摩・玄蕃父子の居城とされるが、天正年間（1573～92）の遠野での合戦で討死したと伝えられている。



## （九） 上閉伊地区概観

旧上閉伊郡は、岩手県のほぼ中央部に位置し、北上山地中の横谷部と太平洋沿岸部からなる。この地方は、古代の正史に散見する「ヘイ村ほか」に関連しよう。たとえば、「続日本紀」の霊亀元年十月条に「蝦夷須賀君古麻比留等言す。先祖以来貢献れる昆布は、常に此地に採りて年時に欠かず。今国府郭下相去ること道遠く、往還旬を累て甚だ辛苦多し。請う閉村に於いて便りに郡家を建て百姓に同くし、共に新族を率て永く貢を欠かざらんと。並に之を許す」とあり、また「続日本後紀」の弘仁二年条の「陸奥出羽両国の兵合わせて二万六千人を発し、爾薩体幣伊二村を征するを請う（中略）遠閉伊村を極て略々掃除てしかども…」と見えるものなどがそれである。幣伊村は現在の海岸地帯（海道蝦夷）遠閉伊は同じく内陸部（山道蝦夷）に相当しようか。これらを見ると、古代のこの地方は、古麻比留のように、一部に積極的に律令政府と宜を結びたい意志を表明するものがあったとしても、基本的には律令政府に反抗し、いわゆる蝦夷征伐の対象となった地域であった。それは弘仁年間の文室綿麻呂の征討で一応の終結をみた。

なお、郡名としての閉伊の初見は、明応年間に成立した「節用集」であるといわれるし、中世には「遠野保」、戦国時代には仮に遠野郡と呼称されたこともあるらしい。

平安時代後半から鎌倉時代までのこの地方の様子は不明である。本県の他の地域と同様に、安倍・清原・平泉藤原氏治下の奥六郡の一部として存在したものであろう。したがって安倍氏に附会された地名も多い。

文治5（1189）年、平泉藤原氏滅亡後の東北地方に、源頼朝は郡を立て功臣を分封した。ここ閉伊郡には、南半部（現上閉伊郡）に阿曽沼氏、北半部（同下閉伊郡）に多久佐利氏（閉伊頼基）が下向した。なお、唐丹村は葛西氏の臣千葉長門の統治下に入った。

阿曽沼氏は藤原秀郷流といわれ、頼朝の功臣広綱が遠野十二郷を賜わったが、その次子親綱が、建保年間現地に下向した。遠野十二郷とは「阿曽沼興廃記」及びその一本の付録によると「下六郷（達曽部、田鎖、鱒沢、綾織、奥友、宮森）、上六郷――上七ケ村（佐比内、細越、板沢、平倉、中津、糠前、青笹）、一ケ村（土渕、栃内、飯豊、柏崎、仗山、五日市）、一村（附馬牛、駒木、東禅寺、矢崎）、一村（横田、鶏崎、新里）、大槌（橋野、金沢、吉里吉里、栗林、鵜住居）、釜石（甲子浦、平田）となっているが、根拠は示されていない。いずれにしても、現在の上閉伊郡と和賀郡の一部（田瀬）と下閉伊郡の一部（豊間根、大沢、織笠、船越、山田）を含む地域であったと思われる。

海岸地帯の要として、大槌城に大槌孫三郎広長を配した。以後南北朝時代～戦国時代にいたるまでこの体制が継続する。中央の政治情勢は地方にも敏感に反映した。永享9（1437）年の気仙郡浜田城主千葉氏の臣岳波・唐鍬両氏の侵入、慶長5（1600）年の関ケ原合戦に伴う鱒沢氏の叛乱、南部・伊達両氏の参入等々の事件は、中央の動向に連動したものであった。しかし、阿曽沼・宮守・達曽部・鱒沢・大槌・山田・荒屋氏等、この地方の武将の大半は、近世大名に脱皮できないままに没落していくのである。

慶長6（1601）年、この地方は南部氏に与えられ、以後慶応3（1867）年まで継続する。南部氏は統治の実をあげるために、はじめ郡を二分し、西半部を鍋倉城の城代に、東半部を大槌氏に治めさせたが、のち、大槌にも城代を置くことに改めた。

この地方は阿曽沼旧臣の叛乱する者が多く、かつ伊達領との境界という政略上の要地であることから、その統治に万全を期し、寛永4（1627）年、三戸郡八戸にいた一門の南部直栄を遠野に移し、また同9（1632）年、大槌城代を廃し代官を置き、平田村～山田浦までを支配させた。

享保20（1735）年、南部藩は領内10郡を33の通りに分け25ケ所の代官所を置いた。この地方は遠野通り（横田村以下42ケ村）、大槌通り（小国村以下23ケ村）、大迫通り（達曽部・下宮守の2村）に該当する。大迫通りは大迫代官所の支配下にあった。

遠野通りはその重要性に鑑み重臣を配したが、その統治には大巾な権限を与え、あたかも委任統治に近い形のものであった。それは、南部利直自らが鍋倉城の拡張を指示した点や、死罪の専断権を与えられていた点に端的にあらわれており、独立した一藩に近いものであったといえる。この陪臣直成敗は幕藩体制下の例外的なものであった。

遠野南部氏は、領内を上下両郷に分け代官を置いて統治し、社寺の復興、城下の整備等に努め、また金山経営等にも努め、治政の実績を高めた。

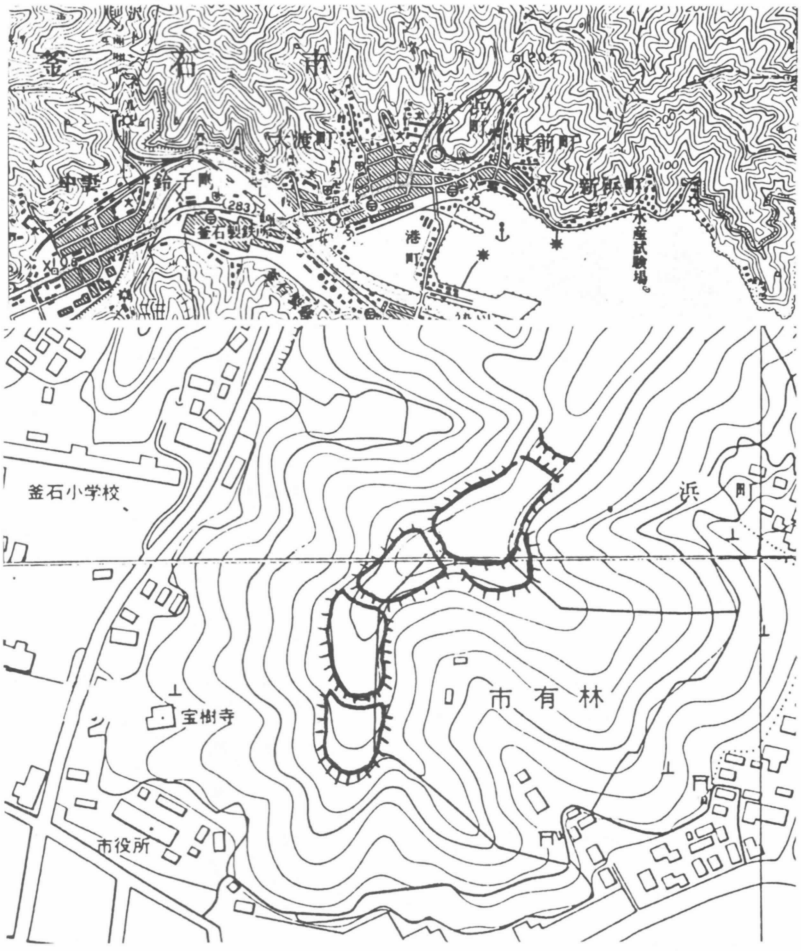
調査の結果、釜石市14、遠野市44、大槌町7、宮守村25の城館跡等が確認されている。領域の広狭に無関係な分布数が見られることは、その地域の政治動向・戦略上の重要性が反映していることは確実である。拠点とそれらを結ぶ交通上の要地にそれらが分布していることはいうまでもない。

**狐崎城**（狐崎館）　釜石市浜町１丁目

釜石湾に向かって北方にのびた標高120ｍ前後の丘陵端部に立地している。頂部の平場が主郭（本丸）と思われ、そこから湾に向かってのびる稜線上に二の丸といわれる平場がある。北は山稜で、他の三方は断崖となっており、典型的山城となっている。湾に面した方向が大手といわれ、館の下という呼称が残り、搦手は現在の釜石小学校の方向で、荒屋敷と呼ばれている。

城主は狐崎玄蕃といわれるが「狐崎館下相続記」によると、文明15（1483）年から文亀２年（1502）にかけて、南部信時が南部氏の当時であった時に釜石に来住したといわれる。

その後荒谷肥後が城主となったが、慶長６年（1601）７月、葛西氏の旧臣鹿折信濃とともにここに拠って一揆を起こした。しかし伊達政宗の臣中島大蔵信貞らによって鎮圧され一揆勢160余名は皆殺しにされたと伝えられている。これについては「伊達家治家記録」に詳述されている。



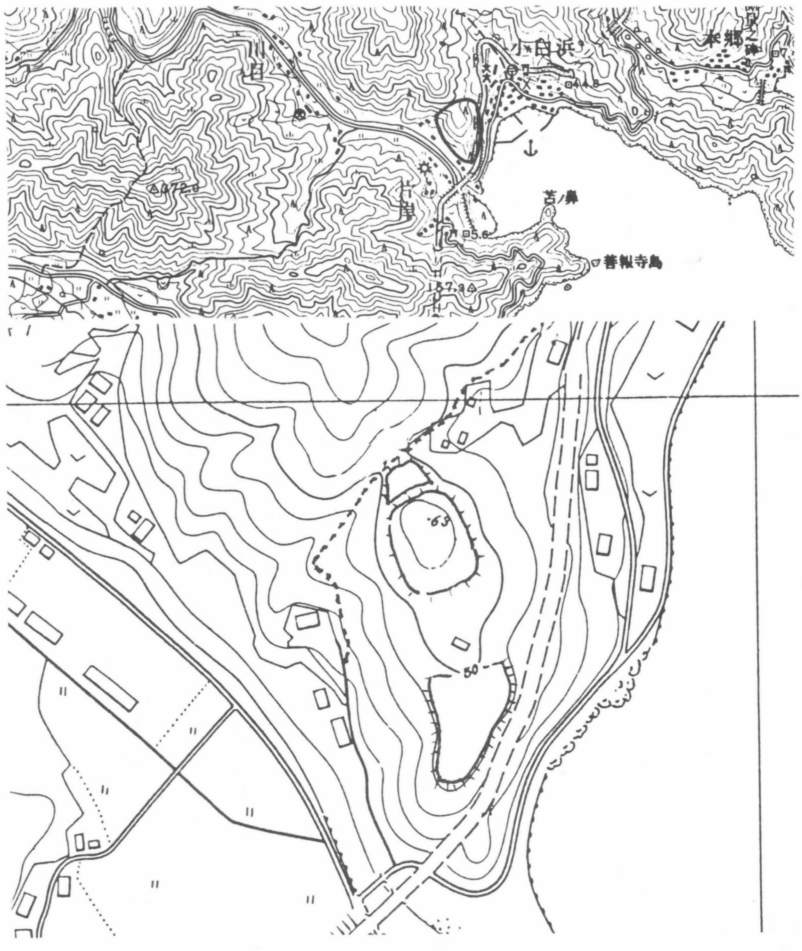

**伝城**（古城）　釜石市唐丹町小白浜

小白浜地区の西南方向の丘陵上に立地し、標高 80ｍである。国道45号線建設工事で一部を掘削されたが、本丸・二の丸といわれる部分は未だ残存している。

本丸とされる平場は大略40m四方であって４～５段の段築成が施こされている。北方の山地続きの部分には土塁が、さらにその後方には空堀が設けられている。二の丸とされる平場は、数本の空堀と土塁を隔てて本丸の東方に位置する。

天正18年（1590）年８月、秀吉は葛西・大崎両氏の所領を没収したが、この時に木村某にこの城を守護させたという。口碑によれば木村某は、それ以前からあった城跡（すなわち古城）に城を築き、対岸の葛西の一族千葉長門守に対峙していたとされる。

なお、昭和８年、城の一角から地蔵尊像が出土し、背面に文応禅斉の銘が見られたという。鎌倉時代のものと推定できる。



**横田城**（護摩堂城、薬師館）　遠野市松崎町大字光興寺護摩堂

遠野盆地の西北部に位置し、猿ケ石川の北岸にひかえる山地裾部に発達する西南面の丘陵端部に立地する。標高約300 m 前後で、現河床との比高35～40m である。

東北と西南部を沢地形で区切られ、西北部を堀で区切っている。これらで区画された部分が郭であろうが、地形の改変をうけているために遺構の詳細は不明である。中央からやや南方寄りに薬師堂が建立されている。南方下位の畑は腰郭的である。

築城者とその年代については次の４説がある。

① 文治５（1189）年以後、間もなく、阿曽沼広綱説

② 建保年間（1213～1218）かその後間もなく、広綱の次子親綱説

③ 阿曽沼又次郎広親説

④ 建保年間、広綱説

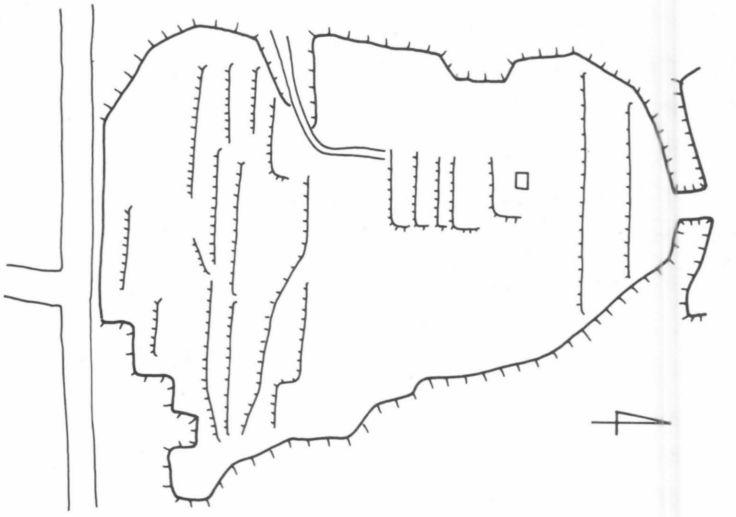
①は「阿曽沼興廃記」の「往古奥州閉伊郡遠野横田の城主は、俵藤太藤原秀郷の後胤奥州（ママ）阿曽沼郡の領主阿曽沼四郎広綱、文治五年源頼朝卿奥州伊（ママ）達泰衡御退治の時、広綱軍役之供奉を勤、戦場に於いて武功を励し、其御褒美の御加恩に、閉伊郡の内遠野十二郷を賜り、入部して横田村護摩堂山を守城に築、横田城と称す（後略）」によっている。

②は「阿曽沼家乗」の「阿曽沼氏出於鎮守府将軍藤原秀郷九世孫足利有綱、有綱有二子、長基綱、次広綱称四郎後改民部丞、属源頼朝居武蔵国、元暦元年九月頼朝令弟範頼討平、広綱従有功、食陸（ママ）奥阿曽郡因氏焉、文治五年九月頼朝討藤原泰衡、広綱又従有功、賜閉伊郡長子朝綱称又太郎後改左衛門尉、嗣次子親綱称又次郎封之閉伊郡族宇夫方広房家宰高野八郎為之輔、時建保年中也、親綱既徙閉伊郡遠野邑護摩堂山居焉、称薬師城（後略）」によったものである。

③は「遠野古事記」の「古説に奥州閉伊郡遠野の先領主は、藤原姓藤太秀郷の後裔阿曽沼又次郎広親、文治年中始めて遠野十二郷を領知して横田村護摩堂山を城に築いて住居す。それより以来慶長の始迄子孫数十代相続の旧家故自他の世人遠野殿と称す」によっているものであろう。ただし、②と③は宇夫方広隆の筆になったものであるが、両書の間には異同がある。その理由は不明である。

④は「奥々風土記」の「横田城、山城、横田の里に今も猶あり、此城元来は俵藤太秀郷の後裔阿曽沼四郎広綱か文治年中に右大将源頼朝卿より遠野一里の任を受賜りし時、次男亦次郎広親か、初めて此処に下向り其子孫遠野某と名のりて世々居りし城なり、元来護摩堂山に在りて云々」や「上閉伊郡志」の「横田城趾、松崎大字光興寺字護摩堂に在り建保年間阿曽沼広綱の築く所、城趾内に薬師堂（建武中建立）あるを以て、一に薬師城と呼び東麓にもと修験普賢坊の護摩堂（元亀の頃）ありしに因み一に護摩堂城と呼ぶ。」によったものである。同様の説は、さらに「松崎村郷土資料集」にも「横田城趾、大字光興寺８地割72の３の４の５、所有者、松崎村、浜田平次郎、浜田清之丞、菊池幸三、建保年間阿曽沼広綱によりて築かれし所」と見えている。

これらのいずれを採るべきかは不明である。「阿曽沼興廃記解題」で伊能嘉矩が「阿曽沼系図に拠れば広綱一代広親二代親綱三代と明記してあるのに本書には広綱・広親を認めて親綱を除き、別に本書と阿曽沼家系とを参酌して編纂せしと謂はるる阿曽沼家乗に広綱・親綱を認めて広綱を除く類の差錯の出入ある」とのべているように、根本資料を欠く状況ではいかんともしがたいといわざるをえない。現状では鎌倉初期に阿曽沼氏によって旧横田村の護摩堂山に築かれた程度に結論づけておく。



**鍋倉城**（横田城）　遠野市遠野町４地割館・東館ほか

遠野盆地の南方にそびえる物見山の麓の独立丘陵である鍋倉山に築かれた山城で、標高340ｍ前後である。現在見られる遺構は近世初期以降のものであり、中世紀のそれらは不明である。

「遠野状」によると直栄転封後の規模は以下のごとくである。「鍋倉の御要害と申すは東は来内川御館を帯し西南物見嶽と申大山続たるを掘切られ石垣十丈余築上、御城の廻り外がわは大柵を構え矢ざまを切り総門、中門、大手門三段なり。(中略）大手、搦手、屋形は萱板柾葺、総門大橋の前は広小路川堀の左右は柵をふり、総門を見れば御番所を上番、下番に列しつくも、さしまた、門前に備へて並べ、さも厳重に見ゆるなり、武者溜り東西広し。(後略)」

また宝永７（1630）年の「遠野城地敷間数覚書」によると「覚、一、城、高、東方三十八間、南方　十八間

西方三十一間　北方　三十三間半

一、本丸竪　七十三間　横　二十九間

一、二の丸竪　四十五間　横　三十二間

一、三の丸竪　七十七間　横　十九間

一、門数　七

このほかに虚堀、堀内堀道、井などの記述も見えるところから、堀・井戸も存在したものであろう。

これらを遺構としてみてみると、中央に本丸(120×24m)が位置し、空堀をはさんで南方に二の丸（88×45m）、北東方向に三の丸(135×29m）が造られている。二の丸に新田、三の丸に中館・福田の各屋敷が構えられ、本丸北方下位の平場に沢里・工藤の屋敷が、二の丸と三の丸の中間に小新田といわれる屋敷なども営なまれた。本丸と小新田の間に馬場があり、本丸西方の中腹に成就院跡も存在する。本丸の西辺に土塁が残り、また本丸と二の丸に礎石も見られる。いずれもすでに移動しているらしい。

堀跡も各所に見られるが本丸西方、本丸と二の丸の間、二の丸南方の行燈堀、経ケ沢南方、小新田南方と行燈堀の間の丘などに認められる、白萩の台地も一定の役割りを果たしていたものであろう。

その他の施設としては、門と井戸がある。門には総門(坂の下門)、中門、大手門、搦手門、西門、二の丸門等の７つが存在した。いずれも平門で、大手門と二の丸門は四脚門で、大手門には矢狭間があった。

井戸も７ケ所に存在したらしいが、詳細不明である。

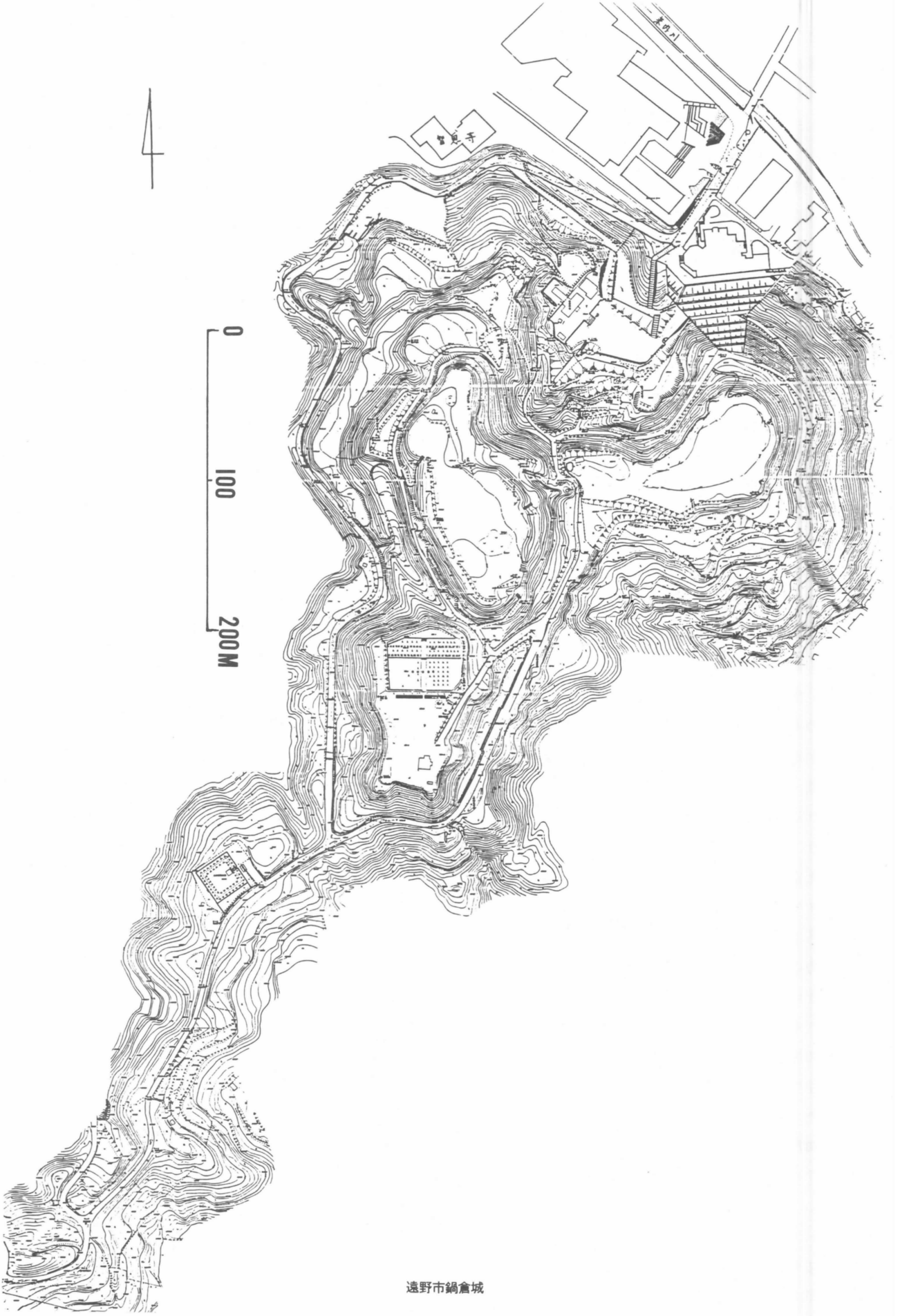
ちなみに本丸に存在した建物を紹介しておくと、慶安年間の火災後は柾葺の時もあったが、基本的には萱葺で、四方には板囲の塀がめぐっていた。二の丸の外囲は柵であった。安政３(1856)年の御本城間取図によると、本城は東西20間、南北28間(36×50ｍ）の広さで、表居間、御用の間、御番所、小姓部屋、茶の間等があり、ほかに奥居間、女中部屋、御納戸、台所、御料理の間等、20余の部屋があった由である。

山麓の西・北・東方に諸士屋敷があり、その外方に町家町があり、町の西端に下組同心、北端に中組同心、東端に上組同心などが配された。

遠野十二郷を与えられた阿曽沼氏は、はじめ松崎町横田城を拠点としていたが、広郷の代にいたり鍋倉山に移ったとされる。すなわち「阿曽沼興廃記」には「遠野孫次郎広郷居城移渉之事、親綱より何代の子孫に候哉、遠野孫次郎広郷の代、猿ケ石川度々洪水ありて川向ひに居住する諸士往来遅滞して急用差支ある故、居城の南の方、鍋倉山を新城に取立て移らんとて地形普請す、(中略）引移りの年号不知云々」というものである。これによると移転の年号不明であるが「阿曽沼家乗」は天正年間の初説をとっている。また「奥々風土記」は、天正年中としている。天正二十年にはこの城も破却されていることを考えれば、それ以前の天正年間というところであろうか。

慶長六（1601）年、文治以来400年余の阿曽沼氏の支配は終了し、遠野の地は南部氏の治下に入る。南部利直はこの地の重要性を考慮し、一門の八戸彌六郎直栄に支配させることとし、寛永４（1627）年３月、直栄は遠野に入部し、以後240有余年の遠野南部氏の時代が続くこととなる。

南部氏入部後、漸次諸士丁を拡げ、町家町を新設し城下町も形成されていく。後掲図はその様子の一部を示すものであり、年代不明だが掲げておいた（おそらくは18世紀初のものとみなされている。)



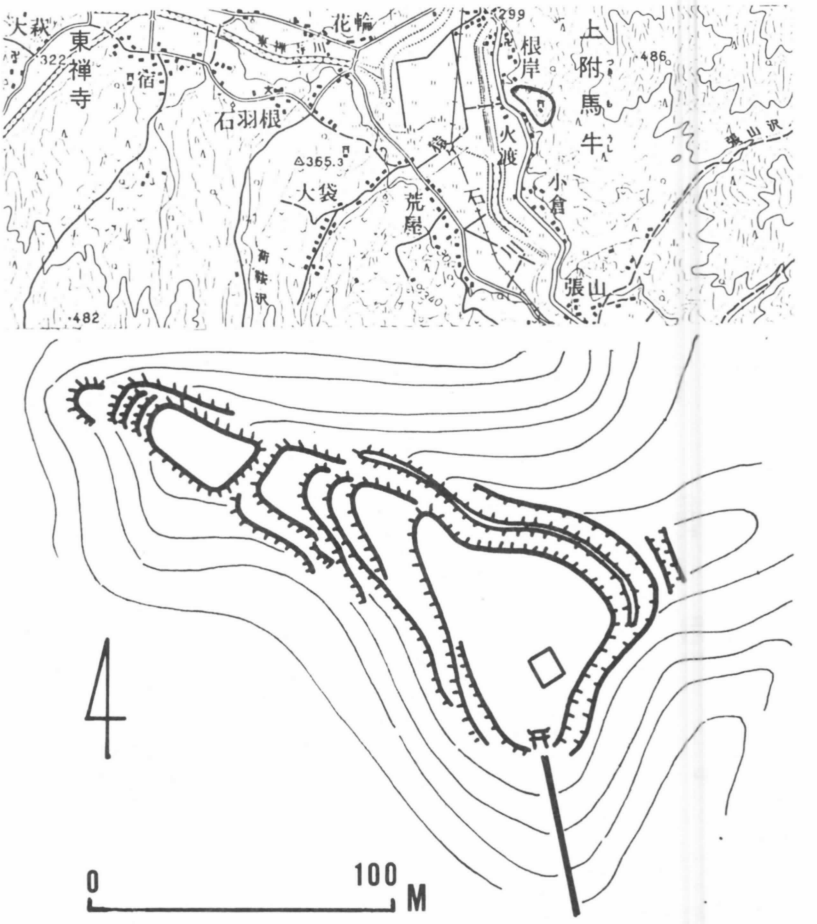

遠野市鍋倉城

遠野城下図

**火渡館**　遠野市上附馬牛字火渡

猿ケ石川と荒川の合流点東北方約500ｍの比高60ｍの丘陵上に立地する。東南一西北方向にのびる陵線部に数段の平場と堀が築かれもっとも広い南端の平場には、神社が鎮座する。基部である東部は３本の空堀で区切られ、また西北端部近くには内堀的なものが一本存在する。北・西・南の三方向の斜面上には数段の帯郭も付せられる。

ここの館主は阿曽沼氏の一族火渡中務とされる。「阿曽沼興廃記」によると、中務の子広家（のちに玄浄と称す）は、慶長５（1600）年、主家の阿曽沼広長の最上出陣の留守中に鱒沢広勝が盛岡南部氏と結んで起こした叛乱に際して、主家に従がいそれに参加しなかった。そのため鱒沢氏等に攻撃されこの館にたてこもったが遂に討死したという。



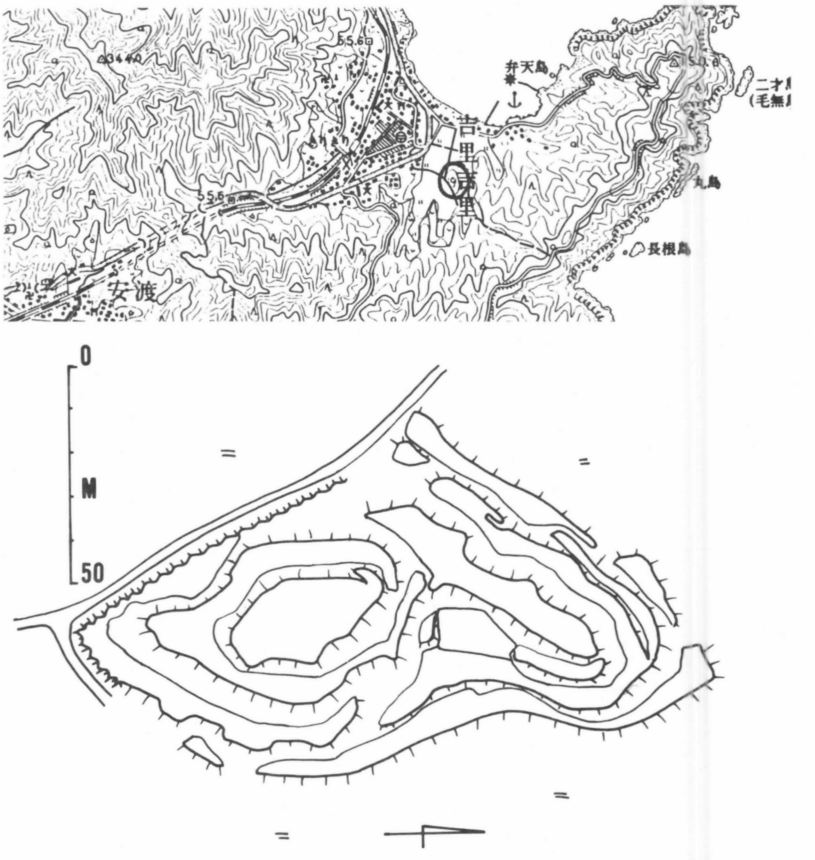

**田中館**　上閉伊郡大槌町吉里吉里字館

国鉄吉里吉里駅の東方約800ｍの、海岸に形成された平地上の突出した比高30ｍ前後の丘陵を占地している。丘陵は基部を削られているので独立丘陵状を呈している。60×150ｍ前後の小規模な城である。

最高位部が主郭の平場であって、周囲に二重の帯郭をめぐる。その先端部に一段低い平場（副郭）が造られ、これにも三段前後の帯郭がめぐる。帯郭はラセン状の印象を与えるものである。

館主といわれる芳賀氏の「由緒承伝之覚」によると「往古阿部御退治の頃、八幡太郎様奥州へ御下向遊ばされ候節、右御供の内奥州お仕置のため御残し遊ばされ候子孫に御座候由」とのことであり、一応紹介しておく。

慶長年間（1596～1615）に、仙台領の軍勢が、船で数次にわたって閉伊海岸に来襲した際に、芳賀刑部はその子らとともに田中館・向館に拠って防戦したが遂に戦死したとの伝えがある。



**大槌城**（浜崎館・古館）上閉伊郡大槌町大槌城山

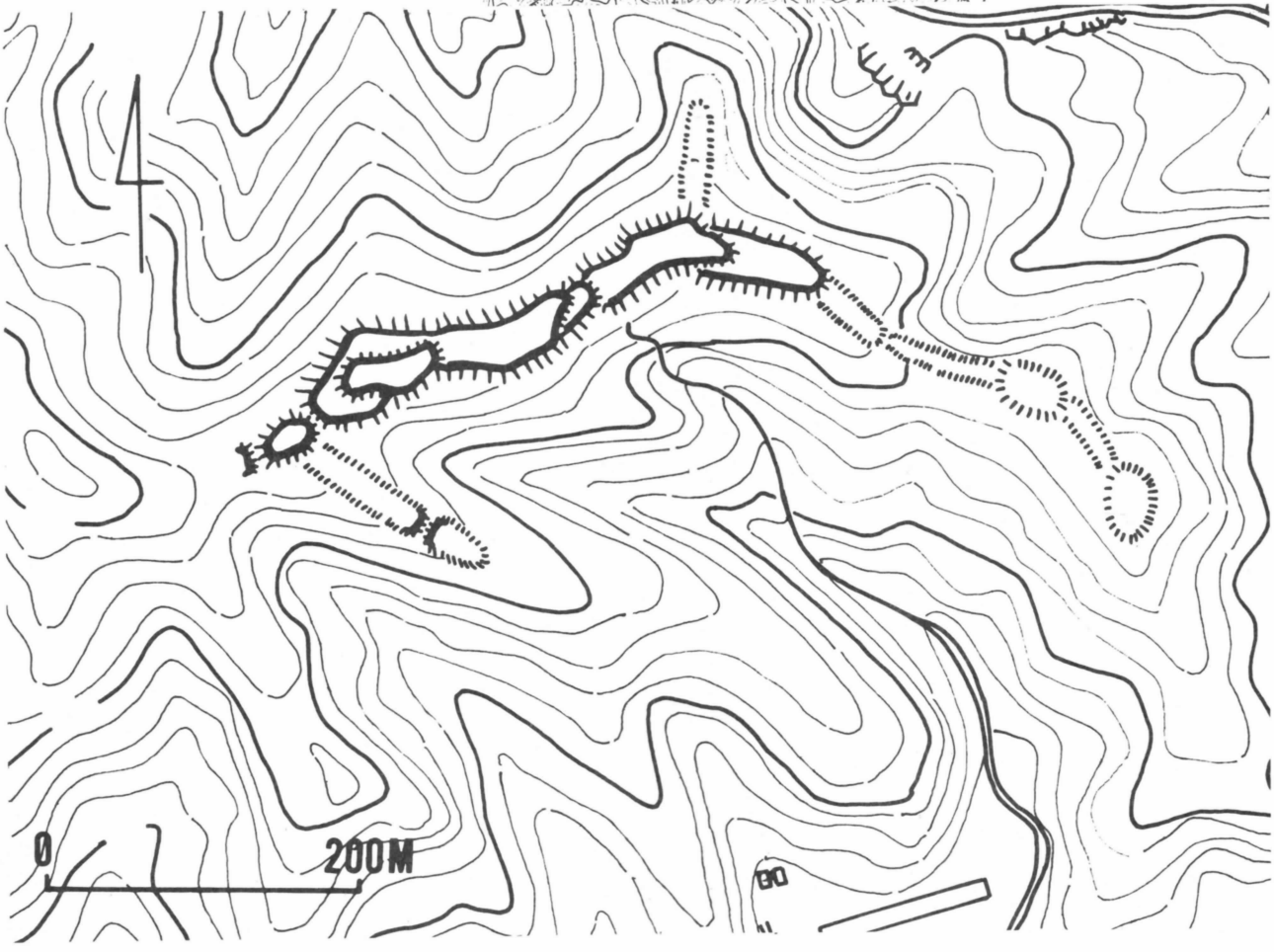
大槌町の市街地の後方の山、城山上の稜線上に立地し、標高130～150m、東西の全長600mである。稜線上の施設を西から東にみると、西端基部を空堀で断ち切り、それに接して砦（おそらくは物見的なものか）、さらに再び堀で区切られ主郭となる。主郭（本丸）には一重の帯郭を伴う。主郭の先端から東方へ階段状に二の郭、三の郭、四の郭が設けられる。平場の表面積は2,280坪（7,540㎡）前後となる。なお、大手口は、大念寺の横を上って主郭の下の帯部に達していたと思われ、大念寺はあたかも大手門の跡地の如くである。

典型的な山城に属し、「聞老遺事」は「此城は滄海を前にして、高山を後にして、大槌・小槌の二川を左右にし、城をその中央に占め、之を攻めるも陥らず」とのべている。

大槌氏280年間の居城とされる。一説には、遠野阿曽沼氏の朝綱の代（建武か正平の頃）二男大槌次郎が閉伊郡の東部海岸地方の治安のために大槌に分置されて以来、孫八郎政貞にいたる時代とされるが、草創期の大槌氏については不明な点が多い。

大槌氏の動向に関する史料は少ないが、永享（1429～41）の乱の際の大槌孫三郎に関するものは貴重である。続いて天正19（1591）年の九戸陣の際に大槌孫八郎の名が見える。すなわち「九戸御陣人数積」に「八百石、六十人、大槌孫八郎、鉄五弓五」と見えるのがそれである。また岩崎陣に際しての「岩崎一揆由来」に「慶長六年正月廿日吉日ニ付御勢揃の事、一、百六拾壱人、八百石、大槌孫八郎、一遣二本、一鉄砲五挺、一弓拾張、一手鎌弐拾挺、一幕紋藤巴是ハ東閉伊侍不残引具シ出ル」と見えるし、岩崎一揆後に岩崎城代の一人になったり普請奉行になったことが見える。

阿曽沼氏滅亡後も孫八郎は南部氏の下で3,000石を与えられ、平田から豊間根までを支配したが、奢のためにその権を奪われ滅亡する。大槌氏の滅亡後派遣された城代もこの城を居館としていたが、寛永9（1632）年、代官制に移行すると山麓の四日町に設けられた代官所に移った。万治2（1658）年、藩命によりとりこわされ、この城は消滅する。



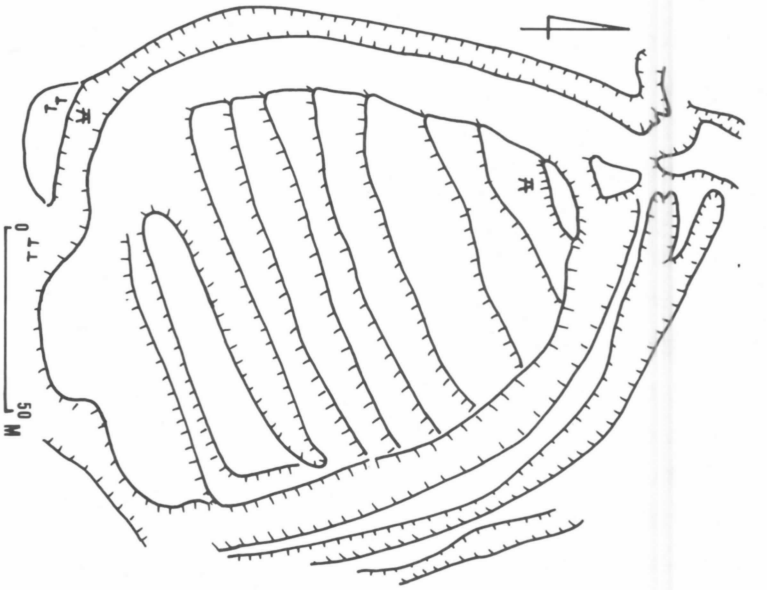
**鱒沢館**　上閉伊郡宮守村鱒沢二日町上町

長泉寺裏側の、笠通山からのびる尾根の末端部に立地し、比高110ｍ。稜線上の斜面に平場を七～八段築成して、その周囲を空堀がめぐり、また南端部近くには内堀的なものもある。北端部の堀は複数であり複雑である。

鱒沢氏は阿曽沼光綱の次男守綱が鱒沢・小友の二村を領して上町に居館を構えたのに始まるといわれる。五輪峠を挟んで江刺地方と結ぶ要地に一族を配したものである。明応8（1499）年の大崎氏の内粉に際しての参陣者中に、鱒沢越前守守綱がおり、天文年間（1532～55）の末頃には守綱の嫡子守国が葛西氏から出兵を請われているのが知られる。

慶長5（1600）年、広勝の代に、最上へ出陣中の阿曽沼広長の留守中に、盛岡南部と通じて叛乱を起こし、主家を気仙に追い落した。しかし、広勝は奪回をめざして来襲した阿曽沼広長の軍に敗れ討死した。なお長泉寺は天正2（1574）年、広勝の草創の由である。

同20年、秀吉の諸城破却令の後も、南部信直はこの城を存続させた。



## （十）　下閉伊地区概観

鎌倉時代、源頼朝は奥州平泉の藤原氏平定後、戦功によって多くの御家人たちに奥羽の没収地を割いて新しい所領として分け与えた。岩手県全体をみれば、奥州総奉行と呼ばれた葛西氏をはじめ、千葉・和賀・稗貫・河村・工藤・滴石・阿曽沼・南部氏などがあり、いずれも鎌倉幕府の御家人に系譜を求められるものである。

このころ、下閉伊地方の閉伊川流域には、同じ鎌倉武士の閉伊氏が移り住んだと伝えられている。ただ、閉伊氏の出身や移住の時期などには不明な点が多く、詳らかにできないが、閉伊氏の来住は、当初から閉伊川流域を目的地としたのではなく、南方から適地を求めて北上し、最終的にこの地に落ち着いたものとされている。

鎌倉時代初期の閉伊氏については不明な点が多いものの鎌倉時代中期にいたると、閉伊郡内に所領をもつ有力地頭として繁衍し、確乎たる地位を築いていたことが知られている。当時の閉伊氏は根市館に居住していたと考えられており、牧場開発と育馬、魚介・穀物などの市場経営に力を注いだといわれている。とくに、馬産はこの地方でもっとも重要な産業であったと考えられ、幕府は関東各地の牧場を全廃して、奥羽を一大牧場化しようと試みている。この奥羽の有力な馬産地として、糠部と閉伊があげられていることからみても、閉伊氏の牧場経営の実態を想定することができよう。

閉伊氏は、閉伊三郎左衛門の死後、惣領の光頼と庶子の員連の間に所領をめぐって紛争が起こり、閉伊川をはさんで嫡流の光頼系が河南一帯を、員連系は河北を領掌することとなり、完全に二派に分裂してしまう。

南北朝時代、閉伊氏に見られるような所領争いは、本県の場合、閉伊氏以外には和賀氏にみられるだけであるが、建武新政に入り多くの豪族たちが北朝方と南朝方に分かれて争った背景には、そのような要因が含まれていると想定されている。宗家河南閉伊氏は、北畠顕家の多賀国府再興に際して一族とともに参陣し、北朝方と多くの攻防戦を展開しているが、河北閉伊氏は北朝方についた可能性も指摘されている。いずれにしても、大多数の豪族にとって、この戦いが大規模な実戦の最初の経験と考えられ、こうした実戦を通してその戦術・軍制や築城法を体得し、以後本拠地の強化を図っていった。

閉伊氏の場合、こうした体験を踏まえて築いたのが根城であったといわれ、堅固で中世に典型的な城館に仕上がっている。その後、足利方来襲の恐怖は杞憂に終り、閉伊氏は老木館・田鎖館と新しい館を築き居を移していった。

室町・戦国時代、閉伊氏は南北朝時代末期に田鎖に移住し、姓を田鎖氏と改めている。移住の理由は、田鎖の地が閉伊氏の本業である牧畜に適していたためと考えられており、事実「田鎖牧」は、室町時代には名馬の産地として中央にまでその名を知られ、江戸時代には南部氏の藩営牧場になっている。

一方、笠間・鍬ケ崎の地を与えられて分立していた河北閉伊氏は、閉伊川河口から鍬ケ崎にかけての地頭職となり黒田に新しい湊や黒田館を築いて海産物の集散に力を入れたと伝えられている。この頃すでに河北閉伊氏は笠間館から千徳館に居を移し、千徳氏を名乗ってその勢力をのばしていたが、その勢力の伸張に伴い黒田の湊はますます繁栄し、現在の宮古市の基礎を築くにいたったとされている。

室町時代から戦国時代にかけて、閉伊川流域には多くの豪族たちが割拠していた。前述の田鎖・千徳氏などのように近隣数か村を領有し、大勢力を誇った豪族は例外で、ほとんどが一、二の村を勢力範囲とするものであったと考えられる。それでも、彼らの居住する村には、必ずといってよいほど城館が遺存し、大小の相違はあるもののほぼ全員が城館をもつ土豪であったことが知られている。下閉伊地方に居住したと考えられる豪族たちの名をひろってみると河南閉伊氏の系統と考えられる豪族には、田鎖・田代・赤前・根市・花輪・長沢・近内・腹帯・蟇目・茂市・苅屋・和井内・船越・大沢・川井・箱石・河内・夏屋・大川・浅内・高浜・山崎・荒川氏などがあり、河南閉伊氏の系統とみられる豪族には、千徳・近内・八木沢・津軽石・根井沢・江繋・小国・近能・黒田氏などがある。こうしてみると下閉伊地方の豪族・城館は、そのほとんどが閉伊氏にかかわるものであることが判る。

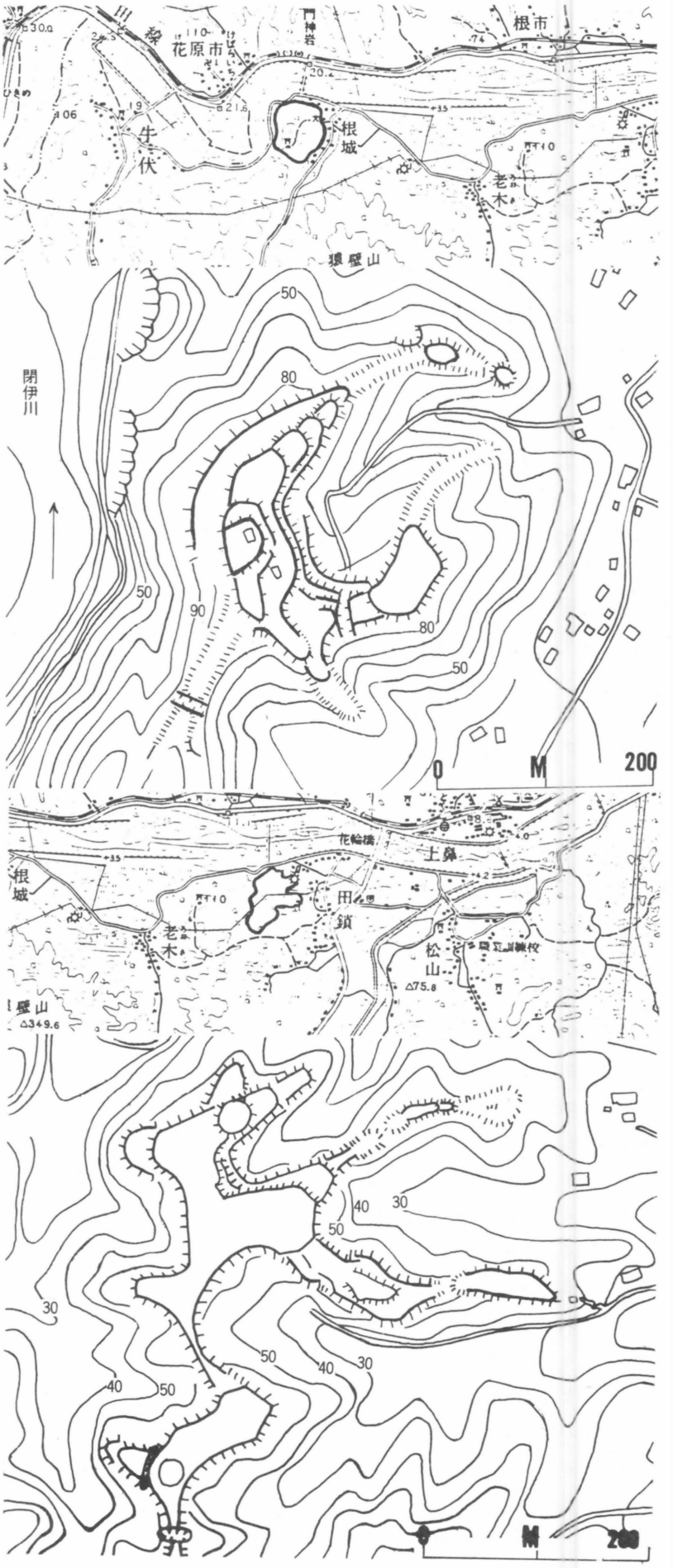
ただ、これらの豪族のすべてが室町・戦国時代に分立し、館を構築したものではなく、船越氏などのように、南北朝時代すでに勢力をもっていた豪族もいたことに留意する必要がある。また、上記閉伊氏の系統に属さない豪族もあり、その中には豊間根氏などのように安倍氏に連なる系譜をもち、鎌倉時代まで遡りうる伝承を伝える豪族も存在している。これらのことを含め、今後検討しなければならない多くの問題を残している。

**根城**　宮古市老木字館の下

根城は、宮古市街から西へ８kmほどの根城集落の裏山に位置し、標高100～120m の丘陵末端を拓いて築いた本格的な居城である。主郭、二の郭、三の郭が階段状に設けられているほか、主郭南方にとりついた郭（前の郭と呼称されている）や主郭東方の広い空堀で画された大規模な郭（東の郭と呼称されている）などで構成されている。主郭内の最高部には八幡神社が祀られており、物見台となっていたものと考えられる。北側に延びる尾根上には腰郭をめぐらし、その先端は砦となっている。城への大手口はこの砦のほぼ真下にあり、沢沿いに道が設けられている。宇根鳥山へ連なる基部は、急激に狭まる尾根の端を空堀で断っている。根城の築城年代は詳らかではないが、閉伊氏の居城であったことは確実で、根市館から移り住んだものといわれている。現在のところ、14世紀中葉閉伊十郎親光によるものと想定されているが、少なくとも戦国時代までは使用された堂々たる城館で、宮古市の史跡指定を受けている。

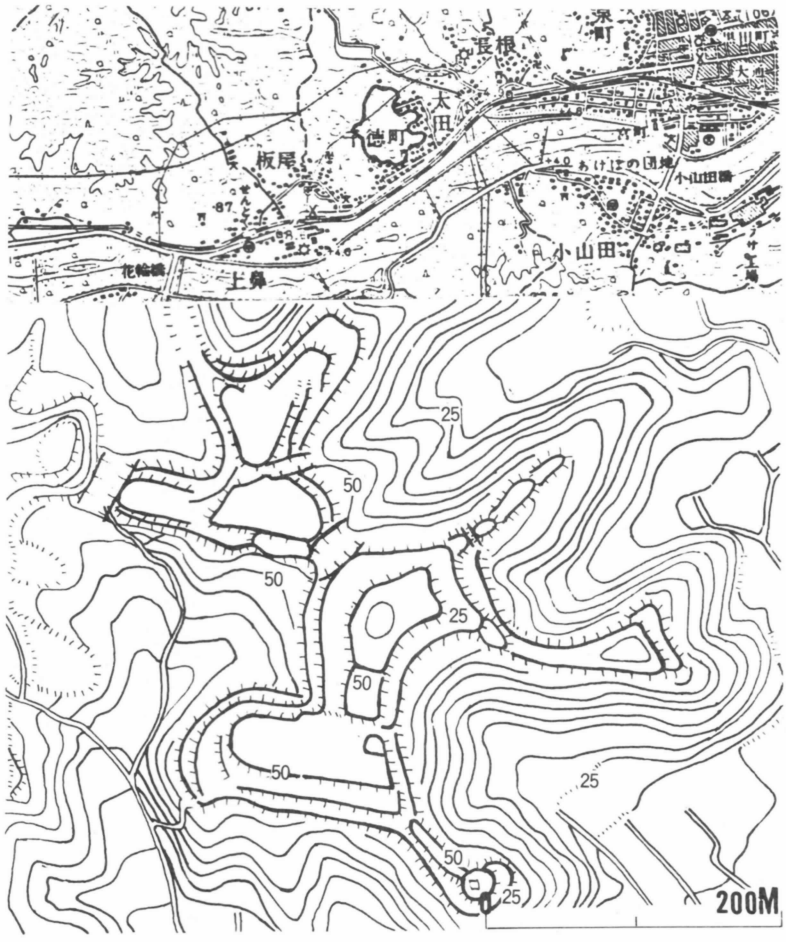
**田鎖館**（三合並館）　宮古市田鎖

田鎖館は、閉伊川とその支流長沢川とに挟まれ、猿森山の支脈が東に延びた丘陵の先端にある。その標高は最高部で約60ｍにすぎず、近隣の根城・老木館などに比べかなり低くなっている。また、館の周囲には多くの沢が入り込んでおり、館の形態をやや特異なものにしている。主郭は多角形に近い複雑な形状を呈し、同じ高さの副郭がとりついており、副郭の端には物見壇と考えられる円形の高まりが残されている。主郭・副郭には腰郭が階段状に築かれ、枝分かれした尾根上に延びている。集落に近い東端には、砦と考えられる平場が設けられ、大手口に至る小径がこの下を通る。二の郭は主郭よりやや高くなって基部へと続き、主郭との間及び基部は空堀で画される。田鎖館は田鎖氏によって築かれたもので、その年代は閉伊氏が田鎖氏を名乗るようになったころ、千徳城とほぼ相対する14世紀末頃と考えられている。この後の田鎖氏は馬産等で隆盛を極め、閉伊川流域一帯を一族で占めるようになってくる。



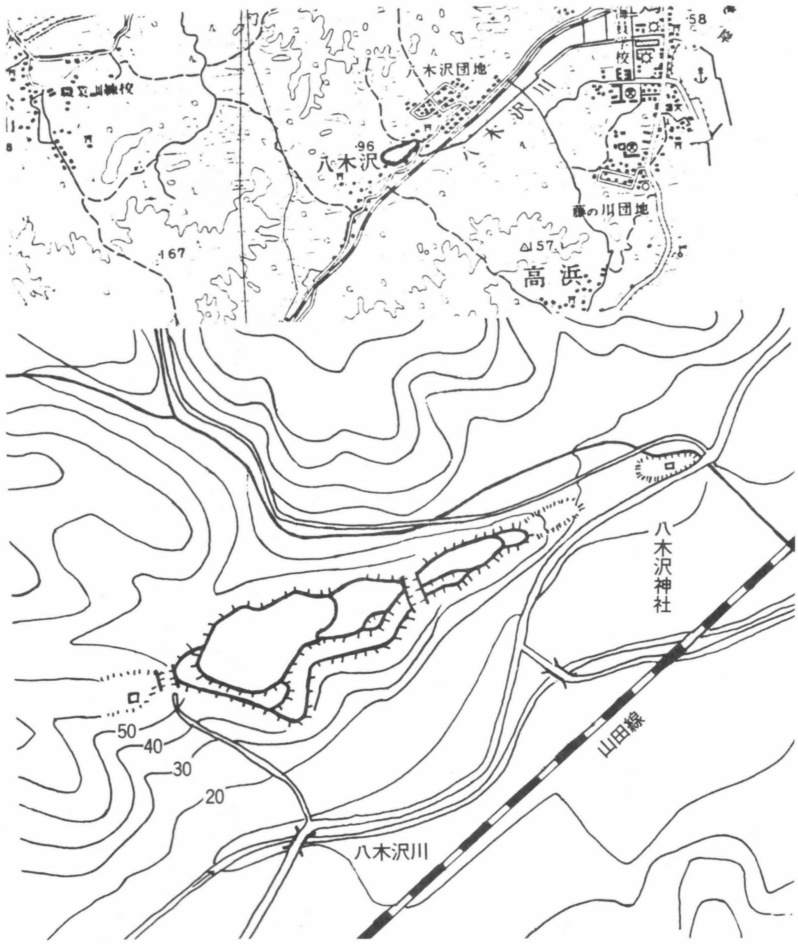
**千徳館**　宮古市千徳字沢

国鉄山田線千徳駅の東方約800ｍの千徳町の背後にあり、雄大な規模と見事な縄張りをもつ第一級の城郭である。主郭は近世にいう本丸で、南北41ｍ、幅29ｍの歪んだ菱形につくられており、これを中心として副郭、二の郭、三の郭、四の郭などが整然と配置されている。それぞれの郭は広い空堀によって切られているが、当然架けられたであろう橋のほかに、腰郭を囲繞してそれらを結んでいる。また、主郭を中心として放射状に延びた尾根の先端には五つの砦が置かれ、各郭とは空堀や急峻な崖で画されている。とくに、北と南の砦には物見と考えられる円形の壇が築かれ、南の壇上には八幡神社が祀られている。大手口は北側に設けた三の郭の先端部にあり、近内川に架けられた浄海橋のふもとが大手門とされている。本城の築城者は河北閉伊氏と考えられ、その年代は14世紀末ごろと推定されている。河北閉伊氏はのちに千徳氏と称し、宗家田鎖氏（河南閉伊氏）とともに閉伊川流域の二大勢力に成長していった。



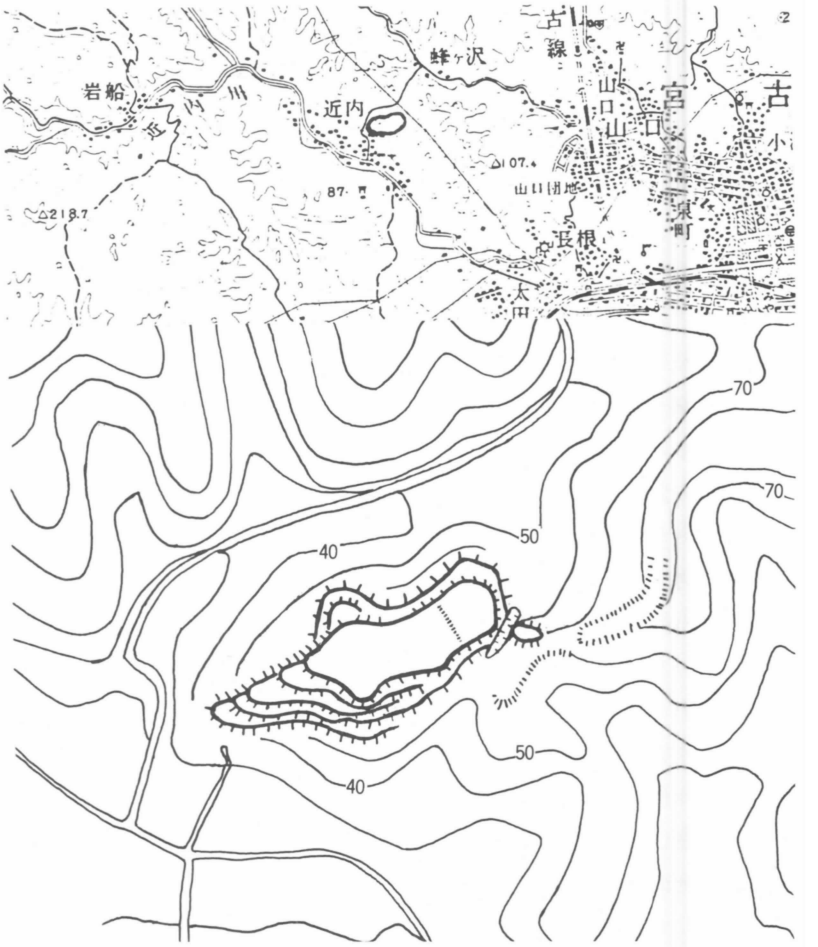

**八木沢新館**　宮古市八木沢字森の越

国鉄山田線磯鶏駅の西方約２kmに位置し、八木沢集落の中央を流れる八木沢川の北に築かれている。なお、八木沢川の南には本館と相対する館があり、八木沢古館と呼ばれている。本館は東西に長く延びた丘陵の先端を造成したもので、西から東へ主郭・二の郭・三の郭と階段状に設けられている。主郭は標高96ｍの最高部にあり、東西に長い不整楕円形を呈する。二の郭は主郭の先端につくられ、それぞれ南側に腰部がめぐらされている。三の郭は二の郭と空堀で画され、その前方にとりつく。また三の郭の麓、小台地には八木沢神社がある。基部は広い空堀で切られ、その西方、館の外側に館前八幡の小祠が祀られている。本館は対岸にある八木沢古館と同様、室町時代に八木沢氏によって築かれたとされているが、館主八木沢氏については不明な点が多い。『東奥一戸系譜略』には、一戸系八木沢氏を館主として伝えているが、これは戦国時代末期ごろのことと推測されている。



**近内館**　宮古市近内

宮古市街地西方約5km、閉伊川の支流近内川に沿ってできている近内集落の背後にあり、俗に館山と呼ばれる丘陵末端部に立地する。本館が載る丘陵は、集落にのしかかるような急崖になっており、縄張りが単純であるにもかかわらずその要害度は高い。単郭式の居城で、主郭の標高は約60mを測る。主郭は東西約120m、南北40～50mほどの長方形を呈し、東北隅には、物見の跡と考えられる台地が残っている。主郭の周囲には急な斜面を削って腰郭がめぐらされ、とくに西側は三重・四重に設けられている。基部は二重の空堀で区画し、空堀と空堀の間には砦として使用したと考えられる平場を造りだしている。なお、本館と尾根伝いに結ばれた東南約700mに大館と呼称される砦があり、二つの大きな郭を備えた物見砦となっている。近内館の館主は近内氏で、戦国時代の初めごろに築城したと推測されている。近内氏は千徳氏の一族で、千徳城の北方を護るために配置したものと伝えられる。

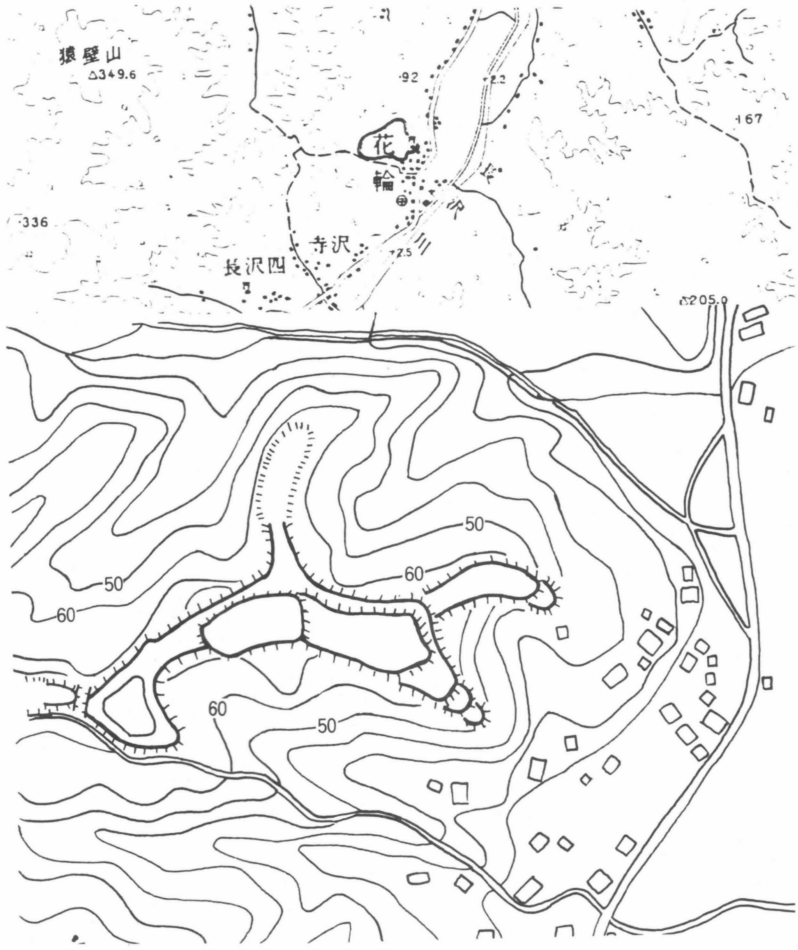



**黒田館**　宮古市本町

黒田館は宮古市役所の眼前にあり、黒森山の支脈が閉伊川に向って延びた丘陵の末端、標高約65mの地点に構築されている。主郭は最高部に、南北に長い長方形に築かれ、眼下には閉伊川の河口が望まれるほか、根城・田鎖城・松山館・千徳城などの諸城館と指呼の間にある。主郭には腰郭がとりつき、西側尾根の先端に向かって二の郭、三の郭と階段状に設けられている。現在、館の北側にある常安寺の門前から、館の中腹にある判官神社を経て三の郭に至る小径が開かれており、これがかつての大手口であったと考えられる。裏山へ連なる基部は空堀で切られ、背後の通路を断っている。本館は、河北閉伊氏が黒田に新たに開いた湊の管理・保護を目的として室町時代の末期に構築したもので、今の宮古市の経済基盤がこれによって確立したと伝えられている。当時の河北閉伊氏は既に千徳に居を住し千徳氏を名乗っていることから、一族の黒田氏（近能氏）が千徳氏に代わって管理したと考えられている。

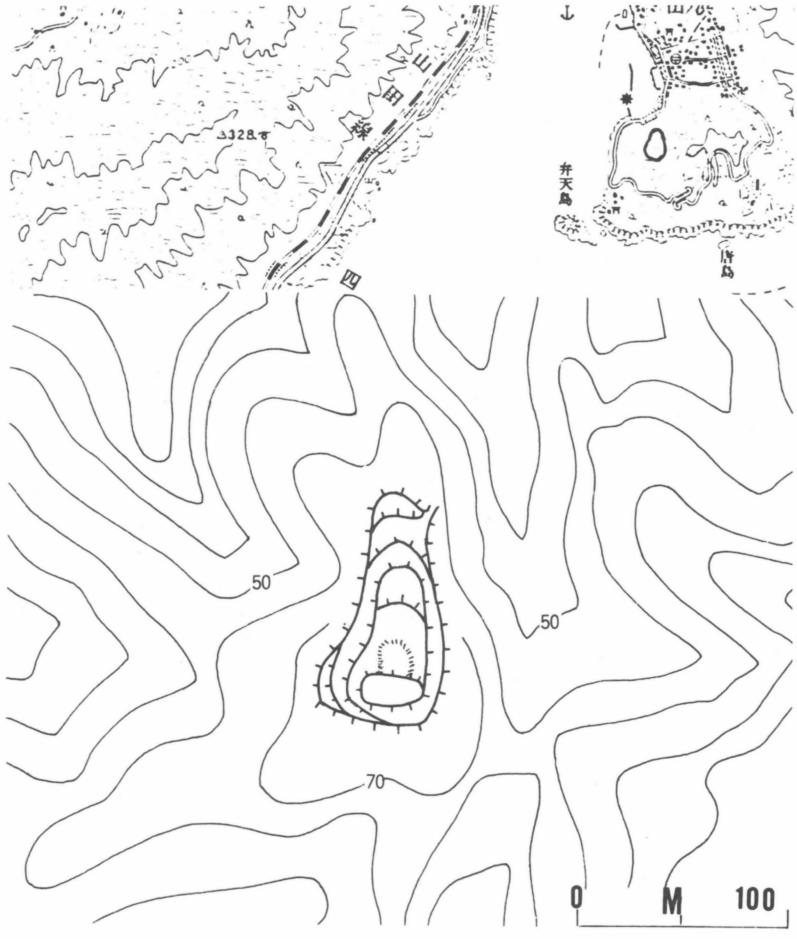
**花輪館**　宮古市花輪

花輪館は田鎖館の南方1.5km、長沢川上流にある花輪集落の背後に位置し、長沢川に向って延びた丘陵の先端部に構築されている。主郭は標高約80mの最高部に築かれ、東西約65m、南北約30mの長方形を呈する。主郭の前方東側には東西80mほどの二の郭が設けられ、それぞれに腰郭がめぐらされている。二の郭から二又に延びた尾根上には腰郭がとりつき、双方の先端部は砦状の平場となっており、その一つに花森神が祀られている。尾根は深い空堀で切断され、主郭との間には背後の備えとした砦と推定される平場が造られている。花輪館は、田鎖氏及びその一族によって築かれた老木館・田鎖館・長沢館などと指呼の間にあり、宗家田鎖氏の田鎖館守備を担って築かれたものと考えられている。館主は田鎖氏の一族花輪氏で、『参考諸家系図』の花輪氏の系譜によれば、天文15年（1546）に花輪館に移ったとされており、このころ築城されたものと推定される。




**小田の御所**　下閉伊郡山田町大字船越

小田の御所は、船越半島の南西端、船越湾に突き出した標高約80mの丘陵上にあり、田の浜集落の南方約500mに位置する。自然地形を巧みに利用した要害度の高い館で、館の周囲の狭い山間はそのまま自然の堀の効用を果している。主郭の標高は78.9mで、東西28m、南北14mの楕円形をし、そのほぼ中央に8個の礎石が遺存している。二の郭は主郭の前方北側に設けられ、南北約43m、東西約32mの規模をもっている。二の郭の南端、主郭と接する個所には土盛りした壇があり、10個の礎石と文化年間建立の二つの宝珠印塔がのこされている。三の郭も二の郭の前方北側に東西26m、南北24mの規模で構築されている。これら階段状の三つの郭の周囲には広い腰郭がめぐらされ、その北西部にも一つの宝珠印塔が建てられている。小田の御所は船越御所と同様、船越氏が北畠顕成一行庇護のために造ったものとして伝えられており、とりわけ戦時に備えた臨時の館としての機能をもっていたと考えられている。

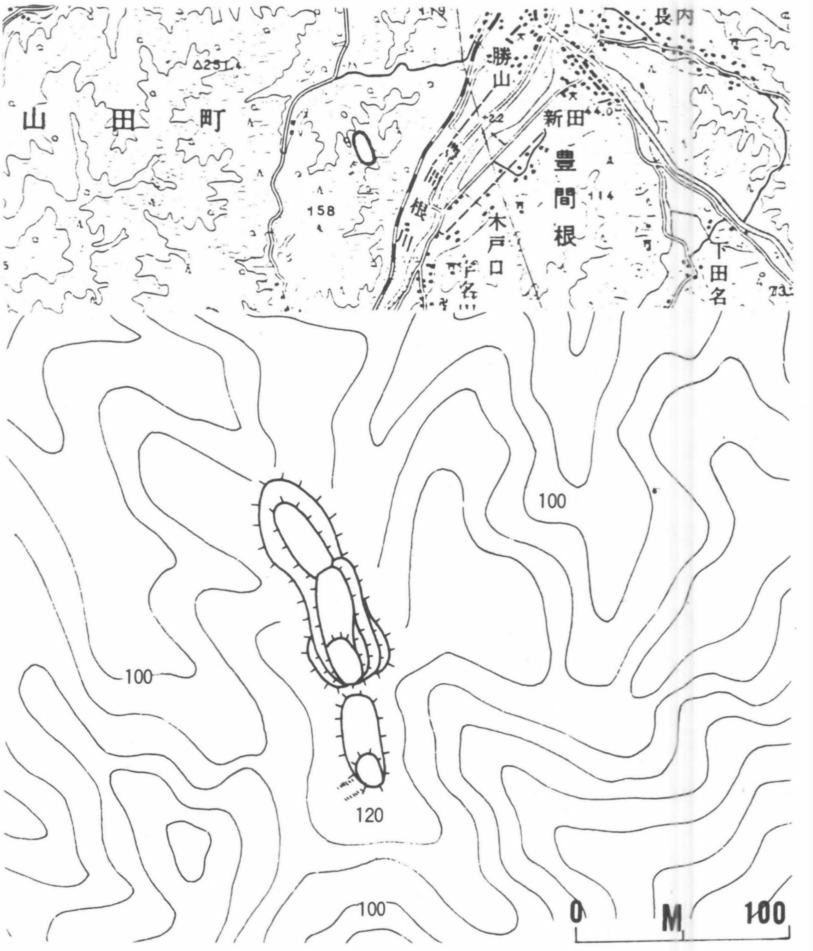


**船越御所**　下閉伊郡山田町大字船越10

船越御所は船越東館とも呼ばれ、西方に所在する船越館（西館）と対比されている。国鉄山田線船越駅の東方約600ｍに位置し、船越半島のくびれに突き出した独立丘陵上に立地する。構造は単純な単郭式で、主郭の標高は約15ｍを測し、長軸約130ｍ、短軸約60ｍのやや歪んだ隅丸長方形を呈する。南方海側は急峻な崖となっており、東と北側の斜面を削り、東に二重、北に一重の腰郭をつくり出している。東側の低い腰部の南端には八幡宮が祀られ、杉や藤の古木が立っている。館の北側の平地は中館と呼ばれ、小森の中に熊野神社がある。また、この中館との境には空堀の跡と考えられる凹地が部分的に残されている。館の北西には海草寺があるが、旧地は船越御所の祈願所で、月海山大覚寺と称する真言宗の寺院であったとされている。館主については詳らかでないが、北畠顕成一行が船越に落ちて来た際、閉伊氏の一族である船越氏が一行を庇護するために築城したものと伝えられている。

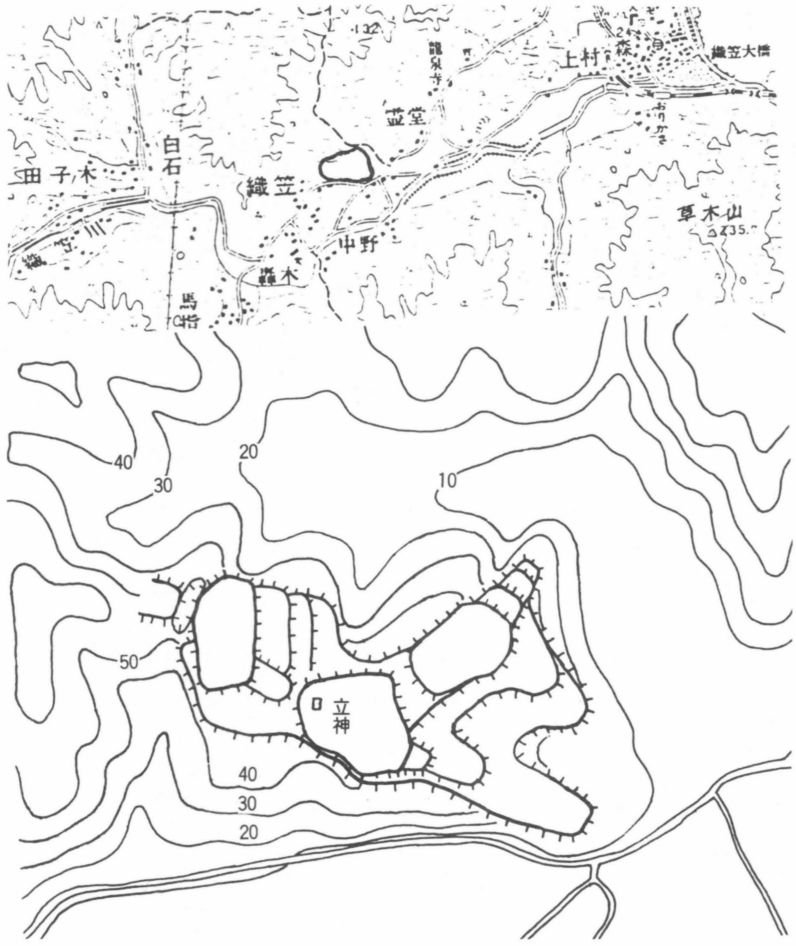
**曽伊館**　下閉伊郡山田町大字豊間根19

曽伊館は、国鉄山田線豊間根駅の南西約1.2㎞に位置し、豊間根川と荒川川に挟まれた金田森の山塊から東にのびた支脈、標高約130ｍの丘陵上に立地する。主郭は南北26ｍ、東西22ｍのほぼ円形を呈し、その中央にはかつての館神であったと考えられる曽伊八幡宮の小祠が祀られている。主郭の前方北側には南北41ｍ、東西約25ｍを測る二の郭があり、そのさらに前方には南北47ｍで最も長くなる三の郭が構築されている。なお、尾根なりに階段状に設けられた三つの郭のほぼ全体には狭い腰部がめぐらされている。主郭の背後は深い空堀で切断され、その外側には砦状の平場がつくられている。曽伊館の館主豊間根氏は、豊間根系図によれば安倍一族で、安倍貞任の弟正任の子安倍七郎孝任を初代にいただくとされている。本館は、その10代目安倍宣任が糠森の館から移って居館し、以来25代茂任まで拠点になっていたと伝えられるが、その構造などからみて、戦国時代頃の構築と考えられている。



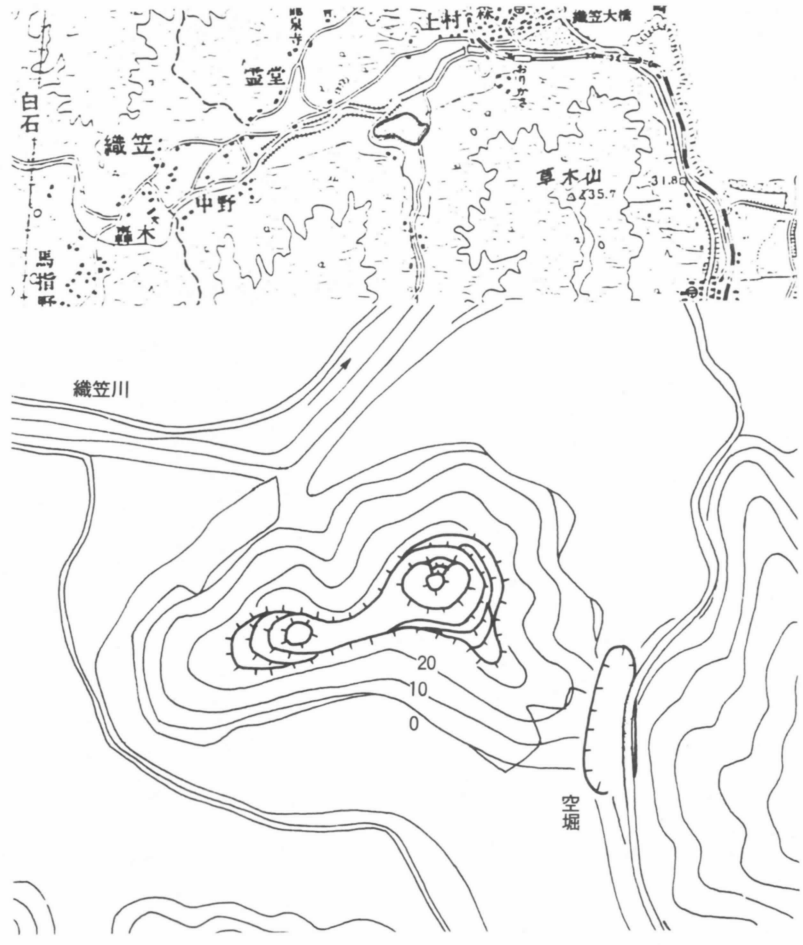
**立神館**（織笠館）　下閉伊郡山田町大字織笠16－23

立神館は織笠館とも呼ばれ、国鉄山田線織笠駅の西方1.2kmにある霊堂集落背後の丘陵上に構築されている。主郭は標高約50ｍの最高部にあり、南北約60ｍ×東西約35ｍの長方形を呈する。主郭には腰郭がとりつき、一段低い前方東側には空堀で画して二の郭が設けられている。二の郭は東西約60ｍ、南北約70ｍの長方形で、西の端の微高地に立神が祀られている。三の郭は二の郭の北東側に空堀で画してつくられ、南北約50ｍ、東西約40ｍの規模をもっている。二の郭・三の郭には尾根沿いに大きな腰郭が設けられ、そのくびれの部分に大手口が存在する。基部は広くて深い空堀で切って背後の通路を断っている。立神館の館主は織笠氏で、『系胤譜考』の織笠氏の系譜によれば、永享11年（1439）に福士床次郎保定が南部義政より織笠村等を賜わって織笠氏と称したとされている。なお、この織笠保定は、信仰心の厚い人であったといわれ、本館の近隣に竜泉寺を開創したほか、先祖を祀るために八幡宮を建立している。




**織笠館**　下閉伊郡山田町大字織笠４

織笠館は坊主山館とも呼ばれ、国鉄山田線織笠駅の西方約１kmに位置する。草木山の山塊が北西に突き出した丘陵上に立地し、北側の麓を織笠川が流れている。主郭は標高41ｍを測り、東西47.5ｍ、南北40ｍのほぼ円形を呈する。その前方西側には径23ｍほどの小規模な副郭が設けられ、主郭・副郭の全体には広い腰郭がめぐらされている。また、副郭の前方西側や主郭南東、背後の丘陵に連なる尾根上には、さらに二・三段の小規模な腰郭がとりつく。背後の丘陵とは広い空堀で切断されているが、今は新田集落に通じる道路となっている。本館の麓を東流する織笠川は約1.2km下流で山田湾に注ぎ、館の前面には織笠川沿いの平野が広範囲に広がっていることから、漁業及び農業を管理するうえで格好の適地となっている。館主は田村氏といわれており、豊間根家の『阿部家伝』によれば、閉伊氏が鎌倉時代のはじめ船越に移住してきたとき、織笠守護田村八左衛門が81人の家来とともに挨拶に参上したと伝えられている。

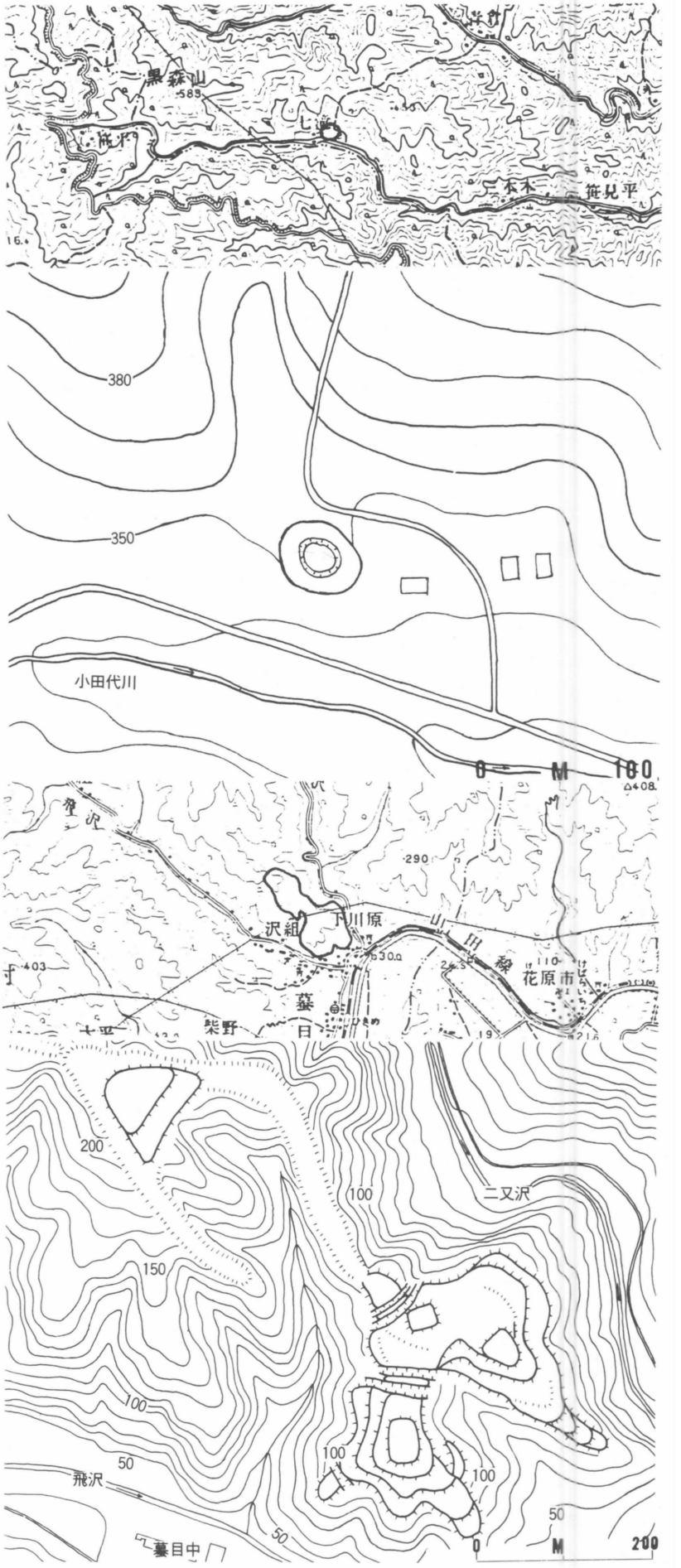


**館森**　下閉伊郡田老町大字末前字七滝

館森は、七滝の館とも呼ばれ、田老町中心部から西方へ約8km入った丘陵地帯にあり、館の南側は宮古市との境をなしている。南側を田老・有芸線、東側を青倉・末前線、西側を田代・有芸線の林道が通り、田老・有芸線に沿って小田代川が東流している。館は小田代川に向かって突き出した丘陵の先端部に構築されており、独立丘状の形態をなしている。麓からの比高約40mを測る丘陵頂部には、30㎡ほどの面積をもつ平場がみられ、往昔より住居跡として伝えられている。頂部からやや下には幅3mほどの空堀が全周してめぐらされている。全体的に保存状況は良好で、ほぼ原形を保っていると認められる。また、館の麓東側の小向家の屋号は館となっている。本館は、中世の城館とは異なり、所謂チャシ・エゾ館と称されるもの同系統に属すると考えられ、平安時代後期の住居跡とも想定されうるが、詳細は不明である。なお、当地周辺は笹平鉄山などに知られるように製鉄、畜産が古くから営まれていたと伝えられている。

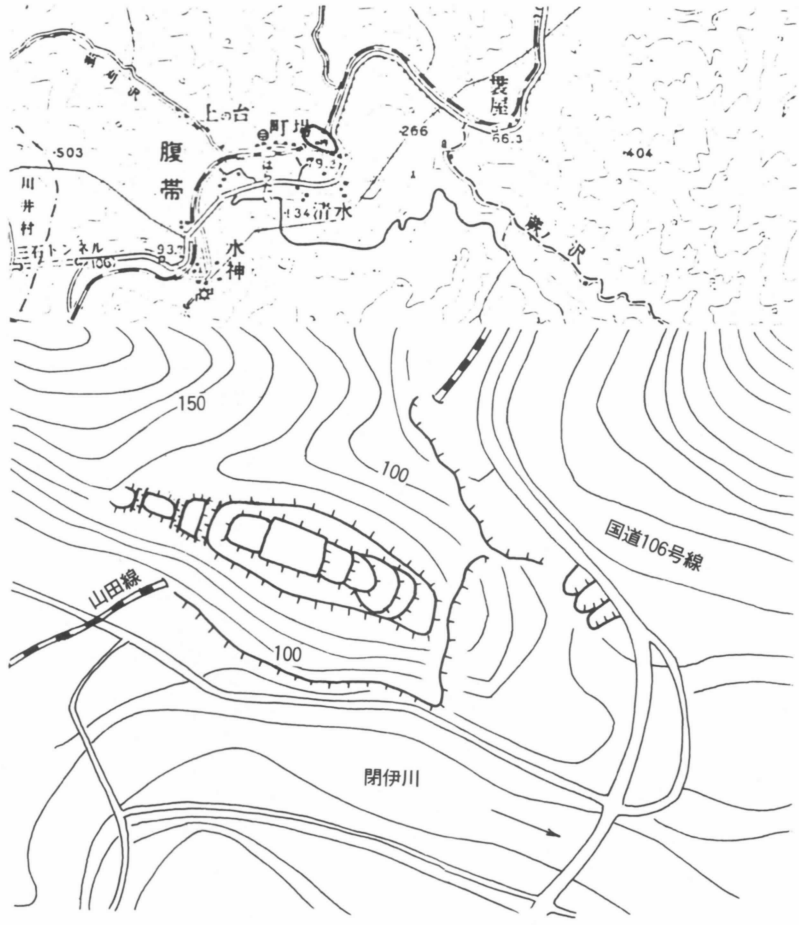
**蟇目館**　下閉伊郡新里村大字蟇目字日向新田

蟇目館は国鉄山田線蟇目駅の北方約700m、飛沢と二又沢に挟まれた丘陵の先端部に立地する。主郭は標高約130mの地点にあり、地形にあわせた不整多角形を呈する。主郭の前方南東側には数段の小規模な腰郭を設けている。主郭南方には、二重の空堀で切られた平場があり、それにも二・三段の腰郭がとりつく。また、この平場の南西には空堀で画された砦状の施設がみられる。大手口は下川原集落背後の館ケ沢にあり、谷を登って主郭に続いている。基部は三重の空堀で区画されており、尾根づたいに赤坂館と呼ばれる詰の城に通じている。赤坂館は標高約140mの高所にあり、三角形状の平場が設けられている。なお二又沢の対岸、蟇目館の東側には二つの館を合わせて二崎口の館と呼称される丹敷館がある。蟇目館の館主は田鎖氏の一族蟇目氏で、戦国時代末期の館主蟇目宮内少輔の祖が室町時代頃築城したものと考えられている。なお、『東奥古伝』に常の屋敷跡と伝えられる御田屋も山麓に現存している。



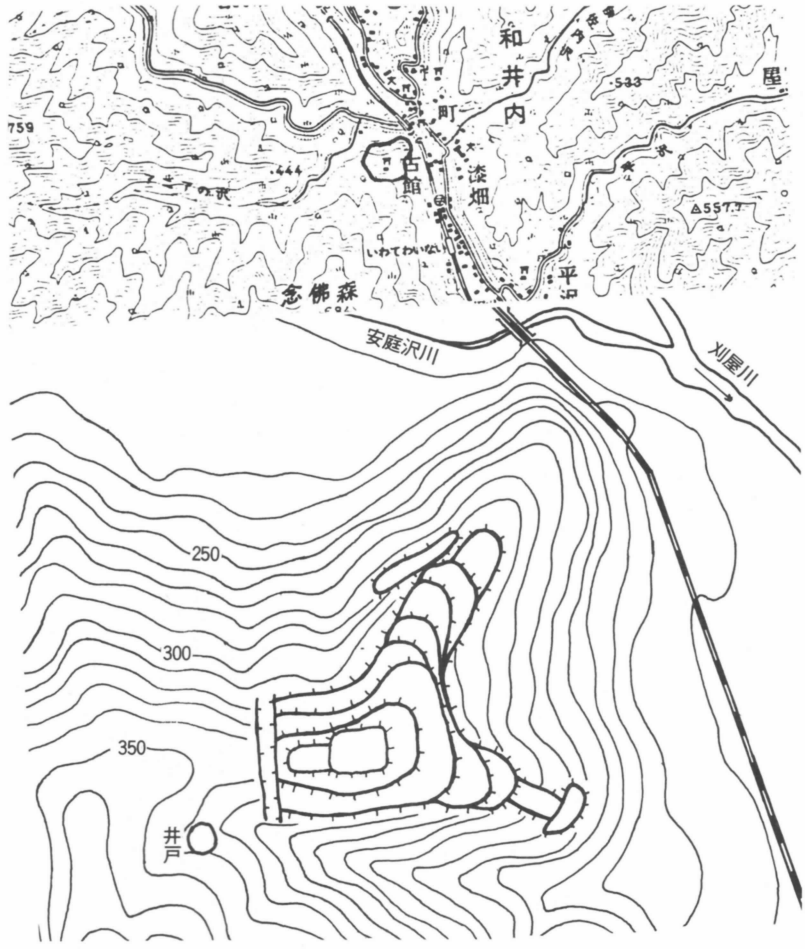
**腹帯館**　下閉伊郡新里村大字腹帯字館

腹帯館は国鉄山田線腹帯駅東方約300ｍに位置し、閉伊川の湾曲部につき出した丘陵の先端部に築城されており、山田線は館の真下を通っている。主郭は東西約85ｍ、南北25ｍの楕円形を呈し、中央の八幡神社がある個所でやや高くなっており、標高約140ｍを測る。主郭は急峻な崖につくられており、やや傾斜の緩やかな東方先端部には３～４段の小さな腰郭が設けられている。基部は三重の広い空堀で切断し、背後の通路を断っている。本館はかなりの要害の地にあり、現106号線が弁牛和尚によって開削される以前はこの空堀が山越えの通路となっていた。また、『東奥古伝』に常の屋敷跡と記されている上館は館の真下に現存する。腹帯館の館主は閉伊氏の一族である腹帯氏であることは知られているが、その築城時期は詳らかでない。館の下に応永三年（1396）の供養碑があることから、室町時代初期までは遡る可能性がある。なお、明治40年頃八幡神社新築に際して、鎌倉時代とされる兜が出土している。



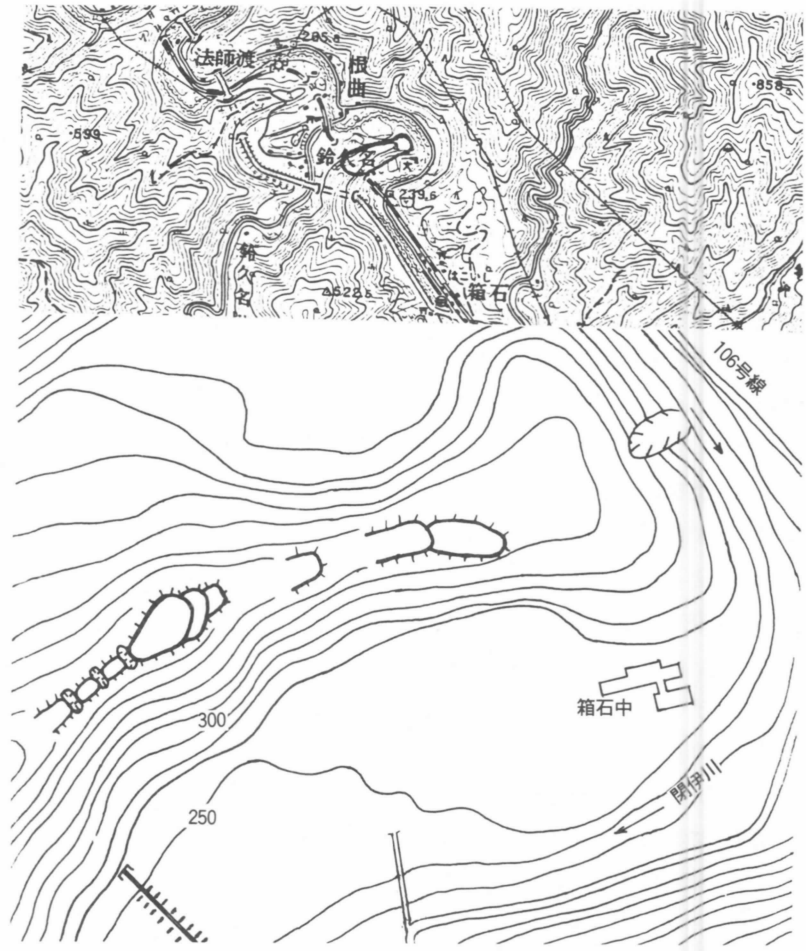

**和井内館**　下閉伊郡新里村大字和井内

和井内館は、国鉄岩泉線和井内駅の北方約700ｍに位置し、刈屋川と安庭沢の合流点に向って延びた丘陵の先端部に築かれている。主郭は最も高い標高約355ｍの地点にあり、現在は館神であったと思われる八幡神社が建てられている。主郭の前方に一段低い平場が設けられ、この二つの郭の周囲には腰郭がめぐらされている。先端部の尾根は南北の二又に分かれ、それぞれ小さな腰郭が３～４段とりついており、北側尾根の最先端には砦状の平場が認められる。背後の基部は、広くて深い空堀で画して通路を断っており、その外側には井戸の跡が残っている。和井内館の館主は和井内氏で、田鎖氏の一族である苅屋氏の系譜によると、苅屋氏の祖上野介高義の子高敏が和井内氏の祖であるとされている。和井内館がこの高敏によって築かれたとすれば、室町時代の終りごろのことと考えられるがなお不明な点が多い。また、本館は刈屋川沿いに押角へ抜ける要路の中央にあたることもあり、戦国時代の戦史にたびたび登場している。



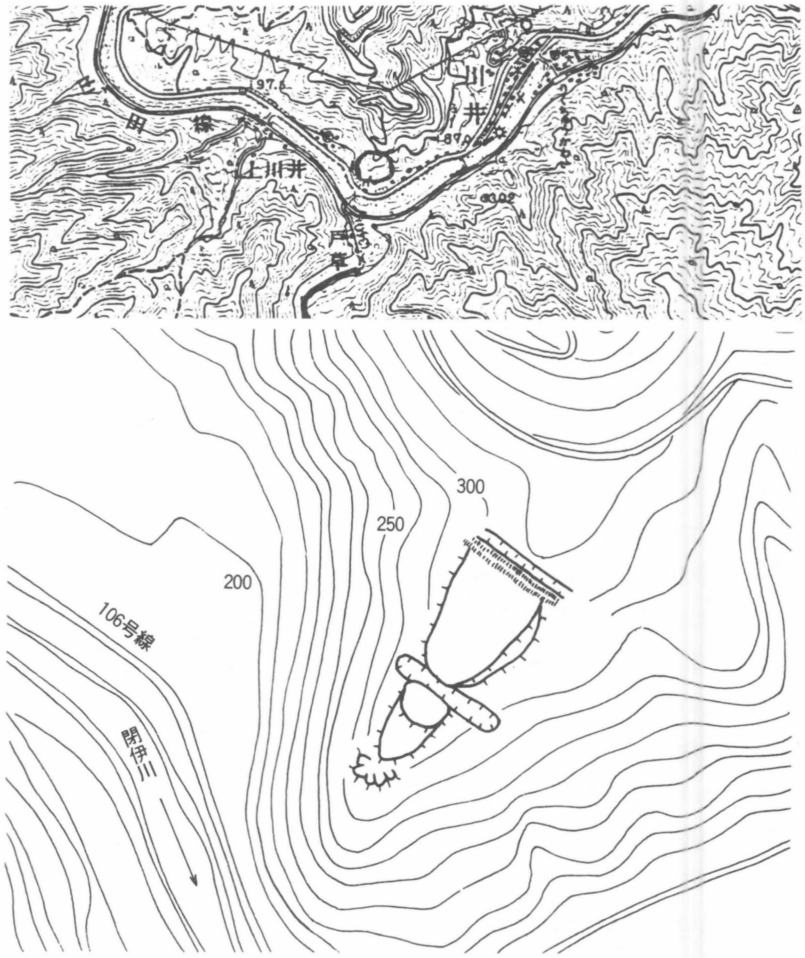
**板本館**(箱石館)　下閉伊郡川井村大字箱石字板本

国鉄山田線箱石駅の西方約1kmの地点、標高331mの丘陵上にあり、館の三方を閉伊川が湾曲して流れている。主郭は東西14.5m、南北13,3mの規模で、南北は険しい崖となっている。主郭の前方東側には二重の腰郭が設けられ、その一つに八幡社の小祠が祀られている。また、尾根の前方、先端部に向かって階段状に2～3段の郭があるものの一部に破壊を受けており、その原形は明らかでない。最先端部には砦と考えられる小台地がある。館の背後では、尾根の基部を深さ2～3mの三重の空堀で区画している。館の真下には閉伊川に沿って閉伊(宮古)街道があり、古くから交通の要所であったことが分かる。板本（箱石）館の築城者等については不詳であるが、慶長3年の『新山大権見修覆の祝祀』の中に、閉伊川筋の土豪河井・河内・苅屋・和井内各氏等とともに箱石左衛門丞の名がある。箱石氏は、『参考諸家系図』によれば、花輪氏の一族で、箱石村に住して箱石氏を称したとされるが、本館との関連は不明である。



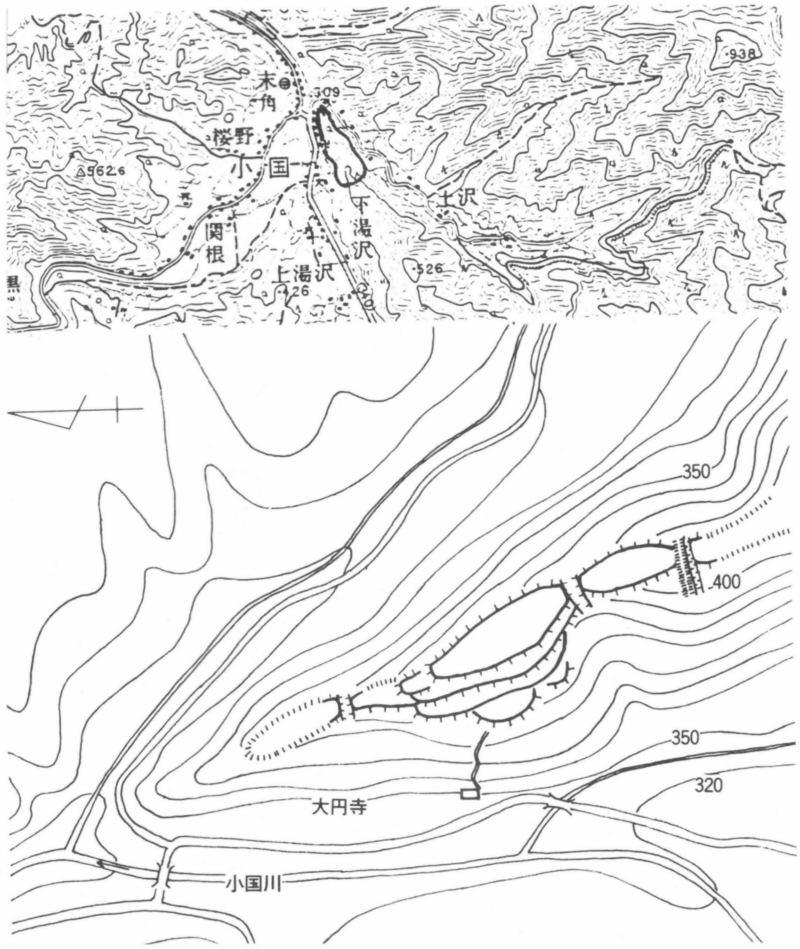

**川井館**(真忠館)　下閉伊郡川井村字上川井

閉伊川とその支流小国川が合流した地点に北側から突出した標高340～350mの丘陵上にある。単郭式の居城で、主郭は南北104.5m、東西86mの広大な面積をもっている。東方には腰郭をめぐらしている。南方先端部では深さ約2m幅約8mの空堀で画し、その先に2重の平場と砦に使用したと考えられる岩塊を設けている。尾根の基部は、深さ2m前後、幅4～5mの空堀で切っており、主郭寄りには掘り起した土を積み上げて土塁をつくって堅めている。土塁は高さ0.6～1m、底部幅約1.5mで、延長80mに及んでいる。川井館は閉伊街道と小国(遠野)街道の落合いという交通の要所にあり、その麓、合流点近くに川井明神がある。『尾崎大明神御本地』等によると、閉伊頼基によって川井村の川井館に封じられた安蘇権太郎重体が、頼基に殉じた霊を祀ったのが川井明神であると伝承されている。また、『新山大権見修覆の祝祀』に、河井薩摩守の名があり、河井氏がこの地方の豪族であったことが知られる。



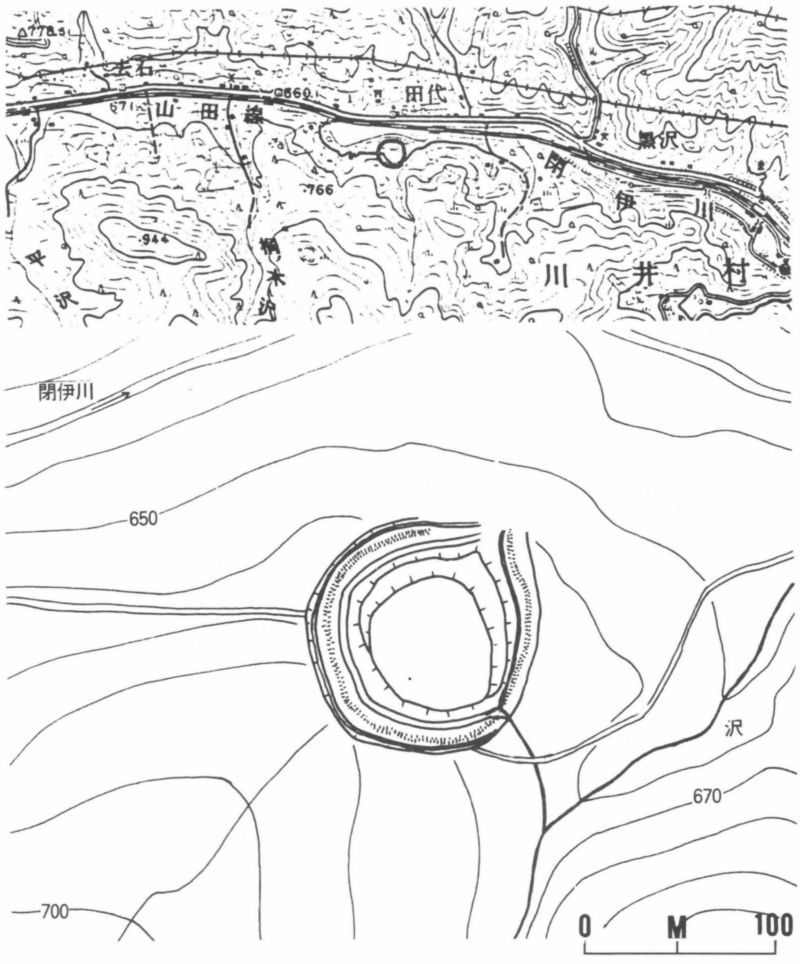
**大梵天館**(小国館)　下閉伊郡川井村大字小国字寺倉

小国川は小国字寺倉で、その支流土沢及び湯沢の谷川と落ち合うが、本館はその二つの谷川に挟まれた急峻な丘陵末端、標高412mの尾根上に築かれており、正法寺二世月泉開基と伝えられる大円寺の後ろ山にあたる。主郭は南北92.9m、東西22mと細長く、西側に三重の腰郭をめぐらしている。その最下段の腰郭と麓の大円寺と急坂でつながれており、大円寺は大手口であったと考えられる。主郭の前は空堀で切られ、物見をかねた砦と思われる小台地が続く。基部は幅6～8m、深さ9.8mの空堀とその土を積み上げて構築した空堀で画され、狭長な郭をつくったあと、再び幅14m、深さ3.6mの空堀で切って主郭に連なっている。大円寺には、小国氏の祖彦十郎忠直が寺を中興したと伝えられており、本館はこの小国氏の居城と考えられる。小国氏は忠直の子左馬助直家、その子彦右衛門直信という系譜をたどるが、江繋氏との争乱によりこの三代で小国からその消息を断つと言われている。




**田代館**　下閉伊郡川井村大字田代字館の沢

田代集落のほぼ真向いの丘陵末端にあり、麓を閉伊川が流れている。主郭は標高668m、水田面からの比高48mを測り、田代集落を一望できる位置にある。本館は単郭式で、南北52m、東西69.3m、円周約186mのやや楕円に近い円形の主郭をもっている。主郭には南端を除いて腰郭がほぼ全周し、北側の広い個所で約9mを測る。主郭・腰郭の東側は、付近を北流する館の沢から水を引き、幅4～5m、深さ5～6mの水ぼりとなっており、その外側には、高さ2.5mほどの土塁が取り付く。北・西・南(基部)の三方は、幅4m前後の二重の空堀と土塁で画され、土塁は二重の空堀の中央にめぐらされている。主郭内には礎石が遺存したと伝えられるが、今は遊園地造成のため残っていない。本館は、区界峠を間近かに控え、西方の拠点となるべき地理的要路にあり、付近には牧場があったとの伝承も残されている。居城者としては、田代安芸と伝えられるが確証はなく不明である。



# (十一) 九 戸 地 区 概 観

九戸地区は本県の北東部に位置する。海岸地帯の種市町、久慈市、野田村では海岸線に沿って一部海岸段丘が分布し、大小の河川域に沖積地、段丘等が発達するが、大半は北部山地に属する山間地帯である。とくに、山形村、普代村などの南部は標高500m以上の険阻な山岳地帯であり、その北部の大野村、種市町は丘陵地帯で、八戸平原の南端に位置する。沖積地や洪積世の段丘が比較的発達しているのは、北から川尻川、有家川、久慈川、安家川などの河川域で、この河川域と海岸段丘に後期旧石器時代以降の遺跡が分布している。旧石器時代の山形村成谷遺跡、縄文時代の野田村根井貝塚、古代の同中平遺跡（県指定史跡）が代表的な遺跡である、古代のこの地方は「続日本紀」の霊亀元(715)年10月29日条の「閉(へい)村」に含まれるとの説もあるが、現在の二戸地方と想定される「爾薩体」とともにその範囲は明確でなく、詳細については不明であるが、古代の幣伊とすれば延暦、弘仁年間（782～824）以降、蝦夷征伐により律令体制に編入されたことになるが、古くは種市町の八木ソデ山遺跡から出土した石製模造品や、最近の研究成果である久慈市周辺の古墳時代の琥珀、同じく霊亀元年の昆布貢献の事実からして、はるかそれ以前から中央との交流があったことを示している。

平安時代後半になると、奥六郡は在地豪族安倍氏の支配地となるが、奥六郡の後方に位置する鉈屋(なたや)、仁土呂志(にとろし)が当地方にかかわりがあるともいわれるが、古代を通じて久慈市周辺は琥珀の産地だったと考えられ、平安時代の遺跡である上野山遺跡から琥珀の製品が出土しているし、中長内遺跡には工房址と思われるものも発見されている。

鎌倉時代以降、当地方は北条氏（久慈郡、糠部郡）、佐々木氏（閉伊郡）など、鎌倉御家人の一族の支配地となる。久慈郡、糠部郡の成立は、平安末期から鎌倉初期と考えられ、久慈郡は久慈川を中心とする地域、種市町と大野村は糠部郡の東門に属し、さらに野田村の一部と普代村が閉伊郡に含められるのであろうか。糠部郡は永正年間（1504～1521）の「糠部九箇郡馬焼印図」により馬産地として知られているが、久慈郡、閉伊郡も同じく馬産地であり、各地で牧が経営されている。

南北朝時代になり、陸奥の国司として北畠顕家が赴任し八戸南部師行が国代になるや、糠部地方は徐々に南部一族の支配地となり、やがて糠部の周辺にまで浸透するようになる。とくに、室町時代以降三戸南部氏の影響が強くなると、当地方でも南部氏の一族である種市氏、久慈氏、三上氏、さらに一戸南部氏の分族である野田氏が支配し、それぞれ種市城、久慈城、野田城、普代城を居城とし、その周辺に一族が配置される。戦国時代末期、三戸南部一族の領主をめぐる争いは、南部信直と九戸政実の確執となり、旧南部領一円に波及し、各地の豪族が敵・味方に分かれて争った。とくに、秀吉の奥州仕置のしめくくりとなった九戸城の攻防には、当地方でも一族が両派に分かれて参戦している。九戸の乱の終結後、南部信直は、秀吉の諸城破却令により領内の城館のうち10郡に12城を残し、36城を廃棄するが、当地方では、種市城、久慈城、野田城を廃棄している。

旧南部領のうち、津軽を除いた全域と和賀郡までの所領を安堵された信直は、不来方城の築造に着手し、強力な近世大名へと脱皮し盛岡藩主となるが、寛文4（1664）年、新八戸藩の創設により、当地方は宇部村（久慈市宇部町）、野田村、侍浜村を除いて八戸藩の所属となる。八戸藩は、農・漁業のほかに塩と鉄の産地としても知られ、藩の政策によりこれを積極的に奨励している。

当地方の城館は70近くを数えるが、館主、存続期間などを推定できるものはいずれも戦国時代末期を中心とするもので、それぞれ主要な河川域で比較的沖積地の開けた段丘や丘陵上に位置する。川尻川の種市城、久慈川の久慈城、野田湾の平野部に位置する野田城がその代表的な城館であり、大規模な堀で区画した戦国時代特有の城館跡で、しかもその周辺に一族の居館がある。一方、海岸地帯から離れた大野村、山形村などの内陸部では、いわゆる蝦夷館と呼ばれる館が分布している。丘陵地、あるいは山地頂部中央に占地し、なかには大野地の蝦夷森館のように平地からかなり離れた標高300m以上の山地頂部に立地する例もある。いずれも小規模な館が多く、平場が極端に狭く、なかには山形村中輪館、大野村牛転ばし林館・蝦夷森館・たてひら館のように、竪穴住居跡様のものを確認できるものもある。占地・構造・形態からも、戦国時代を中心とする城館とは異質なものであるが、現在まで調査例もなく、その内容は不明となっている。

以上の城館のうち、現在の集落内や、集落に隣接して立地する城館は、種市城、野田城のように市街地の拡大に伴ない破壊されていく例が多くなっている。山間地における蝦夷館は、その意味では比較的保存状態は良好であるが、大野村の阿子木館のように、林道工事によって寸断された例もあり、未発見の城館跡を含め早急にその位置を確定すべきであることは言をまたない。

## (ハ) 気 仙 地 区 概 観

気仙地方は岩手県の東南端に位置し、二市二町で構成される。西は東磐井郡、北に遠野市・釜石市、南は宮城県気仙沼市に接し、東は太平洋に面する。県内では比較的温暖な土地としても知られている。

この地域には、古生界・中生界の石灰岩・花崗岩体等が広く分布し、周辺は北の五葉山(1,341.3m)を始め山なみで囲まれる。西の東磐井郡との境界は北上川水系との分水嶺ともなる。水系はこれらの山に源を発し、太平洋へ流れ込む。気仙川・盛川が比較的長い流域を持つ以外は、いずれも小河川である。上記の二河川は、中・下流で南流し、侵食による谷が河口付近まで続き、段丘の発達も悪い。

海岸線は複雑に入り組むリアス式海岸で、多くは断崖が続き、沖積部は河川の河口付近に僅かに見られるだけである。この海岸線は陸中海岸国立公園として指定も受けている。

海に面した丘陵上には、縄文時代の貝塚が多く分布し、その数は県内貝塚の約半数を占める。また、内陸の石灰岩地帯には洞穴遺跡もある。これらの貝塚・洞穴遺跡は、明治期以降、在京研究者を始め多くの人々によって調査が行われ貴重な成果をあげてきた。一方、縄文時代以降の考古学的研究は立ち遅れ、古代の遺跡に発掘調査の手が入ったのは最近のことである。その結果、蕨手刀・毛抜透刀の発見や、土師器・須恵器の出土、その集落の検出など、新知見が増加してきている。また、延喜式内社三社(登奈孝志・理訓許段・衣太手)の存在等からも、古代から開発の手が入っていたことがわかる。

しかし、平安末期の金為時や頼朝平泉征定以降の葛西清重の拝領等の記録には、伝承の域を脱しないものが多い。中世城館に関係する具体的な動向が明確になるのは、正和4(1315)年、千葉広胤の矢作居住以降であろう。このことは、建治3(1277)年銘(大船渡市赤崎町中井)を最古とし鎌倉後期・南北朝期を主とするこの地方の石塔婆類の建立年代の傾向とほぼ一致する。矢作千葉氏は馬籠合戦(1336)等を経て、葛西氏の庇護のもと気仙地方の盟主的立場を確立して行く。南北朝以降はこの葛西家臣、千葉氏一族等により多くの城館が造営された時期で、岩手県史所載の千葉氏大系図等には、各地区の城館主名を見ることができる。また、葛西氏は領地北辺の守りとしてこの地域を固め、文明17(1485)年南部氏の有住郷侵入(有住合戦)以降には、佐々木氏が田茂山城に入り、前後して村上氏・新沼氏等も居住した。

その後、天正16(1588)年、米ヶ崎城(陸前高田市米崎町)の千葉安房守広胤が、本吉氏との対立の裁定に不満を抱いて乱を起し、葛西晴信に鎮圧されている。これは「晴信の代の葛西領内最大の反乱」(岩手県史)といわれ、翌年の浜田刑部・大和田宮内少輔の動き等もあり、葛西氏崩壊の機はこの気仙地方で一速く熟していたことがわかる。

天正18(1590)年、豊臣秀吉の第一次奥羽仕置、翌年伊達政宗による葛西・大崎一揆の鎮圧に係る深谷糠塚(宮城県河南町)での降伏者の謀殺等で、この地方の城館主達は壊滅的打撃を受けた。古記録には、前者により「南部へ浪人ス」、後者を「於深谷被誅」と記され、「古城書上」(延宝年中(1673～1681))に記載の気仙郡27城中12城の城主が深谷で討たれたとある(気仙郡古記では18館主とする)。

その後、気仙には文禄1(1592)年長部二日市館(陸前高田市気仙町)に伊達家臣鈴木宗記が城代として赴任する。次の城代中島大蔵の時、政宗の上杉領白石城(宮城県白石市)攻略に、「気仙三十六騎」が鈴木・中島の指揮の下、出陣したという(慶長5(1600))。この中に大肝入臼井囚獄(三右エ門)の名も見える。臼井氏は猪川城(大船渡市猪川町)に関係するが(気仙風土草)、他の人々の系譜、居住城館等は不詳な点が多い。後年、城代は高田城へ移り(1626)、寛永8(1631)からは城代廃止、大肝入制導入が行われ、城館主を基本とする支配体制は終焉した。

さて、気仙地方の古城館に関する史料は、「古城書上」を始め、「気仙郡古記」(成立年代不詳)、「気仙風土草」(1761)、「封内風土記気仙部」(1764)や、「封内名蹟志」(風土記書出」等があり、また明治になっても「気仙郡村誌」(1880)、「気仙郡誌」(1910)等に、貴重な記載がなされている。

このような記録や伝承により、多くの城館跡が伝えられている。その分布の傾向を見ると、河川沿いの丘陵先端に立地するものと、海に臨む岬・半島・丘陵に立地するものとに大別できる。また、矢作川流域の金山に関係すると思われる遺構群も注目される。この地方の産金は平安期に遡るといわれ、矢作川流域以外にもそれに関係する遺構が分布する(大船渡市・猪川城)。

中世から近世にかけ、この気仙地区は、葛西・伊達の北辺の地として、また産金等の点でも、政治的・経済的に重要な地区であった。しかし、冒頭に触れたように平地の少ないこの地方にあっては、丘陵部が宅地等に利用、造成される機会が多く、近年特にその傾向が強まってきている。